



# ココロノコドウ

幹谷 セイ

みきやbooks

## 1. 始まりのココロノコドウ

---

「あなたの平常心に惚れました。私と付き合ってください」

目の前の少女は、ほんのりと頬を紅潮させ、恥ずかしそうに切り出した。

おちあい こめと  
落合 米斗は無表情で、少女と向かい合っていた。健全な高校男児ならば、突然目の前に現れた可愛い小動物みたいな女の子に告白されれば、緊張してみたり照れてみたり、心躍らせてみたりするものだが。

動じていなかった。米斗には動揺も焦りも、恥じらいもなかった。それが米斗にとって、普通の対応なのだった。

ズシン、ズシン。

地面が揺れた。二人の立っている場所は、二つの校舎を繋いで架けられた、屋外渡り廊下のど真ん中。

振動が一番激しく、危険な場所だ。

にもかかわらず、米斗は驚きも慌てもしない。普通にバランスをとって直立している。

目の前の少女も、同じだった。最近頻発している小規模な地震群の起こす揺れに慣れてしまっている。今くらいの軽い余震なら、驚かなくなっていた。

今の揺れは、どちらも震度2くらいだろうか。

特に気にもせず、米斗は少女に返答した。

「いいよ、断る理由もないし」

断る理由もなければ、承諾する理由もないのだが、無闇に小動物を傷つける行為を嫌う米斗に、迷いはなかった。

少女は俯きがちだった顔を上げ、嬉しそうに笑った。

「本当に？ ありがとう！」

少女の頬が、林檎みたいに紅潮する。

ズドン。

直後。激しい振動が大地を襲った。

「うおうっ」

渡り廊下が、上下に激しく揺れだす。トランポリンの上にいるみたいな感覚に陥り、米斗も上手くバランスを取らないと、立っていられなかった。

少し不意を付かれたが、驚くほどではなかった。自然の脅威とは、前触れもなくやって来るものだ。

振動は治まった。今のは震度4くらいあっただろう。

「大丈夫？」

体勢を立て直した米斗は、手すりにしがみついた少女を気遣った。流石に慣れているとはいえ、今の一撃は、結構きつかっただろう。

少し驚いていたが、すぐに落ち着きを取り戻した少女は、顔を上げて可愛い笑顔を浮かべた。

「うん、大丈夫。ありがとう」

米斗は手を差し伸べる。少女はその手を、ゆっくり掴んだ。

「そういえば、まだ名前を聞いてない」

「有栖 <sup>ありす</sup> 千具良 <sup>ちぐら</sup>です。よろしくね、米斗くん」

晴れて恋人同士になった二人は、手をつないで帰宅の途についた。

☆彡 ☆彡 ☆彡

「よしよし、うまくいったわ」

米斗と千具良の様子を、<sup>ましま</sup>真島 <sup>ぎっか</sup>吉香は渡り廊下から少し離れた場所にある教室から覗いていた

。

生徒たちが帰宅した後の、静まり返った教室。窓側の席で椅子に腰かけ、足を組む。目の前の机に広たノートに、化学式や数式をびっしりと書き連ねていた。

数式は改行もなく、空白もなく、関連性もなく、統一性もない。傍から見れば、暗号にしか見えないだろう。吉香にだけ分かればいい、情報の羅列だった。

「あとはうまく、千具良がああの平常心男のテクニックを盗んで、活用してくれればいいんだけど。その効率性ばかりは、結果を見なければ分からないわね」

吉香は息をつく。

ズドン、震度3の揺れが教室を襲った。

「でも千具良には、少し刺激が強かったかしら……」

流石に慣れているので動じはしないが、少し不安を感じながら、帰路に着く二人を眺めていた

。

## 2. 平常心な弟とストーカーな兄

---

四月初期の朝は、まだ肌寒い。三寒四温でたとえると、二温あたりの暖かさだろう。桜が蕾を膨らませはじめ、あと二、三日後の満開を待ちながら心躍らせている、そんな季節だ。

時刻は七時五十分。登校の支度を済ませた落合米斗は玄関に腰を下ろし、黙々と靴紐を結んでいた。

別に急いでいるわけでも、のんびりしているわけでもない。ただ坦々と、整ったペースで機械的に動いているだけだ。傍から見れば、その姿は味気なさすぎて逆に不自然に映るかもしれないが、米斗にとっては至って普通の日課だった。

「ほひ、ほへほ、ほふふいふほは？」

背後から、どこの国の言語にも属さない謎の声が聞こえてくる。振り返ると、スーツ姿の、男の姿があった。ネクタイを締めながら、食パンを口に突っ込んでいる。

米斗を少し大人っぽくした感じの顔立ち。長身ではないが、バランスの取れた肥満でも、もやし体型でも筋肉質でもない、普通の体型の若い男。

米斗の兄、落合 <sup>ほくと</sup> 北斗だった。

「『おい、米斗、もう行くのか？』って？」

「うん」

血の繋がった兄の発する、解読不可能な言語を、米斗はものの見事に翻訳してみせる。北斗は頷いた。

「珍しいな、いつもより十分も早いぞ」

素早く食パンを食堂に通し、北斗は驚いている。マイペースな米斗は、いつも八時きっかりに家を出る。突然登校時間を早めるなんて、北斗にはとても不思議な行動に思えたのだろう。

「どういった風の吹き回しだ？ ひょっとして、宿題を持って帰り忘れて、焦ってるのか」

教科書にも無関心な米斗は、テスト期間以外は常に置き勉をする。他の生徒にもいえる話だが、特に必要のない教科書やノートは、机の中や下駄箱に置きっぱなしになっているのが今や常識だ。

そんな訳で米斗の右肩に背負われているリュックには、大ききの割りにせいぜい筆記用具と財布くらいしか入っていない。社会見学に行く小学生のほうが、もう少しましな荷物を入れているだろう。何をしに学校へ行っているんだかと、北斗はよく呆れている。

だから、その日に出された課題などを間違っ<sup>て</sup>置いて帰ってしまうと、次の日に学校へ行くまで手をつけられない。北斗は米斗が珍しく急いでいる理由を、宿題忘れだと推理したわけだ。

「まあ、そう思うならそれでいいけど。兄貴はいつもどおり出ればいいさ。じゃあ、行ってきます」

靴紐を結び終え、米斗は普段と同じ足取りで、ゆっくり家を後にした。

☆彡 ☆彡 ☆彡

「……何か、怪しいな」

玄関に取り残された北斗は、弟の閉めたドアを見つめ、呆然と呟いた。

北斗は直感的に異常を感じ取り、目を鋭く光らせた。

落合北斗は二十六歳、米斗の通う彩玄第二高等学校で講師として勤務している。担当科目は生物。

朝は決まって、米斗と一緒に登校する。それが一年前、米斗が高校に入学し、北斗が赴任した日からの日課となっていた。

一部では、歳の離れた弟を心配するあまり高校まで追いかけてきたブラコン野郎だとか、半径千メートル以内にはないと気が狂ってしまう変態兄弟、なんて噂も立てられている。人の噂に無関心な米斗は、さほど気にはしていないが、至って真っ当な北斗は、かなりショックを受けたりもした。

それでも、あの何事も平常心をモットーとした弟を心配で気懸りに思う気持ちは真実だ。そんなゴーイングマイウェイな米斗が、それを乱すような行動をとるなんて、どう考えても怪しい。

ただ単に気分転換なのか、反抗期で兄と登校するのが嫌になったのか。

その程度の理由なら、まだいいが。何か平常心を乱してしまうほどの危険な事件に巻き込まれているのでは、という可能性も、なきにしも非ずだ。

深く考えれば考えるほど臆病風に吹かれ、米斗が気がかりで何も手に付かなくなる。何にしても、事実を知るまでは安心して仕事も手に付かない。

だから北斗は、こっそりと米斗を尾行しはじめた。

いつも通り、寄り道も脇見もせず、米斗は黙々と通学路を前進する。その十数メートル後ろを、北斗が歩く。

ガシャーン！

突然、米斗の目の前に、横からビール瓶が飛んできて粉々に割れた。北斗は驚いて体を震わせ、拳動不審に辺りを見渡し、鞆を胸に抱いて警戒する。

「待ちな、この泥棒ネコ！」

「にゃあ！」

続いて瓶の飛んできた方向から、魚を啜えた猫が飛び出してきた。その猫を追いかける裸足のおばさんが、箒を振り回しながら米斗の前を駆け抜けてゆく。ビール瓶の破片を踏んづけて、血塗れになっても屁の河童の執着心だ。

米斗は一度立ち止まって、去っていく一匹と一人の姿を見つめていたが、嵐が去ると何もなかった様子で歩き出した。まったく動揺している様子もない。

米斗にかかれば、突然のハプニングも自然の流れの一部でしかないらしい。

我が弟ながら、素晴らしいまでの平常心。些細な出来事で心臓をバクバク鳴らせている北斗は、自分自身の小心さが馬鹿らしく思えてくる。北斗は米斗に感動と尊敬を覚えた。

一連の様子から見ても、どうやら米斗が無関心な体質を乱されているわけではなさそうだ。ひとまず、北斗は安堵の息を漏らした。

通学路である狭い交差点を右折し、ひたすら進む。このまま行けば、あと十分ほどで学校に着く。

心配は杞憂に終わったらしい。北斗は胸を撫で下ろす。

それも束の間、米斗が足を止め、立ち止まった。

息を呑んだ北斗は、素早く側にあった飲食店の看板の後ろに隠れた。陰からこっそり覗くと、こちらに背を向けた米斗がその場で立ち止まっていた。

遠くてよく分からないが、誰かと話をしている。

相手は誰だ？ 麻薬の売人か、怪しい霊媒師か。

まるで犯行現場を抑えるべく張り込みをする刑事みたいな気分で、北斗は緊張感に浸る。その姿を見て不振そうに、ひそひそと影話を繰り広げる主婦たちが近くを通っても、お構いなしだ。

米斗が歩き出した。進展あり、と北斗は意気込む。良く見ると、米斗のとなりに、ちょこんと小さい人物が一緒に歩いていた。

彩玄高校の制服を着た、小柄な女子生徒。背格好は小柄で、肩上で揃えられた黒い癖っ毛が、外に跳ねている。背中に学校指定の小型カバンを背負い、片手に大きな紙袋を提げていた。

北斗は訝しげに二人の背中を見据える。比較的地味な雰囲気を出すその少女が、一体どここの馬の骨娘なのか、この距離で断定は難しかった。

米斗と何やら、楽しそうに話をしながら歩いている。ちゃっかり手なんか繋いじゃって、どこからどう見ても仲の良い恋人同士だ。北斗は少し妬けた。

「ちくしょー、米斗め。彼女いない歴二十六年の兄を差し置いて、女の子と並んで歩くな  
んて……」

米斗が幼かった頃から、自由な時間は全て削って弟を見守り続けてきた北斗に、彼女を作っている時間の余裕は、なかった。こうやってしまうと、まるで米斗のせいだと言っているみたいに聞こえるので、表には出さずに控えているが。

別に、米斗に頼まれて追いかけて回しているわけではないのだから、大人の平常心を働かせて乗り切る。

しかしながら、米斗の性格からして、あまり彼女に表立って感情や態度を見せる真似はしないだろう。どう言った経緯で二人は今の関係になったのか。さらに、あの少女は反応の薄い米斗と一緒にいて、楽しいのだろうか。色々な疑問が浮かんでくる。

少女が北斗に横顔を見せた。楽しそうに笑っている。

目をくわっと開き、北斗はその姿を必死で凝視した。幸い、少女は北斗が授業を担当しているクラスの生徒だった。普段から目立たない娘だが、顔も名前も一応、把握している。

「三組の、有栖千具良だな。でもクラス違うし、どこで知り合ったんだ？」

北斗が腕を組んで考えていると、誰かが後ろから、ポンと肩を叩いてきた。

「何だよ、今急がしい……」

集中を乱され、北斗は文句タラタラに振り返った。眼前には、いかにも不審そうな目を向けてくる、早朝パトロール中の警官がいた。

「ちょいと、署まで来てもらえるかな？」

年季の入った、口髭がダンディーな厳つい警官だった。鋭い目で睨みつけられ、北斗は一瞬、動きを止める。だが、北斗自身の置かれている状況に気づき、脂汗を流し出し慌て始めた。

「えっ、あのっ？ ええー!? ちょい待ち、誤解です、違うんですって、誰か助けて！」

米斗ー!!」

叫びも空しく、北斗は腕を掴まれて、最寄の派出所へ連行された。

### 3. 千具良の涙

---

誰かに呼ばれた気がして、米斗は振り返った。だが特に知った顔は辺りには見当たらず、空耳だろう、とあっさり断定した。

「どうしたの？ 米斗くん」

米斗の隣で、その行動を不思議がり、可愛い仕草で首を傾げる小柄な少女がいた。

有栖千具良、十六歳。米斗と同じ高二で、米斗の隣のクラスに籍を置いている。

昨日、千具良に告白された。米斗はOKを出し、二人は付き合い始めた。いつもより早く家を出た理由も、一緒に登校する約束をしたからだ。

小動物みたいに小刻みな動きが可愛いが、控えめで大人しく、目立たないので地味な印象を持たれやすい少女だ。

それが、いくらか千具良と会話をしてみて、米斗が感じた第一印象だった。

「何でもない」

簡潔に返答し、米斗は千具良の手を握って、また歩き出す。最初は米斗の行動に戸惑っていた千具良も、だんだん気にならなくなってきたのか、表情を笑顔に戻して米斗の隣を歩く。

移動中は意外と気がつかないものだが、数十秒ごとに連発して、地面が振動していると、米斗は気付いていた。ほんの震度1、2弱、建物の中でじっとしていても気付かない人は気付かない、些細な揺れだ。

最近、やたらと群発している揺れが、近いうちに大災害を引き起こすかもしれないと、朝のニュースで言っていた。町の自治体や役場では、ちょっとした騒ぎになっているらしい。

もちろん、そんな自然運動の一環なんて、米斗にはさほど興味はなかった。

地震や台風、火山噴火などで引き起こされる『災害』と呼べるものは、人間の住んでいる土地で起こるから『災害』なのであって、誰もいない無人島や海の上で起こったって、ただの地球の営みに過ぎない。

その程度の出来事に慌ててジタバタするなんて、地球で暮らす生物として馬鹿馬鹿しい。そういった思考を持って、米斗はこの世界で生きていた。

面倒くさいし、理解もしてもらえないので、そういった考えを誰かに話したためしはないが。だから、この先も、誰にも話さないだろう。家族にも、友人にも、並んで歩いている彼女にも。

「あの、米斗くん。今日ね、早起きしてお弁当作ってきたの。よかったら、食べてくれるかな……？」

恥ずかしそうに、千具良が口を開いた。

ズシン、少し大きめの余震が、立て付けの悪い弁当屋の看板をぐらつかせた。

気にも懸けず、米斗は頷いた。

「ああ、飯代が浮くしな。食べるよ」

「本当？ よかった！」

千具良が笑うと、米斗は何だか不思議な気持ちになる。まるで行きつけのペットショップで、売れ残って隠居生活を送っているウサギのミッピーに笑いかけてもらえているみたいな、何とも

微笑ましい気分を感じられる。実に和やかだと、米斗は思った。

「嬉しいな、誰かに喜んでもらえるって。米斗くん、すごくいい人だし、まだ付き合い始めて一日も経ってないけど、すごく楽しくて、楽しいのに……」

千具良は笑っていた。笑っていたけど、目尻に涙が浮かんでいた。立ち止まって米斗の手を離し、頬を伝う涙を拭き始める。だが止まる気配はなく、努力も空しく手と頬だけが、冷たく濡れていく。

ハンカチを持っていない米斗は、制服のブレザーの下に着ているセーターの袖で、千具良の目尻を拭いてあげた。

「ご、ごめんなさい、何だか急に、涙が止まらなくて……」

「悩み事か？」

単調に訊ねる。千具良は返答を沈黙で返し、俯いた。

「俺には言えない悩みか」

千具良は、小さく頷いた。そして消え入る声で言った。

「今は……ごめんなさい。」

彼女に悩みを打ち明けてもらえない彼氏と言うのも、何だか空しいものだが。

まだ付き合い始めたばかりだし、米斗は気にしていなかった。たとえ付き合い始めて何年経っても同じ状態だとしても、米斗は気にしないだろう。

「いいさ。でも、話してもらえないなら、俺は何もしてやれない。千具良が泣き止むまで待つて遅刻するか、泣かせたまま学校へ連れて行くか、それくらいしか」

米斗の話を知ると、千具良は魔法の呪文でも聞いたみたいに、ぴたりと泣き止んだ。このまま泣きじゃくった状態で登校なんてしたら、一緒に歩いている米斗が白い目で見られると、瞬時に理解したのだろう。

まだ目尻は赤いが、嗚咽も止まり、冷静に振舞えるくらいに回復した。

「……ありがとう。米斗くんは、本当に平常心が強いんだね」

「そうかな。でも彼女が泣いていても、慰めの言葉ひとつ掛けられないなんて、普通の人間としては駄目なんだろうな」

「そんなことないよ！ 私は羨ましいな。私もそんな、何事にも動じない心があれば、もっと素直になれたのになって、そう思うもの」

意気込んで、千具良は続けた。

「だから、私にも教えてくれないかな？ どうすれば、平常心を保てる人間になれるのか。米斗くんの前では、何でも言えるようになりたいから、嘘なんて、吐きたくないから」

真剣に訴えてくる千具良の強い眼差しに、珍しく米斗は困った。

## 4. 変人クラスメイト

---

特に悩みさえ持った記憶のない米斗が、他人の悩みについて、真剣に悩む羽目になるとは。学校に着き、千具良と分かれた後、米斗は自分の席でボケーと考えていた。もちろん、千具良の台詞についてだ。

なぜ千具良は、そんなに平常心に拘るのか。確か米斗に告白してきた理由も、「平常心に惚れた」からだった。さほど気にはしていなかったが、今となっては、その真意を聞いてみたい気もした。

今朝、話をして分かったが、千具良は言いたいことをはっきり言えない、気の小さい娘だ。相手の反応を先読みして、どう言った返答をすれば相手が満足するか、自分に不満を抱かないか、そればかり考えているから言葉につまり、本音を心の奥に押し込めてしまう。

確かに、相手の気持ちなんて特に深く考えていない米斗とは、正反対だろう。他人の反応なんて知ったこっちゃない生活を送ってきたため、千具良の考えをよく分かってやれない。

「……やっぱり、考えても分からんもんは分からんな」

悩んだところで、答えなんて出ない。そう結論が出ると、無関心な性質が勝って思考回路が停止した。

考えて分からないのなら、やっぱり千具良から話してくれる時を気長に待つしかない。そのためには、やはり平常心を鍛えてやるべきなのだろうか。

だが、平常心なんて、教わって身に付くものでもないと思う。物心付いた頃から物事に深い関心がなかった米斗だから、自分の人並み外れて落ち着いた性格は先天的なものなのだと、ずっと思ってきた。その本能的な行動を人に伝授するなんて、可能なのだろうか？

再び頭を回転させようとしてボケーっとしてしていると、突然、正面からラリアットをかまされ、米斗は床に椅子ごと倒れた。

「おらぁ、米斗！ テメエ、俺を出し抜いて、いつあんな可愛い娘を捉まえたんだコラ！」

米斗の首に食い込む腕の主が飛び掛り、絞め技を食らわしてきた。体の柔らかい米斗は絞め技の流れに乗って柔軟に体を曲げ、ダメージをうまく軽減しているため、見た目ほど苦にはならない。

だが強制的に思考回路を中断させられて、いささか腹が立ち、珍しく不機嫌さを表に出してみた。といっても、傍から見れば、ただの無表情となんら変わらないだろう、そんな些細な表情の変化は、兄の北斗でないと、きっと見抜けない。

「何をするんだ、武藤」

「やかましい、お前が俺より先に彼女を見つけるなんて、ムハンマドが許してもこの俺が許さん！」

米斗のクラスメイト、一般的に友人、と呼べる部類に入る男子生徒、武藤は鼻息も荒く憤っていた。それでも、プロレス好きの武藤は機嫌が良かろうと悪かろうと日常茶飯時に技をかけてくるので、米斗は今さら動揺する気も起こらない。

ついでに一家揃ってイスラム教徒という日本では限りなく珍しい環境で育ったせいか、世の中

の出来事に不満があると、やたらと教えを笠に着て屁理屈を飛ばしてくる。

無宗教の米斗にとっては、いい迷惑だ。

「武藤、お前のいいところは牛肉を食べないところだけだな」

「それはヒンドゥー教だ！ 俺たちイスラームは豚を食わんのだ。基本的に他の肉も、よほどのことがない限り、食わんがな」

「そうか。別にどっちでもいいけど、生き物は大事にしないとな。イスラム教の豚愛心は俺も見習いたいくらいだ」

「別に豚が好きだから食べないわけではない、汚らわしい動物だから食わんのだ。と言うかお前、イスラム教を馬鹿にしてるだろう」

「いいや、尊敬している。特に断食するところなんかは」

「たいていの宗教はしてるだろう。俺は今確信した、やっぱりお前はイスラム教を馬鹿にしている！」

「奇遇だな。俺も今、自分がイスラム教を馬鹿にしているなと確信し始めたところだ」

「むっかー！ ふざけやがってー！」

「まあまあ、そんなに怒るな、武藤」

「あー腹立つ！ おい富田、お前からなんか言え！」

武藤に話を振られ、米斗の左斜め後ろの席で黙々と読書に勤しんでいた、分厚いメガネをかけた男子生徒、富田が本に葉を挟んで畳んだ。

全身、骨と皮。へろへろの、風が吹けば飛んでいってしまいそうな、もやし体型。牛乳瓶の底のような分厚く濁ったメガネが光り、右斜め前の二人を睨み付ける。

「ならば、僕からも言わせてもらおう。落合くん、君にはオカルト研究部の一員としての自覚が足りないのではないかね？ たかが女なんぞに貢ぐほどの資金があるのなら、その全額を部費として寄贈したまえ」

「そうだ、そうだ！ 俺ん家なんか、不景気でメッカ巡礼に行く旅費もねえってのに！」

友人が二人揃って野次を飛ばしてきた。別に彼女に貢いでいるわけではないが、言っても信用されないので面倒くさい説明は省く。そのまま誤解が続いても困る道理はない。全て時が解決してくれるだろう。

なので、もっと気になった点を口に出してみた。

「富田。オカルト研究部の部員は、お前一人だろう」

「寝言は寝てから言いたまえ、落合くん。君は既にメンバーに盛り込まれているのだよ。武藤くん、君もね」

「俺は、入った覚えはない」

「俺だって、プロレスとムスリム以外に興味はねえ」

「うがー！ 何だ貴様ら、超常現象を馬鹿にするのか！ 最近続いている群発地震は宇宙人からの宣戦布告なのだぞ、これを解読できるチャンスは今しかない、今せずにいつすると言うのだ。そのためには資金も人手も足りん、貴様らの脳を改造して僕の優秀なしもべにしてくれるわ！」

今度は富田が暴れだした。こうなっては、教室にいる誰にも、止めることはできない。三人は

ただ静かに、存在を視界から遮断された。

「こら、お前ら！ また暴れとるんか。HR始めるぞ、さっさと席に着け！」

チャイムと同時に、担任が入ってきて湯を入れた。四十代盛りの威厳たっぷりの体育教師、黒和が怒鳴った。

数年前、この町を拠点にブイブイいわせていた暴走族を完膚なきまでに叩きのめし、追い出したと言う都市伝説も拍車をかけ、校内で黒和に逆らうものはいない。

黒和にかかれば、こんなアホ生徒三人を鎮めるなんて、赤子の手を捻るよりも容易いだろう。

米斗も武藤も富田も、まるで握り潰される直前のハムスターみたいな複雑な心境で、大人しく着席した。

「よーし。では連絡事項からな。今日の一限目、落合先生の授業だが、急用で遅刻されているので自習だ」

「兄貴が？ でも今朝は普通に出勤の準備してたけど」

米斗が疑問を淡々と口に出す。黒和は肩を竦めた。

「さあ、俺も詳しくは知らんが、出勤途中で事件に巻き込まれたとかでな」

「へえ。」

実の兄の身に何が起こったとしても、さほど興味も関心も沸かなかったので、適当に流した。

## 5. 昼休みのひととき

---

昼休み。クラスメイト二人の粘っこい攻撃を、さざ波の如く躲して逃げ出した米斗は、裏庭へ直行した。

裏庭はフェンスに沿って植えられた桜並木が綺麗な、春には最高のスポットだ。何人かの生徒がお花見気分満開の桜木の下に集まって昼食を楽しんでいる。実にのどかな光景だった。

「米斗くん、お待たせ！」

後ろから千具良がやって来た。手には大きな紙袋を提げている。朝からずっと重そうに持っていたものだ。少し気になっていたが、弁当だったとは。

「ごめんね、遅くなっちゃって」

「いや、俺も今、来たところだから」

素早く駆けてくる千具良。かなり急いで来たにもかかわらず、汗もかいていないし息も乱れていない。

何か体育会系の部活でもやって、鍛えているのだろうと、勝手に想像した。

「うわあ、すごい人」

人で溢れかえる桜の下を見て、千具良は啞然とする。米斗もふと、同じ場所を見て気付いた。さっきよりも人が増えている。人混みが好きではない米斗は、こんなむさくるしい場所で昼飯を食いたいとは思えなかった。

「もっと静かなところに行くか」

米斗は千具良を先導して、更に校舎の裏へと歩いていった。

進むにつれて人の数も、桜の本数も減ってくる。千具良は立ち入り禁止の看板を見つけ、米斗に知らせた。

「米斗くん、これ以上先は地盤が緩くなって、建物も老朽化しているから入っちゃダメだよ」

しかし、その程度で米斗は動じない。

「大丈夫さ。それに立ち入り禁止でも何人か入ってきてる」

向こうを見ると、二、三人のグループがすでに食事をとっていた。意外と看板なんて、無視する奴が多いものだ。

「でも、地震が来ると危ないよ？」

「いつもの揺れで程度で危ないなら、もうとっくに崩れてるさ」

米斗は、ずかずかと先へ進んでいく。物事には無頓着だが、意外と言い出したら頑固な性格だったりする。千具良も米斗の性格を理解してくれたらしく、黙って後をついて来た。

盛り上がった土の上に、一本だけ立つ桜。その木の下に、並んで腰掛けた。千具良が弁当を取り出して広げる。

こんな大きな紙袋に入っている弁当とは、どんなものぞやと、少し興味深そうに見た。

その期待は、まったく裏切られなかった。

弁当は、重箱に詰められていた。それも四段重ね。正月のおせち料理でも二段程度なのに、たかが一度の昼食でこんな大量の食事が出てくるとは思わなかった。少々、不意を突かれる。

「みんなの分の、残り物が多いんだけど、良かったら食べて」

「みんなって、家族か」

「……うん、まあ、そんなところ」

「ずいぶん多い家族なんだな」

それとも大食漢の身内でもいるのか。まあいいけどと、米斗は割り箸を割って構え、重箱の蓋を開けた。

中からは、出てくるわ出てくるわ。いったい何人分だと思える料理が、ぎっしり詰まっていた。上二段が巻き寿司とおにぎり、下二段がおかずになっていた。おかずのほとんどが、から揚げや豚カツなどの肉、もとい油料理。草食の米斗には、少し重そうだった。

「あの、あんまり好きなもの、入ってないかな？」

一般人なら好みそうな、栄養がたっぷりの豪華弁当だ。食べ盛りの高校男児なら、喜んでかぶりつきたくなるメニューには違いない。

だが、相手は一般人の常識とはかけ離れた、無関心人間だ。米斗の微妙な反応に、千具良は少し不安を覚えたか、表情を歪めた。

「いや、好き嫌いじゃなくて、あまり肉は食わないようにしてるから」

「どうして？」

「俺に食われた肉たちが、幸せだったのかどうか、俺には判らんからだ」

肉はもともと生き物。牛や鳥や豚や、その他のものにしても、別に人間に食われる権限など、自然の流れの上では持っていないはずだと米斗は考える。それでも家畜は、食べられるために人間に飼育されている生き物。ただ育てて肉を使用せずに腐らせて捨てるだけと言うのは、はっきり言って無駄以外の何物でもない。しかしながら、それを食うべきか食わないべきか、米斗には判断付けがたいし、判断していいものなのかも分からない。

消費者が肉を良く食う。商売になると思って酪農家は肉を育てて売る。そして生産量の増えた肉をさらに頑張って消費者が買って食う。何となく悪循環にも感じていた。昔、よくスーパーの肉や魚売り場に行って、パックに詰められた肉塊を見ては買うかどうか悩んだ挙句、頭がショートして倒れていたと北斗から聞かされていた。

だが、そう言うなら、植物だって同じだ。生きています。食べないと、人間や、他の生き物は生きていけない。

そんな説明をしてみせると、「とても難しい問題だね」と千具良は返してきた。でも、「米斗くんの平常心が出した答なら、いいと思う」と言ってくれた。

だが、言葉とは裏腹に、その表情は複雑そう。何やら余計な考え事をさせてしまっているなと感じ、米斗は少し反省した。

グラリ。突然、小さな余震が辺りを震えさせた。この程度の揺れなら、地盤の緩い場所でも大丈夫だろう。米斗や千具良にとっては大した問題ではなかった。

「考えても面倒くさいし、答えが出るもんでもないから、とりあえず俺は、極力食わないようにしているだけだ。別に、千具良が思いつめる必要はない」

千具良が落ち込んでいる姿を見て、米斗は宥めた。

「けど、既に料理された肉を食わずに捨てるなんて、一番やってはいけないと思う。だからして、俺はこの弁当を全部食う。千具良も食えよ」

「……うん」

二人は丁寧に手を合わせた。

「いただきます。」

千具良の料理は、文句なしに美味しかった。

いつも家で炊事をしているのか、とても慣れた手つきで作られた感が、この料理たちから伝わってきた。

これだけ美味しく作ってもらえれば、肉たちも満足だろう。

千具良も、ゆっくり食事の味を噛みしめる度に、嬉しそうな笑顔を見せた。いつもは、忙しさにかまけて、ほとんど噛まずに喉に流し込む乱れた食生活を送っていたらしく、良く味わって食べると、健康にも自然にも良いのだと実感して、感動していた。

「やっぱり、平常心をもった人の考えはすごいね。私も見習わなくっちゃ」

千具良は、しみじみと米斗を絶賛する。それを聞いて米斗は、忘れていた大事な話を、はたと思い出した。

「そうだ、今朝言った、平常心を身に付ける、とやらの件なんだが、俺はもう自覚したときにはこういう性格だったから、どうやったらこんな風になれるのかなんて、方法が分からないんだ」

弁当をたいらげ、満腹の腹に茶を流し込みながら説明する。

「生まれつきのもものかもしれないし、なれる人となれない人だっているのかもしれない。だから、俺がお前に教えてやれそうなことは、今のところない」

「……そっか、そうだよね、やっぱり、私には無理なのかなあ」

千具良は、しょんぼりと肩を落とす。だが、解決策の心当たりがある米斗は話を続ける。

「兄貴に、聞いてみようかと思う。俺より十年近く早く生まれてるんだし、俺が生まれたときからずっと一緒にいるわけだから、俺がいつからこんな性格なのか、とか、何かきっかけがあったか、とか、詳しく分かるかもしれない」

「お兄さんって、北斗先生だよな？」

千具良が顔を上げた。米斗は頷く。

「ああ。今日は何か事件に巻き込まれたとかで学校に来ていないが、まあ、家に帰ったらいるだろうから、聞いてみるよ。何か方法があるといいけどな」

「……うん、ありがとう」

頬を桜色に染めて、千具良が笑う。春の暖かい風が、二人の間をすり抜けていった。

## 6. 大地震

---

そろそろ昼休みも終わりだ。辺りのゴミなどを片付けていると、目の前を数人の生徒が横切った。立ち入り禁止区域の奥のほうで食事をしていた生徒たちが、教室へ戻っていくところだった。

一番後ろを歩いていた男子生徒の尻ポケットから、何かが落ちた。小さく折りたたまれたハンカチだ。

千具良が、拾って落とし主を追いかけた。

「あの、落としましたよ」

男子生徒の背中に声をかけ、呼び止める。そしてハンカチを差し出した。

「あっ、本当だ。拾ってくれてありがとう」

自分の粗相に気付き、振り返る男子生徒。

その顔は、なぜかは分からないが、のっぺらぼう。

「……………」

千具良は固まっていた。硬直した手からハンカチを抜き取り、のっぺらぼうは頭を下げた。

「どうもありがとね。それじゃ」

何事もなく、去っていった。

風が吹き荒ぶ。桜の花びらが散って、流れていった。

米斗も千具良も、しばらく石像みたいに立ち尽くしていた。

米斗は、のっぺらぼうを見たところで、世の中にはいろんな顔の人間がいるもんだ、くらいにしか思わなかったが、千具良は何を思って固まっているのだろう。

声を掛けるべきかと思った直後。

ズズズズ……。

長時間にわたる、横揺れが地面を襲う。

「!？」

この揺れには米斗も、少し慌てた。バランスをとろうと踏ん張る。千具良は、揺れている現実にも気づいていなさそうだった。

「これは、大きい地震の前触れだ。確かP波と呼ばれる初期微動だと兄貴に教えてもらったことがある。砂漠に住むサソリやアリ地獄などの生物は、この波長で獲物を探しているのだとか何だとか。そんな話は、この際どうでもいいか」

冷静に、ことの次第を分析してみた米斗だったが、詳しい知識を持っていても実際に揺れに遭遇すれば何の意味もたないと、馬鹿馬鹿しく思えた。

揺れは、だんだん激しくなる。本能的に、まずいと思った。

その瞬間。

きた。

ズガガガガン!!

強烈な縦揺れ。自由に動かない体を、倒れないように踏ん張るのが精一杯だ。まるで、世界の

終わりを連想させる、すさまじい音と振動。少し遠くから、他の生徒の悲鳴も聞こえてくる。

足元の地面が盛り上がる。地盤が緩み、液状化した泥土から桜の幹、木の根が顔を出し、バランスを崩して倒れてきた。

迷うことなく、千具良めがけて。

「千具良！」

米斗は重箱を投げ出して千具良を押し飛ばし、スライディングして覆いかぶさり、地面に伏せた。

「う、いたた……。あっ、こ、米斗くん！」

地具良の声に反応して起き上がり、辺りを見て事態を把握した。何十年もかけて大きく伸びた立派な桜の巨木が、ものの見事に横たわっていた。あのまま下敷きになっていれば、確実に助からなかっただろう。

米斗は全身、砂埃だらけになっていた。腕を擦り剥いたらしく、傷みが走る。気付いた千具良が、青褪めた顔で米斗に飛びついてきた。

「ごめんなさい、米斗くん。私、驚いて、頭の中が真っ白になっちゃってて……」

千具良は泣き出した。自分のせいで米斗に怪我をさせてしまった。もっとしっかりしていれば、こんなことにならずに済んだのに、と自責の念に駆られている。

「大丈夫だ、どこも痛くない」

米斗が淡々とした口調で無傷を告げるも、千具良は、しばらく泣き続けた。何度も何度も、ごめんなさいと謝りながら。

米斗は千具良が落ち着くまで、じっとしていた。次に大きな揺れが来ても、周囲に倒れてきそうな危険なものはないと判断して、いつも以上の余裕が戻った。

遠くで校内放送が流れた。

『大きな地震が発生しました、全校生徒は直ちに教員の指示に従って、順序良く速やかに避難してください。これは避難訓練ではありません。繰り返します……』

☆彡 ☆彡 ☆彡

ニュースによると、さっきの大地震は震度6。震源は彩玄町。ここ数日群発していた地震の中では特に大きな、危険な地震だった。津波の心配はなし。築年の古い、老朽化した建物には被害が出たかもしれないが、時間も時間だったため、大きな災害には発展しなくて幸いだった。

学校のテレビが映るので、停電はしていない。調理室や理科室でも点検が行われたが、ガスや水道にも損害はなかった。

米斗の家も、亡くなった祖父の代からある、大きくはないが古い家だ。潰れていないか少し心配だったが、昼間は誰もいないので、安否を気遣う心配はない。仮に北斗が帰っていたとしても、家に押し潰されるほど間抜けな兄ではない。

そうなってくると、米斗の心配の種は、自然とある一点へ向かっていった。

臨時集会のあと、早く下校できた生徒たちは、慌てて帰宅の途へついていく。

「千具良、俺は家に帰る前に行かなくちゃいけない場所があるんだが。お前は どうする？ 家族

が心配だったら、早く帰ったほうがいい」

そんな中、米斗と一緒に帰ろうと駆け寄って千具良に伝えた。地震前後の色々なショックからは立ち直ったらしく、いつもの調子に戻っていた。

千具良は首を横に振った。

「うちは、丈夫だから平気だと思う。私、銀行に寄る用事があるから、途中まで一緒に帰ってもいいかな」

家が丈夫なのだろうか、それとも家族が丈夫なのだろうか。何にしても大丈夫らしいので、米斗は頷いて、二人並んで校門を出た。

## 7. ペットショップにて

---

学校を出て、真っ先に米斗が向かった先は、町の商店街の一角にあるペットショップだった。小学生の頃から動物を見るためだけにひたすら通っている、馴染みの店だ。店主とは悩みや愚痴をぶちまけられるまでに仲良しになった。長期休みには、バイトもさせてもらっている。

「俺、この店だけど、千具良はどうする？」

「ペットショップかぁ。急ぎじゃないし、私も少し見ていこうかな」

「見える状態じゃないかもな。……まあ、いいか。じゃあ、銀行にも、後で付いて行ってやるよ」

店の外にまで、中の犬の鳴き声が聞こえてくる。ガラスの押し戸を開き、店の中に入った。

やはり、中はゆっくり、ペットを見ていられる状態ではなかった。大量のゲージや水槽が床に落ちて、足場もないくらい散乱していた。

逃げ出した犬や猫、その他の謎めいた生き物たちがパニック状態を起こして、走り回っている。壁の端のほうでは、隠居ウサギのミッピーがプルプル怯えていた。

「きゃー！ 駄目よ、今ドア開けちゃ！ みんなが逃げちゃうわ！」

店主らしき人物の悲鳴が聞こえた。米斗が開けたドアの隙間から、一匹のチワワが飛び出そうとした。米斗は素早く、慣れた手つきでチワワを掴み、店の中へ戻した。

「あらあ、誰かと思ったら、コメちゃんじゃないの！」

店の奥から、巨大な影が姿を現した。狭い店内には不釣り合いな、露出度の高い筋肉質な肢体の、丸刈りで長身の男。そのムキムキの腕には数匹の犬猫が脇に挟まれた状態で担がれている。男の汗が放つ、むさくるしい湿気と体臭に包まれた犬猫たちはパニック症状を起こし、男の腕から逃れようと必死にもがいていた。

「おっす、店長。久しぶり」

「ホント、春休み以来ねえ。元気してた～？ なんて、和んでる場合じゃないのよね。遊びに来てくれたところ悪いんだけど、この子たちを檻に入れるから、手伝ってくれないかしら？ アタシだけじゃ手に負えなくて……」

「そうみたいっすね」

女言葉を流暢に使う、たらこ唇がチャーミングなマッチョ店長を助けるべく、米斗は荷物を邪魔にならない場所に置いて、腕捲りをする。檻を拾ってショーウィンドウに並べなおし、素早くペットたちの中へ入れた。

ペットたちも米斗にはずいぶん懐いていて、引っ掴まれても大人しくしていた。ペットの配置も並べる順番も全て完璧だと、店長は米斗の仕事っぷりを絶賛した。

「私も手伝います！」

片付いていく店内を呆然と見ているだけの千具良だったが、何か手伝わなければと思い立ったらしく、足元を徘徊していた九官鳥を掴んで持ち上げた。

「ああ、グレートボイスはその奥の棚の上。籠はそこに落ちてる大きいの。とりあえず中に入れて」

米斗がテキパキ的確に指示を送る。「流石だわ」と店長は号泣した。

「ぐ、ぐれーと？ 棚？ 籠？」

グレートボイスとは、この九官鳥の名前だ。混乱しながらも、千具良は足元の大きな鳥籠を拾って棚の上に置き、その中に九官鳥を放り込んだ。ふう、と達成感に溢れた息をついていた。

止まり木に落ち着いた九官鳥が、一声鳴いた。

「オレニホレルト、ヤケドスルゼエ！」

「ぐ、グレートボイス！」

☆彡 ☆彡 ☆彡

一時間後。店の動乱は収まりがつき、いつもの静寂な午後のひと時が訪れた。

「ホントに助かっちゃったわあ、ありがとうね。一休みして行ってちょうだいな」

店長が紅茶を運んできてくれた。お言葉に甘えて、米斗と千具良は店の奥の椅子に腰掛け、休憩する。

「みんな、いつもはとっても良い子なんだけれど、こう毎日毎日、地震が続いちゃあねえ。アタシに似てデリケートだから、すっかり怯えちゃって」

店長も紅茶を啜り、憂鬱な息を吐く。

「魚の容態は？」

米斗は訊ねた。動物たちも気の毒だが、水から飛び出せば命に関わる魚たちの安否が、特に気になった。

店長は切なげに肩を落とした。

「今日の大きな地震。あれで半数、やられちゃったわ」

水は振動をよく伝うため、激しい波動が来ると魚は逃げようと、一斉に水面に飛び上がる。そのまま水槽の外に飛び出して戻れなくなり、死んでしまうケースが多らしい。

後ろの棚の上に、死んだ熱帯魚たちがビニール袋に詰められていた。米斗は棚に歩み寄り、魚たちに手を併せ黙祷。

側においてあった鐘<sup>りん</sup>を鳴らした。チーン。

「明日、埋葬してあげるわ。可愛そうだけれど、ずっと置いておくわけにもいかないしね」

千具良も目を閉じ、魚たちの冥福を祈った。それを見た店長が、目を輝かせて千具良に詰め寄る。

「それはそうと、あなた！ ひょっとして、コメちゃんの彼女!？」

「えっ？ あっ、はい。有栖千具良と申します。米斗くんにはお世話になりっぱなしで……」

まるで米斗のお父様に挨拶をするかの如き勢いで、千具良は深く会釈した。その姿を見て、店長はいやらしく笑う。

「んふー！ や～だもう可愛いわねー。若いって素敵♪ コメちゃん、よくこんな娘ゲットしたわね～。でも残念。彼女がいるんじゃ、もうコメちゃんがお手伝いに来てくれても、あんなことやこんなことやそんなことも、できなくなっちゃうわね～」

「人の誤解を招く発言は、しないでください」

さすがの米斗も否定する。千具良の顔が微妙に引きつった。

「やーだ、もう照れちゃってー。冗談よ、冗談。によほほのほ♪」

店長は珍奇に笑った。千具良も、ぎこちない笑いを返す。そんな千具良に、店長は耳元でぼそりと囁いた。

「でもチグラちゃん、アタシよりコメちゃんと親密になりたかったら、最低でもBまでは行かなくちゃねえ」

ズズン。

震度3強程度の地震が、町を震わせた。店長も千具良も動じる様子はない。さすがは町民、慣れたものだ。ペットたちだけが、この地震に驚き、暴れていた。

「や、やだな、もぉ。店長さんってばー」

「チグラちゃん、初心ねえ」

「あはは」

「によほほ」

「また、魚が死んだ……」

奇妙な笑い話で盛り上がる二人を尻目に、米斗は地震の揺れに驚いて暴れ、金魚鉢のガラスに激突して息絶えた、数匹の小魚を見つめて再び鐘を鳴らした。

チーン。

## 8. 銀行強盗

---

ペットショップを後にし、千具良が向かった先は、駅前の銀行だった。通帳から今月の生活費を引き落としに来たらしい。

「ちょっと待っててね。今、手続きをしてもらってくるから」

千具良は銀行の受付へ向かおうとする。

「引き落としだけなら、ATMですればいいんじゃないか？」

米斗は千具良を呼び止めた。受付で印鑑や身分証明を出して、逐一手続きをして引き出してもらうよりも、ATMでやったほうがずっと楽だ。この銀行にはATMが置いていないのかと思って辺りを見渡したが、今の時代、ない銀行の方がなさそうなものだ。ちゃんと受付の隅のほうにあった。

「私、機械オンチで。使い方がよく分からないの」

千具良は恥ずかしそうに俯く。米斗は千具良を手招きして、空いているATMの前に呼び寄せた。

「教えてやるよ。慣れれば簡単だから」

通帳を入れて、お金を引出す順序を細かく教えた。暗証番号は見ないように目を逸らしたが、金額は見えた。引き出した額は十五万円。高校生が一月に使うお金としては、やたら多い気がする。

「その金、何に使うんだ？」

「私の生活費。全部じゃないけど、今お世話になってる家に渡さなくちゃいけないし……」

「親と一緒に住んでるんじゃないのか」

「うん。このお金は、親が毎月振り込んでくれているものなの。両親はいまブラジルにいるから」

「ブラジル……」

日本の裏側だ。仕事か何かで遠征しているのだろうか。それにしても遠い。

なぜ、娘も一緒に連れて行かなかったのだろうか。少し気になったが、余所様の家庭の事情に口を挟むべきでもない、頭からかき消した。

下宿して一人暮らしをしているなら、それくらいの金額が妥当なのだろうと、勝手に納得しておいた。

引出しは無事に完了したらしく、千具良は機械から出てきた通帳と、封筒に入れた現金を、大事そうに鞆にしまった。

「ありがとう。いつもより、すごく早くできたよ。男の子って、やっぱり機械に強いんだねー。私、感動しちゃった」

千具良に憧れの眼差しを向けられ、米斗は隣のATMで華麗な指捌きを見せる、足元に買い物袋を大量に置いた小太りなおばちゃんを横目を見た。

「まあいいか。いやいや、それほどでも」

余計な茶々を入れて、更に落ち込まれても困るので、見なかったことにした。

すべきことを終え、銀行を出ようと自動ドアの前に立つ。

すると視界が何者かに塞がれ、千具良は立ち止まった。その額には、ピストルの銃口が。  
「おっと、いいタイミングだね。お嬢ちゃん」

千具良にピストルを突きつけた、サングラスの男が鼻で笑った。黒い革ジャンと革パン、いかにも、いかにもそうな長身の男だ。

後ろからもう一人、腰に刀を下げた、黒い着物姿のポニーテール男が入ってきて、天井に向かって一発発砲した。

「主ら全員、その場から動くことなかれ！ 一歩でも動いた者は、こめかみに弾丸を撃ち込むでござる」

なぜサムライ。ピストル使ってるんじゃ、腰の刀の意味がないじゃないか。坂本竜馬のコスプレだろうか。

バキュン、バキュン！

更に発砲。

一瞬にして建物の中が騒然とした。全員が突然の珍客に視線を向けるが、一歩も動かない。

いや、動けないのだろう。男たちいかにも銀行強盗、と言った格好と動作をしているから、尚更に。片方はよく分からんが。

遠巻きの利用客がスマホを翳して動画を撮影し始める。直後、そのスマホが一発の銃弾を受けて吹き飛んだ。持ち主の客は悲鳴を上げて尻餅をつく。

危機管理能力の低下が嘆かれる現代型人類の、典型的な行動パターンだ。殺されたって文句は言えない。

「手を上げろ、少しでも変な動きしやがったら、一瞬であの世行きだぞ」

長身の男が、どすの利いた声で怒鳴った。その場にいた全員が、両手を頭上に上げる。米斗も迷うことなく上げた。

ピンポイントで獲物を狙って命中させる射撃の能力は、かなり高い。このサングラスの男、かなり銃を使い慣れている玄人と見た。下手に反撃でもすれば、後手に回る可能性が大きい。

サムライがピストルで客や銀行員を威嚇しながら、カウンターへ歩み寄る。一番手前にいた、若い女性社員に銃口を向け、黒い大きな鞆をカウンターに置いた。そして隣の窓口にいた気の弱そうな男性社員を怒鳴りつける。

「この中に入るだけ金を入れろ。言う通りにすれば命まではとらぬ。早くするべし！ この娘の命運は、お主にかかって候」

涙目で両手を上げる女性社員。気の弱そうな男性社員は震える手で鞆を掴み、おぼつかない足取りで奥の保管庫へ走っていった。

その直後、長身の男のピストルが火を噴いた。弾丸はカウンターの一番奥に座っている年配の社員の頬をかすめ、壁に突き刺さった。

「妙な真似するなつたところだろうがよお、アァ!？」

「くっ……」

年配の社員は手を上げた。どうやら犯人の目を盗んで警報スイッチを押そうとしたらしい。徒

労に終わったが。

米斗は眼球だけを動かして、千具良のほうをちらりと見た。拳銃からは開放されているが、長身の男の腕で首を押さえられ、身動きが取れなくなっている。首元にはナイフが突きつけられていた。

千具良はまるで、人形になってしまったように動かない。表情もなく、放心状態になっていた。

助けようと米斗が動いたところで、千具良が助かる確率は、ほとんどゼロだ。おまけに米斗までもが無駄な最期を遂げる可能性のほうが、極めて高い。持ち前の平常心こそ保てているものの、何もできない現状に、無意識に歯軋りしていた。

数分後。ただならぬ緊張感の中、気の小さそうな男性社員が、満パンに膨らんだ大口鞆を持って出てきた。震える手で、それをサムライに渡す。

「うむ、ご苦労だった」

鞆を受け取り、サムライは長身の男に眼で合図を送る。男は頷き、千具良に突き付けていたナイフを仕舞い、こめかみに銃口を当て直した。

「俺たちが安全な場所へ逃げるまで、このお嬢ちゃんの命は保障しない。もし俺たちがここを出てすぐに警察を呼ぼうとすれば、この可愛い小さな頭が、BANG！ ー」

長身の男が、発砲の口真似をした。若い子連れの女性客が悲鳴を上げて目を閉じた。子供も、泣きながら母親にしがみつく。

「ーって寸法だ。お前らのIQが、サル並みであることを期待するぜ」

サムライが隙のない威嚇射撃の構えをする中、目的を遂げた長身の男は、悠長に外へ出ようとした。千具良を道連れに。

「……ちくしょう」

米斗は消え入りそうな声で呟いていた。何もできず、頭上で硬直した拳を強く握り締める。

千具良が連れて行かれる。もしこのまま、無事に銀行強盗の高飛びが成功したとして、あいつらは千具良を無傷で帰すのか？

千具良が無事に戻ってくる、確実な保障があるのか？

きっと、ない。

そう思考回路が判断した瞬間、米斗の手はゆらりと動いていた。

カチリ。

右手首につけていたブレスレットを、中指を伸ばして外す。それを手に取り、付け根の裏にある小さなボタンを押すと、ブレスレットは十五センチほどの針状の形に変わった。護身用にと、高校入学時に北斗がくれたものだ。何の護身かよく分からず、とりあえずつけていた変なアクセサリーだが、まさかこんなところで活用する羽目になるとは。

それでも、今が使うには最適のタイミングだ。米斗にとって、今一番大事なものを守るために使われるのだ、このブレスレットも浮かばれるだろう。

大きな針の照準を合わせる。狙うは長身の男の右手。ピストルを落とせば、とりあえず千具良が打たれる心配はなくなる。サムライが反撃をしてくる可能性が予想されるが、その対処法を考

えている時間がない。早くしないと千具良が連れて行かれる。

とにかく行動すれば、なるようになる。意を決し、大きな針を構えた。

「むっ、貴様、動くなかれ！」

その些細な動きは、あっけなく見破られた。サムライが米斗目がけて発砲。バキュンバキュン！

咄嗟に米斗は足を折り、体を低くした。米斗の顔面を狙った的確な射撃は、見事に顔だった場所をかすめ、さっきまで華麗にATMを操っていた小太りなおばちゃんの脇を反れて、機械に隣接する壁にめり込んだ。

その一瞬の出来事で、完全に照準が乱れた。米斗はやむなく前方へ向かって針を投擲する。針はサムライの右手をかすめ、その衝撃でピストルと現金の入った鞆を落とした。サムライは呻き声を上げた。

しかしそれより数瞬早くサムライは発砲したらしく、一発の弾丸が米斗のこめかみをかすった。瞬間的に火傷を負った感覚。その後から、じんわりと痛みが広がってきた。

火傷から血が伝う。それでもまったく動じていない米斗自身、とても異質に思えた。

米斗の姿が、千具良の光を失った瞳に映りこむ。息を吹き返したように、千具良の瞳が潤みを帯び、大きく開いた。

「動くなクソガキ！ この女がどうなってもいいのか！」

長身の男の銃口が、千具良に食い込む。今にも引き金を引きそうな勢いだ。

無駄な努力だったのか、全てが空しく終わっていくのか。

米斗は呆然と、千具良の白い顔を見つめていた。

「んんっ？ おいテメエ、何しやがる！」

突然、長身の男が慌てだした。何事かと思えば、ピストルの銃身が白い手に強く握られている。

千具良の手だった。銃身を強く握り締め、ゆっくりとこめかみから照準をずらす。

次に、反対の手が素早く動いた。目にも留まらぬ速さで手刀が繰り出され、ピストルを真っ二つに叩き割った。

「なっ、なんだとお!？」

突然の事に状況判断ができずにいる長身の男。その首筋に強烈な回し蹴りが入った。白く細い、綺麗な足が宙に円を描く。言うまでもなく千具良の一撃だ。急所に衝撃を受け、長身の男は気を失って倒れた。

米斗は呆然と、目の前のアクション映画さながらの現実を直視する。

千具良は止まらない。彼女の鋭い眼光は、側で右手を押さえるサムライにも向けられた。

「おっ、おのれ！ 貴様もしや、くの一か！」

サムライは手の痛みをこらえて、抜刀した。頭になった刀身の輝きは、正に真剣。研ぎ澄まされた刃先が、突風のごとく千具良を襲う。

「食らえ、くの一！ 虎蕨流最終奥義、泰餓斬！」

サムライの剣裁きは、きっとその道の人から見れば一流の一凧ぎだったのだろう。しかし、そ

れはいとも容易く千具良に見切られる。地面に垂直に振り下ろされた刃は、千具良の白刃取りによって動きを殺された。

さらに横へ軌道の流れ、バランスを崩したところに千具良の踵落としが決まる。

あの威厳ありそうな業物が、断末魔の悲鳴を上げ、真っ二つに折れた。

「ひっ、秘刀、土竜丸がっ……！」

これにはかなりショックを受けたらしく、サムライは床に膝をついた。

サムライの側に、千具良が歩み寄る。鋭い眼光は、未だにサムライを捉えて放さない。

千具良とサムライとの距離が十数センチに近付いた時、侍の態度が一変した。

「ははは、愚かな小娘め！ 拙者には、まだ拳銃があるのだぞ！」

サムライは落としたピストルを拾うべく手を伸ばした。しかし確認済みだったその場所には、何も無い。

「探しもんは、これか？」

米斗がサムライの後頭部に銃口を突きつけた。サムライはその感触に焦りを覚え、大量の汗を流す。

「わ、分かった、降参するでござる。早くそれを下ろすべし」

「やだ」

「やっ、やめろー！」

米斗はゆっくり、引き金を引いた。

ガチャリ。

「ギャー！ 無、無念……」

男は無傷のまま失神した。いくら引き金を引いても何も起こらない。既に弾丸は六発、使い切ってしまった。

それを冷静に数えていた米斗は、普通にピストルを拾ってサムライに空砲を打ち付けただけだ。平常心の勝利だ。

店内に静寂が訪れる。それも束の間、すぐに客や店員から拍手の嵐が起こった。

「あっ、あれ？ 私はいったい……？」

その騒がしさに、千具良は困惑した様子で、辺りを見渡していた。

「米斗くん。この騒ぎは何？ 私、何か変なことしたのかな？」

慌てて米斗に訴えかけてくる。もしかして、何も覚えていないのか。

だが、米斗にこの経緯を尋ねたとて、納得のいく返事が得られるはずもなく。

「千具良、俺は感動した」

「は？ え？」

周りの人たちと一緒に手を叩く米斗に、千具良はますます、狐に摘まれたような顔をする。

やがて社員の誰かが呼んだのか、パトカーのサイレン音が近づいてきた。銀行強盗は御用となったことだし、このまま居座って話題に持ち上げられると厄介なので、人込みに紛れて米斗と千具良はその場から立ち去った。

制服を着ている時点でおそらく足がついてしまうだろうとは思ったが、間接的な方が、まだマ

シだ。

「お前、空手部かなんか入ってる？」

逃げる道中、米斗は訊ねた。まだ、何が何だか分かっていない様子の千具良は、首を傾けながら返答した。

「部活じゃなくて、その、お世話になってる家が、道場をやってるの。だからそこで、いろんな武術を教えてもらって……。でもどうして米斗くん、私が武術を習っているって分かったの？一度も言ってないのに」

「んー、まあ、直感かな」

説明が面倒なので、バッチリ戦闘シーンを拝見しましたとは言わず、米斗ははぐらかした。そして千具良を怒らせる言動は、今後絶対にしまいと、心に刻み込んだ。

「すごい。米斗くんには、何でも分かるんだね！ それもやっぱり、平常心の賜物なのかなあ？」

そんなわけがない。千具良は誤解したまま、目を輝かせる。弁明する気もない米斗は、そのまま無回答で話を流した。

翌日、千具良は訳も分からず新聞に取り上げられ、全校生徒の前で表彰されることになる。

## 9. ストーカー兄貴の忠告

あれから、数週間の時間が経った。四月も終わりに近付き、初夏の陽気さえ感じさせる。

米斗はいつものように七時五十分きっかりに家を出るべく、身支度を整えていた。玄関で靴紐を結んでいると、背後から何者かが近付いてきた。

「ほひ、ふぁふぁはふふほふひはっへふほは？」

相も変わらず、翻訳不能な言語を放ってくる。振り返ると、食パンに齧りつきながらネクタイを締めている兄、北斗の姿が。

「『おい、まだ有栖と付き合ってるのか？』って？」

「そうだ」

血の繋がった兄弟の発する解読不可能な言語をものの見事に翻訳してみせる。食パンを飲み下し、北斗は頷いた。

「もういい加減、止めとけ。あの娘と一緒にいたって、不幸にしちまうだけだ」

「何で、そんなにはっきりと断定されなくちゃいけないんだよ」

「だってお前、物事に対して無関心だし。絶対、一緒にいてもつまんないって思われてるって！

ふられて捨てられる前に、さっさとこっちから縁を切っちゃった方が楽だぞ」

二人の関係を知った数週間前から、北斗はずっとこの調子だ。やたらと米斗たちの仲を裂こうと、首を突っ込んでくる。

その理由が、本当に弟を心配してなのか、学校へ行くたびに生徒に浴びせられる第一声が「失恋変態教師」とか「弟と半径千メートル離れてしまったために気が狂ってしまったイカレ男」であることにショックを受けているからなのかは、定かではない。

「千具良は、俺の無関心さが好きだって言ってくれてるんだよ」

「それなんだよなあ。あの娘は、そんな変わった嗜好の娘じゃないと思うんだけどな。お前、絶対騙されてるんだよ、女子の間で流行ってるんじゃないのか？ この娘がこの男を落とせたらン万円とか」

「それでもいいよ、別に。千具良は俺に付き合ってくれって言った、俺はそれを了承した。だから千具良が俺と別れるって言うまで、俺はあいつの彼氏を続けるんだ。余計な理屈は必要ない」

「何て純粹一途で、悩みのない奴なんだ。弟ながら感動していいのか、呆れるべきなのか」

北斗は大袈裟に頭を抱えて煩悶していたが、米斗は何も反応せずに無視した。

「もう出るのか、米斗。彼女さんと待ち合わせか」

北斗の後ろから顔を出したのは、二人の父親、落合 <sup>まさと</sup>昌斗だ。すっかり侘しくなってしまった頭のとっぺんに、無駄と分かっているにもかかわらずやめられない育毛剤を、必死で塗りつけている。頭皮はニス塗ったみたいにテカテカだ。

「親父も、何とか言ってやってくれよ！ こいつには恋愛なんて無理だって」

「米斗、彼女さんは何て名前だ？」

「有栖千具良」

「おい親父！」

北斗の話は、とことん無視。父親は米斗に笑いかける。

「千具良さんか。また家にでも連れてきなさい。男ばかりで辛気臭い家だがね」

「……うん、また。じゃあ行ってきます」

米斗は家を後にした。

☆彡 ☆彡 ☆彡

閉められた玄関を見つめながら、北斗は憤りを隠せない。

「北斗。米斗はちゃんと、自分の道を進んでいるんだよ。お前にはいつもあの子の世話を任せっきりだったから、言えた義理ではないが、もう放っておいてもいいんじゃないだろうか？」

父親のかけた優しい言葉を、北斗は跳ね返した。

「親父は分かっていないんだ、あいつは異質なんだよ。普通の人間と同じようになんて、暮らせるものか！ 何かとんでもない事態が起こってしまう前に、止めなくちゃいけない。だから俺はこうやって……」

「お前は心配し過ぎだ。お前が米斗を世話し始めてから、一度でも米斗が大きな問題を起こしたか？ 米斗は立派になった。お前の教育の賜物だ。だからいい加減、お前も自分自身の幸せについて、真面目に考えたらどうだ」

「俺の心配なんて、必要ないんだよ。とにかく、あいつの日常が平穩であることが、何よりも大切なんだ。俺の人生なんて、二の次でいい」

「父さんには、米斗よりお前のほうが異質に見えるよ。お前は弟を見守る使命があるから、自分のことは何もできなくていいと、思い込んでいるだけじゃないのか。いつまでもそんな体たらくじゃ、天国の母さんが安心できないぞ」

その言葉を聞いて、北斗は胸の奥に鈍痛を覚えた。それは凶星だったからか、それとも、父親にそんな風に思われていたことにショックを受けたからなのか。

両方かもしれないし、どちらでもないのかもしれない。北斗には原因を特定できなかった。

とにかく、胸が締め付けられた。それだけが真実だ。

「そんなつもりは……」

「そう、そんな筈はない。お前には、お前にしか歩めない人生があるんだ。米斗のことは気にせずに、真面目に働いて、いい嫁さんを見つけて、幸せになってこの家を守ってくれば、それでいい。それ以上のことを、父さんは望んではないよ。おっと、もう出勤時間だ。お前も遅刻せんように行けよ」

父親はマイペースに家を出た。残された北斗は玄関に立ち尽くし、しばらく動けなかった。

「思い込み、か……」

そう思われても仕方のない行動は、とってきたのかもしれない。だが、「天国の母さんが安心できる」という観点から見れば、自分のしている努力は無駄でも間違いでもない。そう思えるのだった。

「悪いけど、もう少し俺は粘るよ」

北斗の目が決意に輝いた。

☆彡 ☆彡 ☆彡

いつもの通学路。交差点を右折したその向こうで、いつものように千具良が待っていた。米斗が近づくと、それに気付いて笑顔で手を振ってくる。

今日は千具良の隣に、先客がいた。同じ学校の女子生徒だ。整った美しい顔つきで、黒い髪は長く、要所要所で邪魔にならないようにまっすぐ水平に切りそろえてある。なんだか不思議な雰囲気醸し出す少女だった。

「おはよう、米斗くん。あのね、この子、私の友達の吉香ちゃんっていうの。米斗くんを、私に紹介してくれたのも、この子なんだ」

「紹介？」

米斗は首を傾げた。もともと他の生徒には関心がない米斗だ、あのやかましいクラスメイト以外とは、たいした付き合いもないし、ましてや女子で、そこまで米斗について詳しい奴はいないはずだ。

女子生徒は控えめな微笑を見せ、手を差し出してきた。

「三組の真島吉香よ。初めまして」

米斗はその手を取り、握手を交わした。

「初めまして……ってことは、やっぱり、一度も会ったことないよな？」

「ええ。でも、あなたの評判は嫌でも耳に入ってくるからね。学校一、いえ、世界一の無関心男。すさまじい平常心の持ち主だって。千具良がもっと平常心を鍛えて強い心を持ちたいってずっと言っていたから、あなたはどうか？ って薦めてあげたの。それだけ」

「ああ、成る程」

納得して米斗は頷いた。別にこの少女に腹黒めいたものは感じられない。一瞬、北斗が今朝言った話を思い出したが、それもただの兄の妄想だろうと、容易に受け流せた。

「いざ薦めてみたものの、私はあなたについて何も知らないし、この子の話を聞いているだけじゃ具体的な印象が浮かんでこないから、ぜひ一度会って話してみたいなって思ったの」

「ふーん。で、会ってみて、印象は掴めたのか？」

「ええ、千具良の言っていた特徴そのままって感じで、安心したわ。でも、いまいちその平常心が千具良には反映されていないみたいね」

「そりゃ……個人差があるだろう」

色々な出来事があったすっかり忘れていたが、千具良に平常心の鍛え方を聞かれて、その根本的な原因の追究を、すっかり忘れていた。次に北斗と顔を付き合わせたときには有無を言わず、力づくでも聞き出さなくては。

「頑張ってね。あなたの努力次第で、この世界の命運は大きく変わるかもしれないわ」

「世界……？」

ずいぶんと、でかい口を叩いて、吉香は颯爽と去っていった。

「何だ、いったい」

「吉香ちゃん、ちょっと変わってるから。私たちも早く学校行こう、遅刻しちゃうよ！」

千具良に急かされて、米斗はそれもそうだ、と学校へ向けて歩き出した。

## 10. 千具良VSストーカー兄貴

---

その日の、ある休み時間。

「有栖、ちょっといいかな」

次の授業のため音楽室へ向かおうと廊下を歩いてた千具良を、北斗が呼び止めた。

「はい、何ですか？」

北斗は千具良を階段の裏にある倉庫の前に誘導し、時間もないので一気に切り出した。

「もう、俺も切羽詰ってるからな、簡潔に言うぞ。米斗と別れてくれないか？」

「.....どうしてですか？」

「あいつは本当に何にも興味がないから、あまり長く接触していると、君のような普通の娘は、耐えられなくなると思う.....。なんて言っても、無駄なんだろうな。君はあいつの、そういうところが好きなんだって？」

「はい！ 平常心は世の中の全てを平穩へ導いてくれる奇跡の業です。生涯それを研究し、極限まで極め、素晴らしい未来を作る。それが、袴田流の教えなのです」

千具良は嬉しそうに目を閉じて、合掌した。それほどまでに平常心に強い憧れを抱いているのなら、米斗に惚れても不思議ではないのかもしれない。

「米斗くんは、若くして平常心を極めた素晴らしい人です。私にとっては高みの人かもしれませんが、側にいて、彼の平等的かつ無関心な話を聞いていると、とても幸せな気持ちになれるんです。それに、.....個人的な理由ですけど、今の私はどうしても平常心を獲得しなければならないのです。そんな私の無理を聞いて付き合ってもらっているのだから、米斗くんが私を嫌いになるまで、私は自分の気持ちを貫き通すつもりです」

なんて純粹無垢な娘なんだ。北斗は感動したが、米斗を相手取って感じるには、とてつもない危険思想だ。手遅れにならないうちに、正してやらなくてははいけない。それが教師としての天命だ。

「.....お前たちの気持ちは分かる。だが、あいつは無関心とか平常心とか、そういった人間に理解できる程度の特質性以上に、想像できないほど特異なんだ。側にいれば、いつ危険な目に遭うか分からないよ」

「どう言うことですか？」

「何て言うかなあ。説明が難しいんだけど、.....君はなぜ、あいつがあんなに平常心が強いのか、その理由を考えたことはないかい？」

「ないですね。生まれつきなのかと.....。でも、米斗くんは、平常心を身に付けられるかどうかには個人差があるって言っていました。先生なら、米斗くんがあれほどに平常心を貫き通せる理由を知っているのではないかと、とも言っていましたが、何か確証のある理由をご存知なんですか？」

「.....聞きたいと、思うかい？」

千具良は首を横に振った。

「いいえ、教えてもらえるのなら、米斗くんに教えてもらいます。先生、何だか言いたくなさそ

うだし」

授業開始のチャイムが鳴り始めた。千具良は軽く会釈して、慌てて廊下を駆けていった。

「……何だなかあ。あいつら、純粋なのはいいけど、頑固だよな。本当に」

北斗は呆れて、深い息を吐いた。

「でも待てよ、袴田流って言ったな。袴田ってまさか……」

聞き覚えのある苗字だ。北斗は胃の奥から湧き出てきそうな、いやーな感じに気分を悪くした

。

「おい、兄貴」

「うおっ！ なんだ、米斗か」

頭上の階段の手すりから、米斗が北斗を見下ろしていた。

「もう授業が始まってるぞ、早く教室に戻れ」

「大丈夫だ。次は兄貴の授業だから」

「ああ、そうだっけ？」

「……千具良がここから出てきた。何か変なこと吹き込んでたんじゃないだろうな」

「吹き込んで、無駄だと分かったから止めた」

「ふーん。そうか」

肩を竦める北斗を見て、米斗は納得したらしく頷いた。

「ところで兄貴、ずっと聞こうと思って忘れてたんだけど」

「何だ？」

「俺って、いつからこんな性格なんだ？」

北斗は少しギクッとした。さっき千具良と話していた内容の続きを見計らったような問いかけだ。

「お前、さっきの話、聞いてたのか？」

「さっき、通りかかったばかりだ、聞いてない」

「そ、そうか……」

北斗は咳払いして気を取り直した。

「お前がいつから無関心なのかって？」

「ああ、兄貴なら何か知ってるんじゃないかと思って。生まれつきなのか？」

「いや、生まれたときは普通の赤ん坊だったな」

「じゃあ、いつから」

「いつだろうな。自分で動き回れるようになった頃には、あまり周りのものに興味を持たなくなっていたんじゃないかな」

「そうか、やっぱり生まれつきの性質みたいな要素も、強いのかなのかな。じゃあ、そういう性質のない奴に、平常心とか身に付けさせるには、どうすればいいか知ってるか？」

「何だ、有栖に教えてやるのか？」

「うん。知りたがってるから」

「……もし、ないと言え、あの娘はお前に愛想をつかすと思うか？」

「……そんなこと、言ってみなくちゃ分からない」

「そうか。はっきり言うと、平常心なんてもんは一朝一夕では身に付かない。まして、ある程度脳が成熟して、記憶力が劣ってきているお前くらい年代になると、難しいんじゃないかと思う。お前みたいに、小さい頃から平常心を鍛えてきた奴じゃない限りな。あとは、あまり良くない例だが、世の中の全てに絶望する出来事にでも直面すれば、嫌でも物事に興味がなくなると思うが、そんな酷いことは薦めるなよ。分かったな」

「分かってる。薦めない」

「話は終わりだ、さっさと教室戻れ。俺もすぐ行くから」

頷き、米斗は去っていった。

平常心を得る方法がなければ、千具良の米斗に対する素振りが変わるかもしれない。そのきっかけで、二人の仲が自然消滅してくれれば。

そんな運任せな結果を祈るしかできないなんて。無力な人間だ、と北斗は自嘲した。

「あっ、北斗だ！ また米斗にふられてやがったのかー？」

「変態先生、同じ選ばれた奇人どうし、ぜひオカルト研究会で親睦を深め合いましょう！」

ちょうど側を通りかかった武藤と富田が、茶々を入れた。北斗は怒鳴る。

「やかましい、お前らと一緒にするな！ さっさと教室に戻れ、教室。それと呼び捨てやめろ」

「――と、言うわけで、今の段階で平常心を得るのは、難しいそうだ」

米斗は北斗に教えられたとおりの事実を、千具良に話して聞かせた。「そっか」と千具良は少し肩を落とした。

二人は今、駅前の小さな喫茶店にいた。なんでもここの名物パフェが、今日限り半額になる招待券を吉香にもらったとのことで、千具良が誘ってきた。

細長い逆三角錐のグラスに、山盛りに飾られたチョコレートパフェ。頂上に丸く載せられたアイスクリームをスプーンでつつきながら、千具良は何かを思い出して口を開いた。

「あ、でもね。私、小さいときから、今お世話になっている格闘技の道場に通ってて、その頃から道場の教えで精神統一とか、平常心を少しでも鍛えるための修行はしてたの。それでも、ダメかなあ？」

数週間前、凶器持ちの銀行強盗をいとも容易くお縄にした千具良は、武術の有段者で、空手、拳法、合気道、併せて十五段の持ち主であると言う。その事実には、さすがの米斗も少々、恐怖を抱いた。

そういった武術を使うために集中が必要だと判断した場合、脳が勝手に精神統一状態、つまり平常心を強める信号を送るため、彼女は何が起こってもまったく動じなくなるそうだ。たしかに銀行強盗に捕まったときも、まったく無表情で微動だにしていなかった。

ただ、普段の日常生活の中ではどうしても油断が生まれてしまい、突発的な衝撃を受けると、少なからずとも動じてしまうと言う。そこが千具良と米斗の違いだ。

「なんだ、普段からそんな風に鍛えてるんなら、今からでも何とかなるんじゃないか？ 何をどうすればいいのかまでは、俺には分らんが」

「……そうだね、もう少し考えて、頑張ってみるよ」

千具良は笑った。やる気を取り戻した様子に、米斗も少し安心した。

「そうだ、この後、久しぶりにペットショップに行ってみようと思ってるんだけど、一緒に来るか？」

「ああ、あそこね。うん、また行きたいなって思ったから」

あの巨大地震以来、体に感じるような地震は一度も起こっていないため、ペットも店長も安心して商いを続けている。そろそろ遊びにいても、迷惑にはならないだろう。

そうと決まればと、千具良も少しパフェを食べる速度を上げた。かなり量が多いので、千具良のものは半分ほどしか減っていなかった。米斗はもう食べ終わり、一息ついて休憩している。かなり満腹だ。

千具良も少し気持ち悪くなってきたのか、スプーンを持つ手を止めたその時。

側を通りかかった喫茶店のウェイトレスが、二人の座っている席のすぐ横で、何かに躓いてバランスを崩した。手に持っていたお盆に並ぶ、お絞りと水が床に落ち、コショウの瓶がこちらへ向かって飛んでくる。

コショウの瓶は蓋が緩んでいたらしく、空中で開いて中身が飛び散り、千具良のパフェの上へ

ぶちまけられた。

「ああっ、も、申し訳ありません！　すぐに代わりをご用意いたしますので……」

ウエイトレスは慌てながら、辺りを片付けだす。他の店員も駆け寄ってきて、床を掃除したりと大騒ぎだ。

「あ、あの、もういいです。お腹いっぱいですから……」

もう一つ用意すると言い、千具良のコショウで真っ黒になったパフェを下げる店員を、千具良は慌てて呼び止める。

「ひっくしゅん！」

突然、千具良がくしゃみをした。辺りに飛び散ったコショウが鼻にでも入ったのか、くしゃみを連発する。

「くしゅん、くっしゅん、へっくしゅん！」

ズズン、ズシン、ズシン。

小さな余震が数回、店を振る寄せた。震度3くらいだろう。決して大きなものではないが、連発する振動に店の中はどよめき、軽いパニック状態となった。客の中には慌てて机の下に避難するものもいるし、食事中の人は料理がこぼれないように必死で食器を抑えている。店員たちも更に混乱して床に這いつくばったり、壁や柱にしがみついたので、やっただ。

「へくち、はうっくしょん、くしゅん！」

ズズン、ズズズン、ズシン。

パフェのグラスが倒れないように支えながら、その様子を冷静に伺っていた米斗だったが、ふと妙な事実気付いた。

何だか、千具良がくしゃみをするたびに、地震が起きている気がする。偶然だろうか？

くしゃみも止んだらしく、呼吸を整えて鼻をすする千具良。それと同時に、地震もぴたりと止んだ。連発地震が収まり、店内の人々は安堵の息を漏らす。

「……大丈夫か、千具良」

「うん。吃驚しちゃった。くしゃみが止まらなくなって……」

恥ずかしそうに笑う。その表情からは、自分が地震を起こしている、なんて反応は読み取れない。

千具良自体、気付いていないのか。それとも米斗の勘違いか。

よく分からないまま、店員に意図を伝えてお金を払い、二人は店を出た。

☆彡　☆彡　☆彡

「……やっぱり、いまいち進歩がないわねえ」

駅前喫茶店内の騒動を、遠くの歩道橋から双眼鏡で観察する、一人の女子高校生。黒い長髪を要所要所で邪魔にならないように、まっすぐ水平に切りそろえた綺麗な少女。有栖千具良の友人、真島吉香だ。

双眼鏡から目を離し、途方に暮れて息を吐く。

「しかも、今の奇妙な揺れ方は、感付かれたんじゃないかしら。そろそろ隠し通すのも限界かもね。マスターに知らせなくちゃ」

双眼鏡を鞆にしまい、吉香は颯爽と駅前から姿を消した。

## 12. 誘拐

二人がやってきたペットショップ。平穏な日常が続いていたはずの店内は、またもやパニック状態になっていた。

以前ほど酷くはないが、さっきの連発して起こった中規模な地震に怯えた動物たちが、オーケストラのごとく大声を上げて鳴き叫んでいる。中に入った途端、あまりの音の衝撃に、千具良は耳を塞いでいた。

そんな中を、米斗は平常心丸出しで奥へ進んでいく。米斗が横切るたびに、ゲージの中のペットたちは次第に落ち着きを取り戻して鳴き止んでいった。

「すごい、カリスマオブアニマル……」

動物たちにとって、米斗は癒しをもたらすアロマセラピーの如き存在なのだろう。千具良が後ろで、すごく感激していた。

「ああん、コメちゃん！ 来てくれて助かったわあ！ 本当にどうしようかと思ってたのよ。みんな混乱しちゃって、アタシが近付くと更に激しく鳴いちゃうのよ」

半泣きの店長が奥から飛び出してきて、米斗に抱きついた。側にやってきた千具良の表情が、少しだけ強張る。

震度1弱の余震が起こり、ペットたちが動揺した。

「もう鳴き止んだから、大丈夫でしょう。魚は？」

「また、何匹か死んじゃったわ。もう魚を取り扱うの、止めようかしら。大赤字だわ」

憂鬱そうに、店長は息を吐く。ふと、千具良が立っている姿に気付き、パッと米斗から手を離れた。

「いらっしゃ〜い、チグラちゃん。また、ゆっくりして行ってね」

「はい、お邪魔します」

ぺこりと千具良がお辞儀をすると、店長は笑って奥へ茶を煎れに入ってしまった。

ふと横を見ると、檻の中の子犬が、こちらを向いて尻尾を振っている。小さな柴犬だ。

「こんにちは。元気にしてたかな？」

千具良が、子犬と目線を合わせて姿勢を低くし、笑いかけた。子犬はキャンと鳴いて、また尻尾を振った。

ペットの個体によって性格は様々だが、千具良のほんわかした雰囲気には落ち着けるものがあるらしく、基本的にみんな千具良にすぐ懐いていた。

まあ、こんな可愛い娘に笑いかけられて警戒する生き物は、早々いないだろう。奴らが怯えるものといえば、地震の揺れと、ここの店長くらいだ。

何か視線を感じたらしく、千具良は上を見た。高い棚の上で、大きな鳥籠に入っている九官鳥。

こいつの口走る台詞は、みんな店長が教えているらしい。名前はグレートボイス。

「こんにちは、グレートボイス！」

「モットフリョウニナリナサイ！ ヤバンニヤバンニィ♪」

「何言ってるの、グレートボイス!？」

よく分からない謎の台詞に、千具良は反応に困っていた。

楽しそうにしている姿を見ていると、米斗の心も、何となく和む。

それと同時に、千具良に対して抱いてしまった疑念が頭をよぎり、中々離れてくれない。

「俺、魚の様子を見てくるよ」

「じゃあ私、お店のほうで待ってるね」

ペットたちと戯れる千具良を残して、米斗は奥へ入っていった。水槽を覗き込むと、メチレンブルー水の中で、プカーっと横たわる魚の姿が、あまりにも哀れだった。

チーン。側にあった供養鐘を鳴らし、魚たちに黙禱を捧げた。

供養も済み、椅子に腰掛けた米斗は、炊事場で紅茶を淹れる店長に相談を持ちかけた。

「なあ店長。女の子って、くしゃみすると地面が揺れたりする？」

手を止めた店長は、啞然とした顔で、米斗の額に手をあてる。

「何すか」

「いや、熱でもあるのかと思って。でもなあに、それ？」

米斗は店長に、喫茶店での出来事を話した。すると店長は笑って、首を横に振って見せた。

「それは偶然よお、絶対。そんな馬鹿なこと、あるわけないでしょう。アタシは、くしゃみしても地面なんか揺れないわよ」

「だって店長、男じゃん」

「んまっ！ 純粋な乙女心を傷つけて！ そんな調子じゃ、チグラちゃんにも嫌われちゃうわよっ」

「……………」

米斗は何の反応もせず、机に顎を乗せて背を丸めた。予定外のリアクションに、店長は少し焦る。

「あらやだ、へこんじゃった？ 冗談よ、彼女はそんなことでへこたれるような、やわな娘じゃないわ」

そのあたりはともかく、地震の件は米斗の勘違い、とすることで双方納得がついた。

「ところで」と店長は、そわそわと落ち着かない態度で話を切り替えた。

「あなたたち、もうどこまで行ったの？ もうAは行ったわよね、まさかB？」

「何すか、その古い表現は」

「いいじゃないのん。で、どうなのよ？」

「どうって、何もないっすよ」

「んまー！ あなたたち、一か月近くも付き合っ、まだチューもしてないっての!? 健全すぎるわよ、もっと不良になりなさい、野蛮に野蛮にいっ！」

どこかで聞いたセリフが飛び交う。

「意味がわかんないし。だって別に、千具良は、したいなんて言わないし」

「あんた、女の子にそんな恥ずかしいこと言わせる気!? 馬鹿ねえ、口に出さなくたって、態度で表してるかもしれないじゃないの」

「そうは見えないけど」

「ガタガタ抜かすんじゃないねえ、男なら男らしく、ぱっと一花咲かせやがれい！」

「店長、怖いよ」

鼻息も荒く、急に漢の顔に戻って詰め寄ってくる店長から逃れようと、店舗のほうへ首を向ける。

すると、なにやら店内のペットたちが騒いでいると気付いた。

「店長、みんなの様子がおかしい」

米斗と店長が表へ出てみると、鳥や犬たちが騒いでいた。

「みんな、どうしちゃったのかしら？」

「——千具良？ 千具良がいない」

「えっ？」

米斗は外へ飛び出した。辺りを見渡すが、それらしい姿は見当たらない。

「コメちゃん、チグラちゃんの鞆は、店の中にあるわ！」

店長が出てきて、店内に置いてあった彩玄高校指定の黒い鞆を見せる。たしかに千具良のものだ。

と言うことは、おそらく勝手に帰ったわけではない。千具良の身に何かあったのだろうか。

妙な感覚が、咽元からこみ上げてくるが、それが何なのかは、米斗には分からなかった。

ペットショップのショウウィンドウから中のペットを見ていた大学生らしきカップルを見つけ、詰め寄る。

「なあ、さっきこの店から、これくらいの子高生、出てこなかったか？」

千具良の身長辺りの位置に手を置き、米斗は訊ねた。カップルは顔を見合わせて首を傾げる。

「さあ。あ、でも、あんたと同じ制服来た二人組みの男が、でかいダンボールかついで出て行ったのは見たぜ。なんか「押し込み強盗じゃー！」とか叫んで」

「人が一人入れそうな、大きな箱だったわね」

「……ひょっとして、ひょっとするのか……？」

カップルの証言を頼りに、米斗は商店街を全速力で駆け抜けた。

### 13. 誘拐犯、半殺しの目に遭う

---

空がだんだん暗くなってきた頃。

ちびっ子たちもお家へ帰り、静まりかえった公園に、二人の男が足を踏み入れた。

彩玄第二高校の制服を着た、体力のありそうな男と、瓶底メガネの、もやしのような男。二人がかりで、大きな段ボール箱を担いでいる。段ボール箱はガムテープできっちり密閉してあるが、ところどころに空気穴らしき、指一本入るくらいの穴があいている。公園の中央、砂場の側に箱を置いた。中身を確認することは怖くてできないので、慎重に聞き耳を立てる。箱の中から、かすかに呼吸音が聞こえてきた。

中の?それ?は、おそらく息絶えてはいない。二人はひとまず、安堵する。

「ここに置いときゃ、いいのか？」

体力のありそうな男が言った。額から汗が噴き出している。もやし男が頷いた。瓶底メガネの反射する光沢が、微妙に震えて振動している。

「その予定だ。これにて、僕たちの任務は完了した」

「なら早く帰ろうぜ、俺まだ、午後の礼拝やってないんだ」

「何だね、それは」

「イスラームは一日に五回、聖地の方角を向いて感謝の言葉を唱える礼拝をするのだ。日本からだ、西南西の方角だな」

「成る程。それを言うなら、僕も日暮れとともにUFOと交信をする準備をしなければならない。早く帰るとしよう」

互いに納得し、そそくさとその場を去ろうとした時。

ボスッ。何かが破られる、鈍い音がした。立ち止まり、二人は顔を見合わせる。

「何だ、今の音は」

「さあ。二人同時に聞いたのだから、空耳ではなさそうだ」

「後ろから聞こえたな。お前、ちょっと見てみる」

「なぜ僕なんだ。気になるのなら、君が見ればいいのだ」

「なら、一緒に見よう、同時にだ。フェイントなんかかけたら、後でローリングアッパーを食らわせるからな」

「わ、分かった。では、いっせーの一で！」

二人は振り返った。そして目を限界まで開く。

自分たちの運んできた段ボール箱に穴が開いており、そこから人の拳が飛び出ている。

「な、何だね、あれは」

「俺が知るかよ」

硬直している間に、ダンボールは一気に破かれ、中から小柄な少女が姿を現した。彼らが拉致って来た、気の弱そうな可愛らしい少女。だったはずだ。

しかし目の前の少女の瞳は、血に飢えた獣のごとく暗闇に光り、体中から類まれなる強烈なオーラを放っている。少女は男たちを見ていた。蛇に睨まれた蛙たちは、息を呑んで、ひそひそと

逃走手段を相談し始めた。

「う、宇宙人だ、あいつは人間ではなかったのだ。まずいぞ、こんな形で遭遇してしまうとは。何の準備もなしに対峙してしまっただけは、簡単に捕まってキャトル・ミューティレーションの餌食だ」

もやし男は臆した。体力のありそうな男も、かなり腰が引けている。

「とりあえず、逃げたほうが良さそうだ、お前も、そう思うだろう？」

「勿論だ。奴が仲間を呼ぶ前に、この場を立ち去らなければ」

「では同時に逃げよう。抜け駆けなんかしてみろ、後でコブラツイストを炸裂するからな」

「分かった、では逃げよう。いっせーの一……」

言い終わる前に、体力のありそうな男が逃げた。

「貴様、卑怯だぞ！」

一瞬、遅れをとったが、もやし男も逃げ出した。しかし、その一瞬が命取りとなった。

少女の目が鋭く光ると同時に、俊足でもやし男に襲い掛かった。強烈なドロップキックがもやし男のわき腹に食い込む。もやし男が、へし折れた。少女は倒れて萎びた、もやしの足を掴み、振り回す。

「おりゃあああ！」

ジャイアントスイング。そのまま砲丸投げの要領で、もやし男を投げ飛ばす。ぶん投げられた男は、回転しながら放物線を描いて、前方を走る体力のありそうな男に突っ込み、共に倒れた。

「こ、殺される……」

もやし男が、かろうじて口を開いた。少女は再び、二人の目と鼻の先に迫ってきている。

「ひいいい、お助けー！」

暗がりの空の下、怯えた悲鳴が辺りに響き渡った。

☆彡 ☆彡 ☆彡

誰かの悲鳴を聞きつけ、米斗はその方向へ走っていた。誰が千具良を連れ去るなんて真似をしたのか。しかも、とても陰湿で、かつ強引な方法で。

実に危険だ。千具良が戦闘モードに入ったら、その誰かは、ただではすまない。米斗が危惧しているのは、千具良の無事よりも犯人の生命だった。

町の外れの、小さな公園へ辿り着き、足を止める。入り口から見える砂地には、抜け殻みたいへしやげた、空の段ボール箱が捨ててあった。中に入ると、入り口から死角になるところで重なって倒れる男子生徒が二人。

薄暗いが、そのシルエットから一目瞭然だ。クラスメイトの、武藤と富田だった。実に酷い有様。富田に至っては、脇腹が「く」の字に曲がって、打ち込みに失敗した釘みたいになってしまっている。

その側へ歩み寄る、小柄な少女。

「千具良！」

米斗は駆け寄り、千具良を止めようと手を出した。その気配を感じ取り、千具良の標的が米斗へと移る。千具良の手刀が米斗の顔面に向かって繰り出させる。米斗は微動だにせず、じっと迫

りくる攻撃を凝視していた。

寸でのところで、動きが止まる。千具良が普段の調子を取り戻した。

「あっ、あら？　ここは……」

相変わらず、精神統一している間の行動については、何も覚えていないらしい。しかし、米斗へ向けられた手刀の意味を察し、千具良は慌てて手を引っ込め、顔を赤らめた。

ズン。軽い揺れが、辺りを揺らす。

「ごめんなさい、米斗くん、怪我はない!？」

「ああ。俺は大丈夫だけど……」

米斗は千具良を挟んで向こう側で、のびている武藤と富田を見た。あちらは明らかに大丈夫ではない。その視線の先が気になったのか、千具良も後ろを振り返った。視界に現れた地獄絵図さながらの光景に、表情を青褪めさせる。

「これ、もしかして、私が……？」

千具良は慌てて、二人に「ごめんなさい」と何度も頭を下げた。だが、既に再起不能状態の二人には、そんな謝罪を聞いている余裕はない。

「もういいよ、千具良。こいつらはシメられるだけの悪事を働いたんだ。自業自得だ」

米斗は、積み重なってサンドウィッチ状態になっている二人の側へ行き、しゃがみこんだ。

「で、何でお前らは、こんな真似をしたんだ？」

いつもの無感情で、訊ねる。富田は話せる状態ではなさそうだったので、武藤を叩き起こして事情を吐かせようとした。武藤は頑なに口を閉ざそうとする。

「理由は言えん。言えば、俺ん家のメッカ巡礼旅行が水の泡になる」

「つまり旅行費で買収されたんだな。誰に？」

「だから、言えんと言っているだろう、しつこいぞ！」

「言わないと、唯一神アッラーに変わって、破壊神チグーラがイスラム教徒を大量殺戮するぞ」

ぼそっと耳打ちされ、武藤の表情が恐怖に歪んだ。既に被害を被っている武藤にとっては、効果的過ぎる脅し文句だったに違いない。必死で脳内葛藤を繰り広げながらも、イスラム教の未来を守るため口を開いた。

「と、隣のクラスの、真島とか言う女子だ」

「真島？　真島吉香か。何でお前らにこんなことさせたのか、目的は知らないか」

「さあ。でも、何かブツブツと「これは実験だ」とか何とか言っていたような」

「実験？」

米斗は千具良の方を振り返った。未だに事情が飲み込めず、おろおろしている。吉香と共犯、という気配もなさそうだし、千具良は本当に何も知らないのだろう。

さっきの会話も小声で行われたため、千具良には聞こえていない。まだ、言わない方がいいだろう。友人に誘拐されそうになったなんて、知りたくもないだろうし。吉香の動機がはっきりしないうちは、尚更。

これ以上は考えても埒が明かない。今日のところは、このくらい分かればいっただろう。

米斗は立ち上がって千具良の元へ歩み寄った。

「もう暗いから帰ろう。家まで送っていくから」

「でも、この人たちは……」

「心配要らない。腹が減ったら勝手に家に帰る」

再度、後ろを振り返り、米斗は二人に告げた。

「じゃあ、明日な」

無表情な米斗の形相が、なにやら恐ろしい宣戦布告にでも見えたのか、武藤と富田は硬直したまま、二人で抱き合って震えていた。

米斗自身、それほど感情を込めたつもりはなかったが、どこことなく語調に怒りが籠っている気がして、違和感を覚えた。

## 14. 初めてのパンツ

米斗と千具良は、ペットショップに戻ってきた。心配していた店長に無事を報告し、置いたままだった鞆を拾って帰宅の途へ付いた。

千具良を家まで送っていくため、いつもはまったく通らない道を歩いていく。普段から見知った道しか通らないし、必要以上の道順に興味もなかったため、地元民のくせに、町内の地形には、とても疎い。なので初体験の道を探索気分で歩くのも、なかなかスリルがあると思った。

千具良に先導されて裏道を抜けると、同じ町内とは思えないほど、ド田舎の風景が広がっていた。

ところどころに、ぽつりと家の明かりが見えるくらいで、あとは全部、狭い道路と田畑。いくら郊外とはいえ、こんな自然にあふれた世界が残っていたとは。米斗は珍しく感動した。

電灯が少なく、数十メートルおきくらいにしか設置されていないため、完全に暗闇となってしまう場所が何箇所もあった。肝試しには丁度いいだろうが、女の子の一人歩きは非常に危険だ。決して夜遅くに出歩かないようにと、千具良に釘を刺しておいた。

始めは珍しかったが、同じような景色にも飽きてきた米斗は、さっき店長が言っていた話を思い出していた。本当に千具良は口に出さないだけで、心の中で米斗とAやらBやらというらしきことを、したいと思っているのだろうか。

米斗は隣を歩く千具良の横顔を見た。しかしそれらしい表情はしていない。至って普通、いつもどおりにしか見えない。それ以前に、チューがしたい女の顔というものが分からないのだが。

「どうかしたの？ 米斗くん」

視線に気付いた千具良は、少し恥ずかしそうに首をかしげた。

「あのさ。千具良は、俺とキスしたいとか思ってる？」

ズン。軽い余震で辺りが揺れた。

米斗と千具良は同時に足を止めた。啞然とした顔で、米斗の額に手をあててくる。

「俺は、熱はないぞ」

「本当だ、熱くない。どうしたの、急に？」

「いや、店長がそう言ってきたから。そんなこと、思っていないよな？」

「……米斗くんは、どうなの？」

「何が」

「私と、したいと思うの？ 私がしたいって言ったら、してくれるの？」

「うん」

「ずいぶん、あっさりだね……。でも、そこが米斗くんのいいところなんだよね」

「で、どうなんだ？」

千具良は首を横に振った。

「そうか。なら、いいんだ」

「……あのね、私が思うに、その……」

「うん」

「だから、えっと、そういうことは……」

何かを必死で伝えようとしてくる。急かすでも焦らすでもなく、米斗はじっと待っていた。

だが、千具良が言葉を形にするより早く、黒い影が素早く側を横切った。すると、千具良のスカートが派手にめくりあがる。その風の残した贈り物を、米斗は瞬きする間もなく凝視していた。

一連の事態を把握した千具良は、顔を熟れたトマトよりも赤くして、叫んだ。

「きっ、きゃあああああああ！」

ズズズズン！

直後、大きな振動が世界を揺るがした。数週間前の、あの大地震に匹敵するほどの衝撃。米斗はバランスをとりつつ、少し慌てた。

後ろで「いてっ」と言う声と、何かが転ぶ音が聞こえた。子供の声に感じたが。

すぐに、揺れはおさまった。落ち着いた米斗は、後ろで転んでいた影を、引つつかんで捕まえた。小学校中学年くらいの、男子児童だった。

「こいつが、犯人だな」

千具良のところへ連れて行く。千具良は地面に座り込んで、必死でスカートの裾を押さえていた。米斗を見上げるその顔はまだ赤く、涙目になっている。

「みっ、見た？」

千具良の言葉の意味を少し考え、落ち着いて米斗は返答する。

「安心しろ。お前のパンツがピンクのクマさんだと言う事実は、誰にも言わないから」

「しっかり見られてるし！ あーもう！」

泣きながら、千具良は項垂れる。だんだん地面にへばりつく面積が増えていき、今にも溶けてしまいそうだ。

「ごっ、ごめんよ、千具良姉ちゃん！ そんなに驚くとは思ってなかったんだ」

米斗に首根っこを掴まれた子供が、慌てて謝った。千具良とは知り合いらしい。春の夜には少し肌寒そうな、薄手の服装をしている。おそらく、この近所に家があるのだろう。

「まったくだ。最近のガキは、常識を知らんから困る」

「でも今の一言は、兄ちゃんのダメ出しだったと思うよ」

「何の話だ？」

「ところで、どうしてこんなことしたの？ <sup>まさき</sup>正樹くん」

落ち着いたらしく、平常心を取り戻した千具良が尋ねた。正樹という子供は、罪悪感を顔に出しながらも、口を硬く閉ざした。

「言えないよ、言ったら、お尻叩かれちゃう。……ギャー、痛い！」

米斗が勢いよく、正樹の尻を叩いた。正樹は泣きながら米斗の肩の上でもがくが、逃れられない。

「なっ、何すんだよお！」

「言わなくても、尻をぶたれるぞ。どっちでも痛い目に遭うなら、吐いてすっきりした方がマシだろう」

もう一発、叩いてみた。

「ギャー！ わ、分かったよ、言う、言うって！ なんて兄ちゃんだよ」

観念し、正樹は口を割った。

「実は、吉香姉ちゃんに頼まれたんだ」

「吉香ちゃんに？」

「また、あいつか。何を考えてるんだ？」

「あーあ、とうとうばれちゃったわね」

三人の背後に、何者かが歩み寄ってきた。三人は反射的に視線を向ける。

「あ、あなたたちは……！」

すぐ側に、長い黒髪の綺麗な少女真島吉香と、二人の男女が現れた。男の顔は真っ白で、鼻も口も、目も眉毛もない。以前、学校で見た顔だ。千具良が驚いた声を上げる。

「校舎裏でハンカチを落とした、のっぺらぼうです。すみません」

特殊メイクらしい。ベリッと顔の皮を剥ぐと、中からごく普通の男の顔が現れた。知り合いなのか、千具良は茫然としていた。

「道場に通っている、岡野さん……」

隣にいた、エプロンをつけた女が頭を下げた。この女も、米斗は知っている。

「コショウをぶちまけた、駅前喫茶店のウエイトレスです。すみませんでした」

下ろしていた髪を一つに結び、地味そうな赤縁メガネをかける。またも知り合いだったらしく、千具良は力ない声を上げた。

「こっちも、道場に通っている、山田さん……」

千具良は訳が分からないと、困惑して固まっていたが、急に表情を怒らせて、吉香に突っかった。

「吉香ちゃん！ これはいったい、どういうこと？ 私を誘拐させたのも、吉香ちゃんなんでしょう？」

「ごめんなさい、千具良。あなたを騙していたわけじゃないの。ただデータが欲しくて、彼らに協力してもらっていたのよ」

「お前の鬼畜性をチェックするためのデータか？」

「違うわよ、失礼ね。私は千具良が、この常識知らずの無関心男と付き合い始めて、どれくらい平常心が鍛えられたか、テストをしていたの。でも相変わらず、行動が格闘に準ずる時以外は、以前とまったく変わっていないわね」

「ごめんなさい……」

千具良は急にしおらしくなり、頭を下げた。別に千具良が謝る必要は、ない気がするのだが。

吉香は堂々とした態度で、制服の胸ポケットから、一枚のメモリーカードを取り出した。

「私が取ったデータは、師範代に渡して、分析してもらおうわ。あなたはいつもどおり、道場の掃除をしておきなさい」

「うん、分かった。米斗くん、今日はありがとう。また明日ね……」

千具良は手を振り、今いる道路から、斜め右下に延びる下り坂を駆けていった。その下には、

大きな木造の家屋が建っている。かなり年季の入った古い家だが、二度にわたって起こった大地震では、びくともしていない。とても丈夫にできている。

敷地は広く、母屋と思われる大きな家と、中庭らしき空き地をはさんだ向こう側にも、二階建ての家屋が建っていた。

「さて、落合米斗くん」

千具良の姿が見えなくなった頃合いを見計らって、吉香が米斗に話を振った。

「師範代が、あなたに会いたがっているわ。あなたには、千具良の全てを知っておいて欲しいそうよ。話を聞いてもらえるかしら？」

「パンツの柄なら、もう知ってるぞ」

「違うっつーの」

米斗は、ほとんど強制的に拉致され、家の中へ連れて行かれた。

## 15. 千具良の真実

家の入口には大きな門構えが設えてあり、『袴田道場』と達筆で書かれた一枚板の看板が威圧感を放っていた。

道場の敷地内へと連れ込まれた米斗は、そのまま一番奥の狭い和室へと通された。そこは薄暗く殺伐としていて、中は人の気配もしない。隠れるスペースさえ見当たらない。二枚の畳と襖、突き当たりの壁にかかった亀の絵の掛け軸が飾られている様子が、うっすら見えるくらい。

それ以外に、これと言って怪しいものも気になるものもない。

米斗を拉致した道場門下生たちを引き下がらせた吉香は、辺りに誰の気配もないことを確認してから、注意深く米斗に忠告した。

「袴田道場の師範代は、この奥にいらっしゃるわ。決して失礼な口は聞かないこと、訊かれた質問には、素直に応えること。分かったわね？」

「この奥って、何もないじゃないか」

目の前は行き止まりだ。吉香が、亀の絵の掛け軸をめくる。中には黒い小さなボタンが一つあり、それを押すと、掛け軸の側の壁が静かに横にスライド、ぽっかりと黒い出入り口が姿を現した。

ほう、と感心する米斗。吉香は軽く笑った。

「この程度の仕掛けで、あなたは動じたりしないでしょう。さあ、師範代がお待ちだわ、早く行きましょう」

あらかじめ指示されて持ってきていた靴を履き、中へ入ると、岩造りの洞窟になっていた。ひんやりした冷たい空気が、どこからか流れてくる。その風を頬に受けながら、吉香と米斗は会話もなく、ひたすら進んだ。

辺りは真っ暗で、ほとんど何も見えない。見えたところで、岩に囲まれた洞窟の景色が延々と続いているだけだろうとは想像がついた。

足元を照らす、前を歩く吉香が持つ懐中電灯だけが、唯一の道標だ。

かなりの距離を歩いた気がする。視覚が閉ざされたせいで方向感覚が麻痺したのか、どちらの方角へ向かっているのかも分からない。

もう確実に、道場の建っている土地の敷地からは出てしまっているだろうと思われるくらい、果てしない道のりを歩いていることは、間違いない。いったい出口は、どこへ繋がっているのだろう。考えても分からないので、米斗はとりあえず、黙々と吉香についていった。

更にしばらく進んだ地点で、吉香が立ち止まった。目の前は行き止まりになっていた。右端に懐中電灯の明かりを向けると、鉄板みたいな平べったいプレートが照らし出された。

吉香がそれに手を触れる。すると鉄板は青く光り、直後、ゴゴゴと音を立てて、目の前の岩が上へ持ち上がった。どうやら鉄板は、指紋探知機的な役割を果たしていたらしい。

壁の向こう側から眩しい光が差し込み、米斗は目を瞬かせる。やがて、その眩しさに順応して辺りを見渡すと、洞窟へ入る前と同じ形状の和室に出た。広さは、数倍以上はあるが。

「師範代、落合米斗を連れて参りました」

「どうぞ、こちらへ」

吉香の報告に、奥から返事があった。落ち着いた雰囲気、高い女性の声だった。

靴を脱ぎ、吉香に連れられて部屋の中へと入る。その先で、人形みたいに綺麗な顔をした女が、正座して二人を出迎えた。

長い、乱れのないまっすぐな黒髪を水平に切りそろえた、白い肌の美しい女。身に纏う白い着物の上から、白衣を腕に通さず、羽織っている。

顔だけ見ると、吉香を大人っぽくしたような、そんな妖艶な美を醸し出していた。

「初めまして、落合米斗さん。あなたの噂は以前から存じておりました。立ち話もなんです、どうぞ、私の前へお座りください」

天井から座布団が二枚、部屋の中央付近に落ちてきた。見上げると、黒子らしき人間が、慌てて天井板を閉める姿が一瞬目撃できた。

左の座布団に、米斗は腰掛けた。ちょうど、女性が真正面に見える位置だ。隣の座布団には、吉香が静かに正座した。

双方、落ち着いて座したところで、女性が話を切り出した。

「まずは自己紹介をしなければなりませんね。わたくしは、袴田道場師範の娘――今は師範代理をしております、袴田 <sup>どろね</sup> 戸呂音と申します」

名刺を差し出される。名前の横に、『師範代理兼科学者』と書かれていた。

「科学者？」

「はい、わたくし、師範代理などと名乗ってはおりますが、この道場を継ぐ気は微塵もありません。昔から機械の神秘に心奪われてきたわたくしは、今までの人生のほとんどを機械の研究と発明につき込んできました。例えば、この奥様に大人気のダイエットスリッパ」

戸呂音が取り出したのは、踵部分が短いスリッパ。主婦が発明して特許を取得したということでは有名な優れものだ。

「おお、スリッパ」

「――を、改造して作った携帯電話内臓健康スリッパ。ユダヤ教の天使の名を借りて、サンダルフォンと名付けました」

スリッパの底がパカリと開いた。中には液晶画面と、整列した十数個のボタンがとりつけられている。

「おお、便利だな」

「しかし、足の臭い人が使用すると耳にあてて通話することに抵抗を覚えますし、三十キロ以上の重量に耐えられないという欠点も見つかりました」

「駄目じゃん。あんた、科学者に向いてないんじゃないの？」

「言葉を慎みなさい、師範代の眼前で」

戸呂音に向かって普通に突っ込んだ米斗の後頭部を、すかさず吉香が叩いてくる。

「確かに、わたくしには、このような量産可能な程度の発明品を作るには向いていないと言う事実は、すでに理解しております。ところがこの先、わたくしは量産不可能な、とんでもない発明をする予定になっているのです」

スリッパをぺっと捨て、戸呂音は意味深に言葉を紡いだ。話の内容が未来形になっているところが、気になる。そして結論的に、何を言いたがっているのか、米斗は未だ理解してはいなかった。

「で、あんたはこの先、何をするんだ？」

「例えば、今から三年後、科学の知識を結集させて、完璧な人型ロボットを造り上げるそうです。そちらの、吉香さんという存在を」

米斗は反射的に横を見た。特に表情に変化を見せるでもなく、吉香は凜として堂々と座っている。

「人型ロボット？」

米斗が疑いの眼差しを送っていると判断したのか、吉香は自分の頭を両手でしっかり掴み、首を一回転、まわしてみせた。カチッと、何かが外れた音がした。吉香の首が外れ、持ち上がる。首と頭の間には細いコードがびっしりと延びている。そして、すぐに首を元の状態に接合しなおした。

一瞬の出来事。米斗はその様子を放心状態で見つめていた。その光景を見てもさほど動じないのは、やはり究極の平常心が効果を発揮しているからだろうか。もしくは、目の前の光景が現実離れしすぎていて、素直に驚けないからかもしれない。

「私も、初めて吉香さんに会ったときは、半信半疑でした。ですが彼女の話聞き、その内容が将来起こる可能性を計算したところ、驚くほど内容が一致したので、信用することにしました。吉香さんは、三年後の世界から、作り主である私の命を受けて、タイムマシンでやって来た」と

戸呂音の話は、空想科学的な内容がふんだんに盛り込まれ、実に現実からかけ離れていた。別に米斗はSFが嫌いと言うわけではないし、現実執着した妄想反対人間でもない。戸呂音が話す内容を一つ一つ聞いて、辻褄が合っていれば納得して頷く。その動作を延々と三十分繰り返した。

戸呂音が語るところによると、今から約一ヶ月後に、地球の核が崩壊してしまうほどの巨大な大地震が、世界を襲い、生命はことごとく絶滅の一途を辿るのだと言う。それを微かに予知していた戸呂音は、自家製の宇宙船に乗って、一人月へ逃れたらしい。

後に、崩壊の原因の解明に成功した戸呂音は、きっかけがあればこの惨事を食い止められるかもしれないと期待を持ち、タイムマシンを作って過去に戻ろうと考えた。しかし、長い孤独な生活に疲労は限界にまで達し、過去に戻れても、長くは生きられない事実を悟る。そのため、最後の手段として、吉香という自分によく似た人型ロボットを完成させ、過去へ送り出した。と言うわけだ。

米斗はその怪しい話にたいして、共感もしなければ批判もしなかった。ただ、戸呂音が真剣に話をしているのだと分かったので、それはきっと真実なんだろうと思って、真面目に聞いた。

「で、どうすれば、その大地震を防げるんだ？」

「はっきり申し上げれば、その原因となる基を正す。未来のわたくしが出した結論は、そうであるようです。……あなたも、お気づきなのではありませんか？ 最近、群発している地震の原

因を」

そう問われ、米斗の脳裏に、ある出来事が浮かび上がった。だが、米斗はそれに関して、言葉を紡ごうとはしなかった。米斗自身、その憶測を確定する要素も理由も、何一つ持ち合わせていない。はっきりと納得のいく答が出るまで、決して自分の意見は口にしなかつた。

その考えを読み取ったのか、代わりに戸呂音が口を開いた。

「いいでしょう。それならば、わたくしから納得のいくお話をさせていただきます。ここ十数年に起こった地震の約半数以上は、プレートの移動や海底火山の噴火など、自然に起こったものではありません。人為的、という言葉はあまりそぐわしくありませんが、ある一人の人間の手によって、起されているものなのです。その人間とは――」

戸呂音の口が、はっきりと動く。まるで耳が不自由であっても、口の動きだけで、その名前がはっきり分かるのではと思うくらい。米斗は瞬きもせず、じっと見つめていた。

「――有栖千具良。この道場の門下生であり、あなたの恋人である、あの少女です」

米斗は、それほど大きなショックは受けなかつた。可能性だけなら、頭の片隅にひっそりと存在していたのだし。

「やっぱりそうか。といった表情をしていますね。おそらくあなたは、喫茶店で彼女がくしゃみをしたとき、初めて疑問を抱かれたのではないかと思います。そして、彼女がくしゃみをすると、地震が起こるのではないかと考えた。しかし考えた末に、勘違い、偶然だと判断して、受け流したのでしょうか」

戸呂音は米斗の思考行動を全て見抜いていた。ほとんど無表情の米斗の、わずかな顔色の変化から、それを導き出したのだろう。

「否定はしたとはいえ、あなたの考えは、核心を突く一歩手前まで行き着いてしまった。ですから、遅かれ早かれあなたはこの事実気付いてしまうと思いました。ならば、こちらで全てを打ち明ける方が良く判断したのです」

「なぜ？」

「千具良さんは、自分の持つ体質のことを知りません。もし、あなたがそれに気づけば、その事実を確かめるため、彼女に直接問い質そうとすのでしょ。そこで、彼女は初めて自分の起こしてきた事態を知ります。そうなれば彼女は大きなショックを受け、パニック状態になり、まさに事実どおり、世界を滅ぼすほどの巨大な地震を引き起こしてしまうかもしれないのです。それだけは避けたかった」

「それが、今から一ヵ月後に起こるっていう出来事か？」

「いいえ。滅んでしまった地球では、あなたと千具良さんは付き合ってもいなければ、顔さえ見たこともない関係でした。一ヶ月後に、あなたたちの通う高校で、遠足があるそうですね」

「ああ、そう言えば。隣町の牧場見学だったかな」

「そこで、千具良さんは牛に頭を食べられ、その衝撃で巨大地震を引き起こしたとのことですよ」

「すごく嫌だな」

「嫌でしょう。わたくしもそんなオチは嫌です。ですから、この事件が起こる前に、千具良さんとあなたを引き合わせ、ちょっとやそつのことでは動じない、強い心を鍛えさせようと考えた

のです。彼女が地震を呼び起こすスイッチとなるのは、心臓の鼓動ですから」

戸呂音は自身の心臓を抑え、目を閉じた。

「心臓は、自分の媒体である生物の全身に血液を送る、ポンプの役目を果たしています。生きている限り、小さくとも心臓とは常に振動しているもの。これは当然の話ですね。地球もそうです。地中深くにある核と、周りのマントルが蠢き、地表には気付かない程度に地面を揺らしながら、生命を育てています。どういった過程で起こったのかは分かりませんが、地球の核付近の動きと、千具良さんの心臓の動きが、何らかの原因によってシンクロしているのではないかと、私は推測しているのです。つまり、千具良さんの心臓が必要以上に激しく脈打つと、それに呼応して、地球も大きく揺れてしまうのです。たとえば、驚いたり、緊張したりした時などに」

「はあ」

もちろん、地震は地表に近い位置で起こるから揺れを感じるため、核が振動を起こしても気付けない場合がほとんどだ。おそらく、呼応した地球の揺れが千具良の足元に向かって力を放出し、真下のプレートに衝撃を与えて地震を起こすため、震源はいつも千具良の足元となる。と付け足した。

「つまり、千具良が起こすとされる地震の被害を抑えるには、千具良の心臓が激しく動かないようにする必要があると。そのために、何事にも動じない平常心を身に付けさせよう」と

「仰る通りです。千具良さんには、ただ修行のために、何事にも動じない平常心を身に着けない、とだけ伝えて、あなたの存在を覚えておきました。結果は、あまりうまくいきませんでした」

戸呂音は残念そうに、肩を落としていた。勝手に期待されても困るが、そんなに落胆されては、なんとなく申し訳なくも思った。

「わたくしたちも、彼女の平常心を向上させるために、色々は無茶をしてきました。ですが、あまり進展はなく、世界を危険に晒す真似をしてしまった点は、お詫び致します」

戸呂音は頭を下げる。米斗に謝ったって、どうにもならないが。どうせなら、多大な被害を被ったペットショップの店長や、動物たちに謝ってほしい。

だが、言葉の割にはそれほど反省している様子でもなかった。顔を上げた戸呂音は、罪悪感というよりも自信に満ちた表情を浮かべていた。

「ですが、心配は無用ですよ。わたくしの発明した地中ネットワークによって、地面と接触している建造物は全て、ある程度の揺れなら耐えられる仕様になっていますので、この町一帯くらいなら、どんな古い家であっても、倒壊の恐れはありません」

「ほう」

「しかし、耐えられる強度は、おそらく震度8辺りが限界かと思われます。ですからやはり、千具良さんに強い衝撃を与えない、と言うことが一番の防御策なのです。決して、後ろから脅かしたり、お化け屋敷に連れ込んだり、絶叫マシンに乗せたりしてはいけません。接吻なんて、以ての外ですよ。それこそ彼女の心臓は飛び出んばかりに、跳ね上がってしまうでしょうから」

「……………」

さっきの会話も、吉香を通して筒抜けだったらしい。

「それで、俺に真実を話した目的は、口封じか？ 千具良には絶対に言うなと」

「もちろん、その意図もありますが。今までの話を聞いてもまだ、千具良さんの身を案じてくださるなら、ぜひ、千具良さんの平常心を鍛えて、地震を起こさずに済むように、力添えをお願いできませんか。あくまでも事情は隠した上で、陰から千具良さんを支えてくださいませんか」

要するに、世界を守るための慈善事業に、米斗も引っ張り込もうという魂胆なのだろう。

米斗は無表情のまま、戸呂音に視線を飛ばした。

「断る。付き合っている以上は、千具良に嘘なんて吐きたくないし、そんなデマで傷つけない」

その返答に、戸呂音は少し表情を曇らせた。吉香が反論しようとしてきたが、戸呂音が視線を送って制止させる。

「今までの話を聞いた上で、まだ、地震と千具良さんには、何の関係もないと思いますか？」

「今までの地震のほとんどが、千具良のせいだったなんて確証は、一つもないだろう」

考えてみれば、思い当たる出来事は数多くあった。千具良が米斗に告白したとき。のっぺらぼうを見たというとき。喫茶店の一件。そしてさっき、スカートを捲られたとき。

確かに、千具良が地震の原因だと言うなら、説明がつきそうな事実ばかりが浮かんでくる。

でも、そんな曖昧な根拠だけでは、米斗は納得できなかった。

「全て、偶然だったとも考えられる。世界は広いんだ、色々な要素が重なる場合だってある」

「偶然と考えるにも、限界があるでしょう。もし仮に、彼女が原因ではなかったとしても、可能性の一つとして手は打っておかねばなりません」

「千具良が平常心を身に着けたいと思っているのなら協力はするが、それは地球の危機だとか、そんな話とは何の関係もない」

米斗は立ち上がり、もと来た道へ引き返そうと戸呂音に背を向けた。

「心配しなくたって、千具良が何か言ってこない限り、俺は何も聞かないし、何も言わない。どうせ話してくれるまで、何もできないんだから」

そして、歩き出した。

「お待ちなさい」

戸呂音が呼び止める。米斗は立ち止まったが、振り返りはしなかった。

「お帰りになるのなら、そちらの襖からどうぞ。近道ですから」

「……どうも」

戸呂音の横にある襖を開き、外に出る。縁側の天井から、洞窟の出口で脱いだ靴が降ってきた。見上げると、黒子らしき人間が、慌てて天井板を閉める姿がはっきり目撃できた。

外に出ると、道場の端にある小さな庵だと分かった。たぶん目の前に見えている、大きな離れの家屋が、最初に入った和室のあった建物だ。その距離は、わずか十メートルほどしか離れてない。あの長い暗い通路は、地中に掘られた迷路みたいな道には、何の意味があったのか。

距離感を錯覚させるためのトリックだろうか。まるで忍者屋敷だ。黒子もいるし。

すっかり夜も更け、辺りは完全に闇が覆っていた。星が出ているのが幸いだった。

もう、この家に用事はないし、帰ろうと米斗は歩き出した。

## 16. もう、終わりにしよう

---

「あの、米斗くん」

正門をくぐろうとしたとき、背後から呼び止められた。振り返ると、白いエプロンをつけた私服姿の千具良が、ちょこんと起立していた。さらに背後の建物の中からは、子供達の騒ぐ声が聞こえてくる。

この道場は一般の生徒の他に、事情があって親と暮らせない子供や下宿人の世話もしていると、戸呂音が話していた気がする。前に大量の弁当を持ってきたときも、「みんなの残り」と言っていたが、それは家族と言うわけではなく、この下宿に住む「みんな」という意味だったのだろう。

何人いるのか分からないが、千具良が住人たちの中でも年長に当たるらしい。よって、家事のほとんどを一人でこなしているに違いない。

正直、大変だろうと思う。千具良だって、決して暇なわけではないのに。

「今、帰り？」

「ああ、まあ」

「師範代に会ったんだね」

「ああ、まあ。それが、どうかしたのか？」

「.....私の話を、していたんじゃないかって」

千具良は俯いた。声が震えている。エプロンの裾をぎゅっと握り、少し間を置いてから、話を始めた。

「私の秘密、聞いたんだよね？ 私、心がドキドキすると、辺りで地震が起こるの。だから、師範代や吉香ちゃんは、大災害が起こるかもしれないから、なんとか食い止めようとして、私に平常心を鍛えろって言ってくれているの」

戸呂音は、千具良は自身の体質について何も知らない、と話していたが、しっかりと知っているらしい。

「お前も、そんな夢みたいな話を信じているのか？」

「だって、本当だもの。誰かに言われたから、そう思ったわけじゃないよ。私自身が、一番感じるんだよ。心臓が高鳴る度に、足元が揺れる感覚。鼓動の響きが強ければ強いほど、激しい揺れが起こるって。だから、地震が起こって、被害に遭っている人たちや動物たちを見るのは、とても辛かった。何か力になればいいと思ったけれど、何をやっても偽善みたいで.....。結局、私がちゃんと、感情の制御をできるようにならなきゃ駄目なんだよね」

話題の中心にいる千具良が、そうはっきりと断言しているのなら、戸呂音の話も間違いがない、と認めるしかないのだろうか。

ここで仮に米斗が反論したとしても、地震の原因が千具良だという根拠もなければ、原因ではないという証拠も、米斗は持ち合わせていない事実気付く。

慰め程度に意見を述べたところで、千具良のためにはならない。

この場は敢えて、千具良が地震を起こしていることを前提に、話を聞くことにした。

「私のせいなの。小さいときから、この道場で精神と体を鍛えて、ちょっとのことじゃ激しい動悸を起こさないように、訓練続けてきたのに、全然進歩がなくて、みんなに迷惑かけて。米斗くんにも、嫌な思いさせたね」

「俺は迷惑じゃないし、嫌な思いもしていない」

「米斗くん、優しいもんね。私、甘えすぎたんだ。……吉香ちゃんに、米斗くんみたいなすごい人がいるって教えてもらったから、近付いて色々教えてもらおうって、私が進んで行動したの。平常心の鍛え方とか、いつでも冷静にいられる方法を、教えてもらいたかったの。男の子と違和感なく一緒にいるためには、彼女になるのが一番簡単だと思って。だから、その……」

千具良は、震える口を、必死で動かしていた。米斗もあえて何も言わず、千具良の言葉が纏まるまで待った。

待った挙句、受け取った言葉は、残酷な部類に入るものだった。

「……全部、お芝居だったの。私が米斗くんの彼女になりたかったのは、平常心を身に付けたかったから。それだけなの。本当に、米斗くんが好きで、告白したわけじゃないの。ごめんね。最低だよ、私」

ついに堰を切って、千具良は涙を流し始めた。ずっと、米斗を騙している罪悪感に、苛まれて過ごして来たのだろうか。以前、道端で急に泣き出した理由が、今となっては理解できる気がする。

北斗が前に忠告してきた言葉も、思い出されてきた。千具良にからかわれて、騙されているだけなのだと。

千具良の吐いた嘘は、お遊び感覚での軽いものでは、決してない。自身の特異な体質に苦しみながら、悩んだ末の苦肉の策だったのだろう。

責めるつもりはない。だが、結果としては騙されていた事実には変わりはない。

「全部知られちゃったから、米斗くんとはもう一緒にはいられない。だからもう、終わりにしよう？」

意を決し、千具良は震える声を張り上げた。千具良は、米斗の見せる反応が分からずに怯えている風だったが、当の米斗は普段とそれほど変わらず、無表情を貫いていた。

「……まだ、平常心は身に付いていないんだろう？ まだ可能性は残ってるんだ、なのに、もう止めるのか？」

淡々と訊ねると、千具良は頷いた。

なら、仕方がない。千具良が決めたことだ、米斗にどうこう言える権利はない。

「そうか。なら、別れよう。じゃあな」

簡潔に話を終了させ、米斗は正門をくぐって道場を去った。背中に、何か言いたそうな千具良の視線を感じたが、もうそれ以上細かい話をする気は、米斗にはなかった。

第三者から見れば薄情だと言われそうだが、千具良の意思を汲むなら、これが一番最良だと米斗は思っている。

以前、北斗にも言った。

「千具良は、俺に付き合ってくれって言った、俺はそれを了承した。だから千具良が俺と別れる

って言うまで、俺はあいつの彼氏を続けるんだ。余計な理屈は必要ない」

別れてくれと言われたから、別れた。それだけのことだ。

いつも通りの気持ちでいたつもりだったが、どことなく全身がざわついて、落ち着かない。

空を見上げると、星空の中を流れ星が一つ、落ちていった。

消えるまでに願い事を三回言うと、叶うというらしいが、願いを考える気も起らなかった。

米斗はいつもより無意識に早足で、帰宅の途についた。

☆彡 ☆彡 ☆彡

「こら米斗！ こんな夜遅くまで、どこをほつつき歩いていたんだ。そんな不良に育てた覚えはないぞ！」

米斗が帰宅してくると、北斗は玄関に飛んで行って説教を繰り出した。

まだ時刻は、七時を回ったところだ。別に普通の高校生にしてみれば遅くもなんともないが、部活もしていない、普段は五時くらいには必ず家にいる米斗にとっては、珍しい帰宅時間だった。

少し前に帰宅して、米斗が帰っていないと気付くや否や、北斗はとてつもない不安に駆られて狂乱し、今にも家を飛び出しそうになっていたところだ。

「こんな時間まで、どこに行っていたんだ？ ちゃんと言え」

「……千具良の家」

「何!? まっ、まだ早いぞ、夜這いなんて！」

「そんなんじゃない。別れてきた」

「何っ？」

北斗は耳を疑った。何度か聞きなおそうとしたが、米斗はその後、一度も口を利かなかった。その結果、聞き間違えたのではないと確信すると、北斗は安心したり怪しい踊りを踊ったりと、お祭り騒ぎで囃し立てた。

「そうかそうか！ うんうん、それがいいよ。これでやっと、俺も安心できるし、お前も、元の調子に戻れるだろう」

一人ではしゃいでいる北斗を無視して、米斗は廊下を横切り、階段を登っていった。その横顔を見て、北斗は、はたと動きを止める。

生まれて初めて見る、鋭い眼光。表情もいつもの無表情と変わらなさそうだが、普段から誰よりも注意深く米斗を見てきた北斗には、違いが何となく分かる。

とても強張った顔に、怒りを露にしている。近寄りがたい、不穏な空気をじわじわと醸し出していた。

「米斗……？」

弟の変貌に、北斗は少し動揺するが、すでに部屋に閉じこもってしまった米斗の側に、それ以上踏み込む隙も度胸もなかった。

## 17. 米斗の苛立ち

---

翌朝。米斗はいつもどおり、七時五十分に家を出た。

いつもどおりの速度で歩いていく米斗の目の下には、真っ黒い隈ができています。

昨夜、珍しく一睡もできなかったのだった。

自分の調子が、なにやら崩れていると気付いた米斗は、少し戸惑っていた。北斗の影からの体調管理援助のため、今までに病気らしい病気もした経験がなかったので、こんな風に体調が悪くなったとき、どうすればいいかわからず、一晩中考えていた。

しかし、いっこうに答は出てこなかった。

いつもの通学路。交差点を右折したその向こうで、いつもと変わらず千具良が待っていた。米斗が近づくと、その姿が蜃気楼みたいに消えて、誰もいなくなる。

千具良がない。

いつもと違う。

体調が悪い原因は、淡々と過ごしてきた日常生活のペースが乱れたからだろうか。でも、初めて千具良と一緒に学校へ行き始めたときには、何事もなかった。

ぽっかりと心に穴が開いた、そんな感じだ。そして何か物足りず、何かが喉の奥で引っかかっている。

ずしっ。

軽い余震が、地面を揺らした。外にいる人間には、おおよそ感じ取れない小さな揺れ。それを敏感に感じ取った米斗の頭に、千具良の姿が浮かび上がる。

戸呂音や千具良から、あんな話を聞いた後だから、地面が揺れるたびに、千具良が何かに驚いているのだろうか、無意識に考えてしまう。

でもそれは、憶測の域を出ない過程の話だ。そんな確信のない話を真に受けるなんて、米斗らしくない。やっぱり、調子がどこかおかしいのだろう。

米斗は頭を軽く振って雑念を追い払おうと葛藤したが、あまり効果はなかった。

きっとこんな症状は、医者へ行っても、薬を飲んでも治らないのだろう。

「……自分で、何とかせにゃならんな」

呟き、米斗は一人、淡々と通学路を歩き出した。

☆彡 ☆彡 ☆彡

昼休み。廊下を悲鳴が駆け抜けた。

「もっ、もう分かった！ 俺たちが悪かった！」

「僕は怪我人なんだよ、ほれ、腰にギプス、ギプス！」

武藤と富田が走る、走る、走って叫ぶ。

その後を、米斗が淡々と追いかける。

相変わらず無表情なため、周りの人間には、米斗がなぜ、二人を追いかけているのか、分から

ない。怒っている風にも見えないし、別に楽しんでいる感じにも思えない。ただひたすら、二人との距離を縮めも広げもせず、淡々と追いかけているだけだった。

追いかけている側からすれば、かなりの脅威だったろう。米斗の行動の意味に、思い当たる節があるのだから、尚更だ。

「あうちっ！」

富田が転んだ。腹に巻いたギプスが滑り、廊下をスライディングする。それに蹴躓いて、武藤も顔面を床にこすり付けた。その先には、渡り廊下に繋がるドアが閉じられている。行き止まりだ。

数メートル手前に階段があったが、もう戻れない。米斗が目の前まで迫っていた。

武藤は意を決して、懐から小さなフィギュアを取り出した。

「落ち着け、米斗。昨日の件は、ちゃんと謝っただろう。それでも気が治まらんなら、ほれ、これをやろう。数量限定生産の、プロレス世界チャンピオンのフィギュアだ。すごいだろう、おそらく日本でこれを持っているのは俺だけだ」

「いらん」

「なら、オカルト研究室にある、等身大グレイ人形を」

「あっ、こら、勝手に僕のお宝を……」

富田が芋虫みたいに、クネクネジタバタする。

「いらん」

「ならいったい、俺たちはどうすればいいんだ？ いつまでお前は、俺たちを追いかけてくるつもりだ」

「お前たちが人の話も聞かずに、俺の顔を見た途端、逃げたから追いかけたんだ。もう逃げ場はないから、追いかけるはしない。今からちょっと、図書室で調べ物を手伝え」

「「図書室う？」」

間の抜けた声を出し、武藤と富田は顔を見合わせた。

☆彡 ☆彡 ☆彡

図書室の管理をしている用務員は、午後になると食事を兼ねて校庭の見回りや花壇の世話をしに行くため、留守になる。

その面子をいくら凝視しても、図書室と言う単語が連想されてこないような、本とは無縁に近い三人組は、午後の授業をエスケープして、人のいない図書室に忍び込み、資料室を漁っていた。

十七年前の新聞を探していた。訳も聞かされず、武藤と富田は黙々と記事を読み続ける。

「なあ、お前は、何を探しているんだ？」

「とりあえず、この年に大きな地震がなかったか、調べてくれ。それに関係しそうなものなら、他に何でも」

米斗は、千具良と地震の関係を、昔に遡って調べようとしていた。戸呂音が言ったとおり、彼

女が生まれて後、心臓が激しく振動する度に地震が起こっていたのなら、それに関係する何らかの情報がきっと新聞に残っているのではないだろうか。それを調査すれば、千具良と地震は無関係だと証明できそうな話が一つくらい発見できると考えたのだ。

「なるほど。つまり落合くん、君は我々が生まれた年に異星人たちが一度偵察のために地球へ降り立ち、今のような群発地震を引き起こして去って行ったと仮定しているのだね？ いや、なかなか興味深い」

にやりと笑う、富田のメガネが鈍光を放つ。本当にそうならよかったのに、と米斗は強く思った。

「お、これか？ 八月二十一日、震度五強の連続地震。震源地が彩玄町になってるぞ」

武藤が見つけた、一枚の記事。米斗はぶんどって、細部にまで目を通す。そして右端に小さく書かれた、ある一説を見て、米斗は瞳に確信の色を宿した。

「あった。この記事なら、きっと……」

珍しく、と言うか、初めて活気付いている米斗の表情に、富田と武藤は意外そうに顔を見合わせた。そんな二人など眼中に入れる間もなく、米斗は図書室から飛び出していた。

## 18. 千具良の悩み

---

二年三組の午後の授業は、北斗が受け持つ生物だった。

廊下側の一番後ろの席に座る千具良は、黒板の内容をノートに写しながらも、頭の中は上の空で、ボーっと明後日の方向を見つめていた。

昨日、米斗に別れを告げてから、一度も顔を合わせてはいない。ずっと、米斗がいそうな場所を避けて行動してきた。

米斗がその辺りを歩いている姿を見つけるたびに、見つからないように隠れたり、走って逃げたりを繰り返した。緊張の連続で、今日は何回、余震を起こしてしまったか、見当もつかない。

いつまでこんな生活を続けるのだろう。別れたと言ったって、そんなに避ける必要はない。いつも通りにしていればいいのだけれど――。

同じ境遇にいるはずなのに、相変わらず平常心を保って普通に過ごしている米斗を見ると、一人であたふたして、馬鹿みたいに悩んでいる自分が、すごく恥ずかしくなってくる。だから余計に、顔を合わせ辛い。

私はきっと、一生、米斗くんみたいにはなれない。分かっているのに、これ以上米斗くんを危険な目に遭わせたくないもの。

何かの拍子で大地震が起こったとき、真っ先に被害を受けてしまうのは、千具良の側にいる米斗だ。万が一のときのためにも、少しでも遠く離れておくべきだろう。そうすれば、少しは安心できる。

決めたのだから。これ以上、絶対に米斗の側には近寄らないと。たとえ、何があろうとも。

「――千具良、有栖千具良！」

「はっ、はいっ！」

名前を呼ばれ、千具良は反射的に立ち上がった。同時に、驚いて心臓がドクンと飛び上がる。

ズズズン。震度3強の地震が校舎を揺らした。教室にいた全員が、机に張り付いて揺れをしのぐ。

「まったく、最近の揺れはすごいな。今日は、いつもに増してよく揺れやがる。では気を取り直して、有栖、教科書読んで。十五頁の真ん中辺りからな」

「は、はい、すみません……」

慌てながら、千具良は教科書を持ち上げるが、逆さまだ。それにも気付かず、とにかく落ち着きを取り戻すことに、しばらく専念する。横目に、隣の席に座る吉香の姿が見えた。じっとこちらを観察している。また家に帰ったら、平常心を乱したと説教されるだろう。

千具良は、以前から北斗の授業があまり好きではなかった。突然、何の前触れもなしにランダムで生徒を選んで指名し、教科書を読ませる。

いきなり名前を呼ばれると、不意を突かれて心臓が飛び出しそうになる。それだけならまだしも、今日になって更にこの授業が苦手になった。

……北斗先生の声、米斗くんに、そっくりなんだもん。

兄弟なのだから当然と言えば当然なのだが、あの声で名前を呼ばれると、必要以上に動揺して

しまう。無意識に、千具良の頬が熱くなった。

「千具良！」

ガラリと、教室の後ろの戸が勢いよく開いた。千具良だけでなく、クラス中の生徒が何事かと、後ろを振り返る。

「こっ、米斗くん？」

素っ頓狂な声を上げる千具良。何が何だか分からず、頭の中が真っ白になる。

「ちょっと来い、いいもん見つけたんだ。兄貴、千具良借りてくぞ」

そんな、こちらの動揺など知る由もない、と言った感じで、米斗は千具良の手を掴み、疾風の如く教室から連れ出した。投げ出された教科書が、机の上に落ちて横たわる音だけが、やけに大きく響いて耳に残った。

☆彡 ☆彡 ☆彡

「お、おいつ、米……」

何が起こったのかようやく理解し、北斗が呼び止めようとした時には、既に米斗たちの気配すらなかった。

一部の生徒が、野次る。

「北斗一、弟を鼻屑しすぎじゃないのかー？」

「ちゃんと、他の生徒と平等に注意しろよな。今、授業中だぞ」

「いっ、今の状況は、誰であっても注意できんと思うぞ。つーか、呼び捨て止めろ」

北斗は冷や汗をかきながら、生徒たちを宥めるのに精一杯だった。

## 19. 米斗の空回り

---

「ちょっと待って、米斗くん！ いったい、どうしたの？」

米斗に引っ張られるがままに教室を出てきてしまった千具良は、慌ててブレーキをかける。米斗が立ち止まった時には、既に二階下の図書室の前まで来ていた。

「何があったの？ 今、授業中だよ？」

「いいもん見つけたんだよ。ちょっと待っててくれ」

図書室に入り、カウンターの側に千具良を待たせて、米斗は奥の資料室へ入っていった。まだ授業中なのに怒られないかと千具良は辺りを見渡したが、いつもいる用務員の先生の姿はなかった。それでも色々な意味で不安は拭えない。

「これだ、これ」

米斗が持ってきた紙の束。かなり古い新聞だった。上下の隅が黄ばんだその新聞の日付は、今から十七年も前のものだ。

それをカウンターの上に広げてみせるが、その意図が、まだ千具良には分からない。

第一面を飾る、大きな記事。その年に起こった、大型群発地震の情報だった。千具良は無意識に表情を強張らせた。

「俺たちが生まれた年に起こった地震だ。みんな、こいつのせいで、千具良が地震を起こしたんだと勘違いしてるんだと思う。偶然、お前がびっくりした直後に地震が起きたとか、そういった偶然が重なってさ。でもこの地震は、同じ時期に彩玄町のどっかの山に落下した、隕石の衝突によって引き起こされた、なんて説も書いてある」

米斗は大きな記事の右隅を指差した。地震ほど話題にはならなかったようだが、実際、同じ時期に隕石の落下が確認されていた。

「な？ だから、今までの地震だって、お前のせいじゃないんだ」

まっすぐと千具良を見つめてくる米斗の瞳は、初めて見る輝きを放っていた。それだけの、確実な自信があったのだろう。何も間違っていないと、はっきり言えるほどの。

「……こんなもの見せるために、わざわざこんなところまで連れてきたの？」

だが、千具良は拳を強く握り締め、声を震えさせた。内側から、今までに感じた経験のないほどの怒りが、込み上げてくる。

「米斗くんは、いつも落ち着いていて、何事にも無関心で、事実の流れに逆らわない。そういう人でしょう？ 何で、こんなつまらない調べ物に、一生懸命になってるの？ 私が憧れてた米斗くんは、人につまらない慰めをするために、自分のペースを乱すような人じゃなかった。事実を受け止めろって言われたほうが、全然ましだった！ こんなこと言われるなんて、思いもしなかったよ……」

「ち、千具良……？」

「嫌だよ、米斗くんには、米斗くんにはこんなことして欲しくなかったよ、バカ！ 大っ嫌い!!」

千具良はその勢いで図書室から出て行った。米斗と一度も目を合わせず、涙の粒を後ろに飛ば

しながら。

☆彡 ☆彡 ☆彡

「……ふられた？」

「米斗が、ふられた」

資料室の中から、富田と武藤が顔だけ出した。千具良の大声を聞いて、驚いて様子を見に出てきたのだった。

二人の視点から見て、米斗の後ろ姿からは、怒りのオーラが溢れ出ている気がした。

これ以上、被害に遭いたくないと一致団結した二人は、無言で資料室の窓から飛び出して、教室へと逃げ帰った。

☆彡 ☆彡 ☆彡

放課後。授業をサボったことで担任に三人揃って叱られた後、米斗だけ別途に、北斗に呼び出された。

職員室の一番奥の窓側の席に、兄弟が向かい合って座る。会話は無い。

北斗は呆れて、ものも言えないといった様子だし、米斗の頭の中は、まったく別の考えでいっぱいになっている。

意を決し、米斗が先に口を開いた。

「兄貴」

「何だ」

「俺は今、兄貴と話してる暇がないんだ」

「そんなこと言っちゃうのは、この口か、ええ？」

北斗は米斗の顔を両手で挟み込み、頬を摘んで引き伸ばした。

「痛い、痛い兄貴」

「やかましい。授業はサボるわ、いきなり人の講義中に有栖を拉致って逃走したかと思えば、図書室で大昔の資料漁ってただの、お前はいったい、何をしてるんだ？ お前はそんな脈絡のない行動をする奴じゃなかつたらう。どうしたんだ、何で自分のペースを乱されているんだ。有栖とは、もう別れたんだらう？ いつもみたいに、無理なものには無理と、何でけじめがつけられないんだ」

「……俺だって、分かってるよ。自分のやってることがおかしい、ってことくらい。きっと、少し前の俺が見れば、馬鹿馬鹿しくて無駄だと思う行動を、今の俺は必死でしているんだと思う。でも、止められないんだよ。こんな馬鹿なことでもしなきゃ、俺は前へ進めない、何も手に付かない」

話を聞いていた北斗表情には、焦りが浮かんでいた。無理もない、今日の米斗は、特にいつもと違う。平常心や無関心を基盤としたマイペースさを乱している。誰の目にも明らかだった。

もちろん、米斗自身も以上に気付いている。でも、自分の思うままに動くしか、この戸惑いの解消法が思いつかない。それが全て空回りに終わったとしても、もう米斗は止まることはできなかった。

「もっと落ち着いて、ゆっくり考えるんだ。お前には、お前らしい生き方ってもんがあるだろう？ 今までだって、そういった考えに則って、それなりに上手く生活してきたじゃないか。って、聞いているか？ おい、よそ見するな」

弟を必死で諭そうとする兄の努力も空しく、米斗の視線は、職員室から見渡せる窓の向こう側の光景に、釘付けだった。

二階にある職員室のちょうど真下に、生徒用の玄関がある。そこから出て、長い坂道を下り、校門に到るまでの景色が、よく見える。

そして玄関から出てきた、見慣れた後ろ姿を発見し、米斗は勢いよく立ち上がった。

「悪い、兄貴。説教は家で聞く」

そういうや否や、すさまじい勢いで職員室を飛び出していった。

☆彡 ☆彡 ☆彡

「おっ、おい、米……」

事態に気づき、北斗が呼び止めようとした時には、既に米斗の気配すらなかった。

「落合先生一、弟だからって、少し甘やかしすぎじゃ、ありませんかね？」

「まったくですよ、もう少しビシッとしていただかないと、示しがつきませんぜ」

一部始終を見守っていた年配の教師陣が、茶をすすりながら野次を飛ばす。

「いっ、いや、今のは、他の先生方でも止められんかったと思いますですよ!？」

北斗は冷や汗をかきながら、先輩であるベテラン教師たちに言い訳をするのに必死だった。

## 20. 最後のチャンス

---

米斗は走った。階段を駆け下り、上履きのまま外へ飛び出して、前方に広がる坂道を、ざっと見渡した。

目的の人物を、発見した。小柄な体格の少女の背中に向かって、声を荒立てる。

「おい、千具良！」

周辺にいた帰宅する生徒や、部活途中の生徒が、一斉にこちらを向いた。

千具良だけは振り返らず、一度ピクッと体を震わせて反応したが、そのまま一気に、坂を駆け下りて行ってしまった。

「ちょっと待て、千具……」

追いかけてしようとした米斗の腕が、後ろから掴まれた。立ち止まって振り返ると、吉香の白い手が米斗を抑え込んでいる。

吉香は、そのままの体勢で、呆れて息を吐いた。

「まさか、あなたがこんなにしつこい人だとは、思わなかったわ」

「何だっていいだろう、放せよ……」

振り払おうとした米斗の腕が、激痛に襲われる。吉香が指に力を入れて、捻りだした。そのまま吉香は、米斗の耳元で、忠告を囁く。

「私がロボットだってことを、お忘れ？ あなたの腕なんて、簡単にへし折れるのよ。あなたはもう、彼女に見限られたのでしょうか？ 男なら潔く、諦めなさいな。私や師範代から見ても、もうあなたは世界を救うための必要分子では有り得ない。はっきり言えば邪魔なの。これ以上、あなたが千具良にちょっかいかけたところで、あの子が動揺するだけなの。逆に地震を起こす頻度を増やすことになってしまうわ。……あなたにできることなんて、もはや何もないのよ」

容赦ない吉香の言葉に、米斗の体の力が抜けた。

それに合わせて、吉香は米斗の腕を開放した。直後、彼女の携帯電話の着信が鳴り響く。

「はい、吉香です。……はい、分かりました。今から帰宅します。彼女も、既に校門を出ました。ええ、大丈夫、一人です。……はい、了解しました」

通話を切り、吉香は歩き出した。

「急用ができたので、私は帰るわ。じゃあね」

回りの時間が、いつもと変わらず流れていく。米斗の中の時間だけが止まっているかのように、ずっとそこに立ち尽くしていた。周りの騒がしい雑音も、耳に入ってこない。ただ呆然と、誰もいなくなった坂道を見つめるだけ。

ふと、制服のポケットに手を突っ込み、米斗はあることを思い出した。

「そうか、携帯……」

これが、千具良と会話する最後のチャンスだ。そう思い、米斗は荷物をまとめて学校を出た。

☆彡 ☆彡 ☆彡

帰宅途中、とある路地裏に屈み込んで、米斗は自分のスマホをじっと睨み付けていた。

千具良の携帯番号もメールアドレスも、付き合い始めた頃に交換したので、保存してある。だが、千具良が機械音痴だったり、米斗が返事も送らない面倒くさがりだといった性格から、通信機器は全く使い物にならず、連絡も一度もしないままだった。

まだ別れて一日も経っていないのだから、おそらく、千具良の携帯から米斗の番号はまだ消されてはいないだろう。

だが、上手く繋がったとしても、向こうが物凄く怒っていたら、すぐに切られて着信拒否されてしまうかもしれない。そうなっては、もう成す術もない。そう思うと、米斗のボタンを押す指が、少し躊躇った。しかし、それしか方法がない以上、千具良の反応に賭けるしかない。

米斗は千具良の番号を指して、通話ボタンを押した。

十数秒の接続音。その間に幾度か、地面が揺れた。しばらくして揺れが治まり、か細い、千具良の声が耳の中に入ってきた。

『……米斗くん？』

千具良の声は、震えていた。自分の焦りが、そう思わせるのかもしれないが、千具良は今にも電源を切ってしまうそうに感じた。

「千具良、しばらく切らないで聞いてくれ。さっきは、ごめん、悪かった。俺も、柄になく必死になって、空回りしていたみたいだ」

『ううん、あの、私こそ、ついカッとなって、ごめんなさい、あんな酷い言い方して』

千具良はだんだん落ち着いてきたらしく、声も震えなくなってきた。

「いや、千具良が怒っても無理ないよ。それだけの失言を、俺はしたんだ。……でも、あれで俺ができそうなことは全部やったつもりだし、今でも千具良のせいで地震が起こっているとは、はっきり信じられない。だからもう一度、千具良の考えが聞きたいんだ。……今、どこにいる？」

『前に、米斗くんに助けてもらった公園……』

武藤と富田によって、押し込み強盗をされていたあの場所だ。米斗は残念ながら、助けたわけでも何でもないが。

「周りに、誰かいるか？」

『えと……ううん、今は誰もいないよ』

「じゃあ、周りの目とか、俺の顔色とか、何も気にしなくていいから、千具良が考えている、本当の気持ちを教えてくれ。そうしたら、俺も頭の整理がつくと思うんだ。今なら、千具良の言葉なら、全部受け入れられる」

『でも、私も、何から話せばいいか……』

「愚痴でもなんでもいい。全部聞くから。話が終わるまで、何も言わないから」

『うん、分かった』

千具良は深呼吸して、ゆっくりと話し始めた。

## 21. 千具良の本音

---

千具良が生まれた日と、例の新聞の日付は一致していた。

米斗が生まれてから、二ヶ月くらい後の出来事。

その頃から彩玄町付近を震源とした大きな地震が立て続けに起こるようになったと、道場の師範から聞いたことがあると、千具良は言う。

昨日の戸呂音の言葉が、頭の中で反芻される。

彼女が怒ったり泣いたり驚いたりするたびに、地面はひたすら揺れた。さほど大きなものではなかったが、彼女の両親が、地震と千具良との関係に疑問を持ち出すには、充分だった。

古い友人であった袴田道場の師範に、千具良の父親は相談を持ちかけた。師範の娘、つまり戸呂音が、真っ先に千具良の特質を見抜き、その発生条件まで突き止めたらしい。それを考慮に入れ、師範は無の心と強靱な精神を養えば、普通の人間として周りに危害を与えずに平穏に暮らせるだろうと示し、まだ幼い千具良を預かり、鍛え始めた。

仕事の都合でブラジルへ行ったきりの千具良の両親も、半分は地震の脅威から逃れると、言う理由のために、海を渡ったのかもしれない。

小学校に入って間もなく、千具良は自分の体質に気付いたと言う。学校で授業中に当てられたり、後ろから友達に脅かされたりしたときに、やたら地面が動くことを不思議に思った時がきっかけだった。だが、道場の誰に聞いても気のせいだと言われるため、その時はさほど気にしなかったが、小学校高学年、中学校と学年があがる度に、その気のせいは確信に変わり、回りのみんなが気を遣って、知らないふりをしているのだと分かった。

千具良も人に気を遣う性格だから、みんなの本音に気付いていないふりをして、互いに騙しあって生活してきたらしい。今もそうだろう。

最初は大きく心配はしていなかったのだが、自分のせいで地震が起こり、それに怯える友人たちを見て罪悪感が沸いたり、幾度もしつこく起こる地震に対して苛立ちを覚える知人の矛先が、まるで自分に向かっている気がしてきて、だんだん千具良の中で不安や悩みが広がっていった。何とか平常心を身に着けて心を無にし、二度と地震を起こさない体になろうと、必死で鍛錬を積んできたが、千具良一人では限界があった。

これ以上の修行は無意味と感じ、落ち込んでいるときに、少し前に住み込みで入ってきた門下生の吉香から、米斗の話を聞いて、告白に至ったのだという。

☆彡 ☆彡 ☆彡

ある程度まで、千具良は心の中にあったものを、順を追って全て吐き出した。

米斗がタイミング良く後押しをするように相槌を打ってくれるので、まるで自分の口ではないように、すらすらと言葉を紡ぐことができた。

「でね、それまでは私、米斗くんの話とか噂とか、全然聞いたことがなくて、初めて廊下で米斗くんを見たときに、すごく感動したの。あそこまで生気の感じられない人、初めて見たと思って

。あ、悪い意味じゃないんだよ。なんだか、空気みたいで、もう俗世間からかけ離れて、仙人みたいに平常心が安定してるなって。それでね、もし一緒にいられれば、平常心でいられるコツがつかめるかなって思って、最初は軽い気持ちで告白したの……」

『うん、それで』

「だけど、米斗くんと話をしたり、一緒にいるうちに、だんだん米斗くんのこと、す、好きになっていくのが分かって、だから余計に、こうして嘘をついて一緒にいることが悪い気がしてきて……。昨日、私が言いかけたこと、覚えてるかな？ 米斗くんと、その、キスしたくないって言って、その後……」

『うん、覚えてる』

「続きを言うね。……私が思うに、そう言うのは、本当の恋人同士がするものだと思ったの。だから、私にはふさわしくない。そんな権利ないから、したくないって言ったの。利用するために近付いたのに、本当に好きになったからって、途中から急に本当の恋人同士みたいな態度とるなんて、卑怯でしょう？」

電話ごしには、はっきりと千具良自身の意図を伝えられた。言葉の詰まりもなく、全て吐き出したことに安心感を得たが、同時に黙ってしまった米斗が、何を考えているのか、少し気になる。

でも、ここは敢えて聞かなかった。米斗なら、深い理屈なしで自分の発した言葉を、ありのままに受け入れてくれると信じている。だから、こちらも彼の意に応えるために、思ったことを全て言ってしまおうと、再度口を開いた。

「だけど、せめて、素性がばれて嫌われてしまうまでは、ずっとこのままでいたいと思ったの。でも間接的に、私のことがばれちゃって、だから私、急に嫌われるのが怖くなって、どうせ嫌われるなら言われる前に言ってしまえと思って、あの時は急に酷い別れ方して、ごめんなさい」

『いや、まあいいけど。……でも俺は、千具良の素性を聞いても、千具良を嫌いにはならなかった。今も、思っていない』

「でも米斗くん、私が別れようって言ったとき、じゃあさうしようって……」

『だって、千具良が別れたいって言ったんだから、俺にはこれ以上どうすることもできないなって、あの時は思ったんだ。でも家に帰ってから、結局どうにかならないかと思って、ずっと色々考えて続けて、気が付いたら意味の分からない行動をとっていた』

「米斗くんでも、悩むことがあるんだね」

『一応、人間だしな。つーかお前、人を何だと……』

「ごっ、ごめん！ そんなつもりじゃなくて……」

慌てながら、千具良はいつの間にか笑っていた。どうしてだか気分が囃し立てられ、笑いが止まらない。この声は、携帯を通して米斗にも聞こえているだろう。そのことが何だか恥ずかしくて、嬉しかった。

『どうしたんだ？ 急に』

「わっ、わかんない、何だかおかしくなってきて……。安心して、気が抜けちゃったのかな」

『そうか？ でも千具良はさうやって、いつも笑っている方がいいな。俺も何だか安心する』

米斗の声は、本当に安心して聞こえた。普段は中々感じ取れない、米斗の正直な感情に触れられた気がして、千具良は嬉しかった。

『俺はずっと、人生なんて周りの流れに合わせて、そのまま流れていけばいいと思っていた。千具良に告白された時も、相手が望むならって、俺の意志とは関係なく、軽い気持ちだった。付き合い続けるなら続けるし、別れるなら別れればいいって。だけど、千具良が別れるって言った時、表面では納得していても、心の中ではずっと嫌な気持ちが溜まってて。今になって、やっと分かったんだ。――俺も、千具良のこと、好きになってた』

米斗の落ち着いた静かな声に、千具良の心臓が激しく高鳴った。

ズシン、と、強い縦揺れが地面の下から突き上げてきて、千具良は飛び上がった。周囲の木々から、小鳥たちがパニックを起こしながら飛び立っていく。

電話の向こう側では、米斗の悲鳴に近い声が聞こえてきた。多少の出来事では動揺しない米斗も、タイミングの良い突然の地震に、少し慌てたのだろう。

『だ、だから、千具良が地震を起こす体質だろうが、俺は構わない。できるだけ千具良が動揺を抑えられるように、俺も協力するから、千具良の側に、いさせてくれないか』

米斗の言葉に、千具良の頬を涙が伝った。

千具良の持つ、この厄介な体質も、米斗を利用しようとした我儘な考え方も、全部。

千具良の全てを、米斗は受け止めてくれようとしている。初めてだ、こんな人。

初めてだ、こんな気持ち。

好きで好きで、堪えられない。頭の中が、胸の中が米斗で一杯になっていく。溢れそうになる。その度に、胸が締め付けられる。

――鼓動が、早くなる。

バクバクと、今までにどんな運動をしても動かなかった心臓が、恐ろしいほど激しく脈打ち始めた。

心臓を走る血管が脈打つ度に、地面が揺れる。激しい揺れが、とめどなく続いていく。

周囲から悲鳴が聞こえた。車のブレーキ音、クラクションの音。何かが倒れる、破壊音。

駄目だ、止められない。

『千具良、大丈夫か!?!』

異変に気付いた米斗が、電話越しに声を張り上げる。

「ごめんなさい、あの、私……」

やっとのことで口を開いた千具良は、泣きながら米斗に助けを求めた。

「米斗くんが、好きなの。大好きなの！ 本気で好きになっちゃったから、米斗くんのことを考えるだけで、心臓がドキドキして、止まらないよ！ どうすればいいの!?!」

『とりあえず、落ち着け！ 深呼吸だ、深呼吸』

米斗の指示を受け、千具良は大きく息を吸い、ゆっくりと吐き出した。それでも、中々激しい鼓動は治まってくれない。

『今から、公園に行く。じっとして、待っていてくれ』

「来ちゃダメだよ！ 米斗君の顔見たら、きっとまた、心臓が……」

電話を切ろうとする米斗を引き留めながらも、千具良は深呼吸を続ける。

ようやく、脈が正常に戻ってきた。同時に、地面の揺れも、徐々に小さくなった。

「大丈夫、治まってきたから」

まだ、軽い余震は続発しているが、足の裏に注意を向けなければ分からないほど、微小なものになった。

「もう、平気。何とか、落ち着いた」

千具良が報告すると、米斗の声色にも安堵が広がった。

『そうか？ それなら良かった……。え、何だよ。あ、お前、この前の……』

安心したのも束の間。

電話越しの、米斗の様子が急に変わった。

『何するんだ、おい、ちょ……』

ブチッ。ツーツー。

「……こ、米斗くん？」

突然切れた通話。何があったのか呼びかけてみても、当たり前だが応答はない。不自然な切れ方だった。電池が切れたとか、そんな不自然さではない。明らかに、人為的に切られた感じがした。

米斗の身に、何か起こったのだろうか。妙に不安が襲い、胸騒ぎがした。

すると、切れた電話が、再び着信音を鳴らす。相手は米斗だった。

「もしもし？ 米斗くん!？」

慌てて電話に出るが、向こうから聞こえてきた笑い声は、米斗とは似ても似つかなかった。

『よお、久しぶりだな、嬢ちゃん』

どすの利いた、嫌な感じの男の声。そのねちっこい口調が癪に障るが、それ以上に、恐怖が千具良を襲った。

## 22. 誘拐その2

---

「誰ですか、あなたは？ 米斗くんは？ その携帯を持っていた人は？」

『おいおい、俺のことを、忘れちゃったのかい？ つれねえなあ。もう一回、冷たいピストルの感触を味わってみれば、思い出すか？』

「あなた、銀行で……？」

おそらく、間違いない。数週間前、米斗と一緒にいくわした、銀行強盗。千具良が道場で養った武術が本領を発揮し、無意識のうちに倒したはずだ。

「ど、どうして？ 逮捕されたはずなのに」

『どうやら、思い出してくれたらしいな。嬉しいぜ。ちょっと、抜け出してきたのよ。俺たちにあんな恥をかかせてくれた、お嬢ちゃんを痛い目に遭わせてストレス発散でもしなきゃ、イライラしていつまでも更生しようって気になれねえからな。こっちのクソガキは、いわゆる人質だ。あんたが俺のところに来て素直にボコられるまで、放してやらねえぜ。もちろん、来なけりゃどうなるかは、想像つくよな？』

「やめてよっ、米斗くんは関係ないでしょう？」

『ないってこたあ、ないだろう？ こいつも、あの場所にいたんだしなあ』

『千具良！ 罨だ、絶対に来るなよ、分かったな……！』

「米斗くん!？」

少し遠くから、米斗の怒鳴り声が聞こえた。それと同時に男の怒鳴り声と、一発の銃声。千具良の顔が青褪めた。

『ったく、静かにさせとけ！ おっと、すまねえな嬢ちゃん。安心しろ、今は生きてる。銃声にその辺の奴らが気付いたかもしれないからな、場所を変えよう。そうだ、いまから嬢ちゃんのいる場所へ行ってやろう。どこにいるのか言いな。言わないと、もう一発……』

「わっ、分かったから、言うから、もう止めて！」

声を震わせながら、千具良は自分の居場所を告げた。もともと人通りの少ない場所だ、ピストルを発砲されても、誰かに危害が加わることはないだろう。

嫌味な笑い声と共に、電話は途切れた。

千具良は携帯を右手の握力だけで、握り潰した。心の中が静まり、感情が無に染まっていく感覚が、自分自身にもよく分かった。

☆彡 ☆彡 ☆彡

電話を切った、黒い革ジャンと革パンを身に着けた長身の男は、携帯電話を地面に落とし、一気に踏みつけた。大量の細かい罫が入り、携帯は破壊される。それを見て満足し、男は後ろを向いた。

「さて、お前の可愛い彼女のところに、行くとしようかねえ？」

嫌味たっぷりに笑う男を、米斗は思いっきり睨み付けた。それを見た男は米斗の顔面に蹴りを

入れる。口の中が切れ、血の滴が辺りに散る。

「気に入らねえな、このクソガキが。よお兄ちゃん、お前なんざ、今すぐ始末してやってもいいんだぜ？ あの嬢ちゃんとは、ちゃんと連絡が取れたんだからな」

顔を泥だらけにした米斗は、それでも表情を変えず、男に向かって赤い唾を吐いた。

「テメェ！」

男がもう一発蹴りを食らわせようと足を上げる。それを、米斗を差し押さえていたもう一人の男が制止させた。

「その辺にしておけ、早く移動せんと、怪しんだ住民がやってくるでござる」

サムライだった。

「さっきからの地震で、大通りが騒がしくなってきた。目撃者が増える前に、さっさとずらかるぞ」

男は米斗の顔に唾を吐きかけ、機嫌悪そうに路地裏の奥へと入っていった。

米斗の顔を手ぬぐいで拭き、サムライが言った。

「お主の役目はもう済んだのだ。これ以上の抵抗は、命を危険に晒すばかり。大人しくしていれば命までは取らぬ、しばし、じっとしておれ」

そして猿轡をされ、サムライに担がれて、米斗は連れて行かれた。

## 23. ストーカー兄貴と師範代

---

ところ変わって、商店街の外れの、たこ焼き屋台。

そこで一人淋しく、北斗はたこ焼きを突いていた。

「ちくしょー。何で俺ばかり怒られるんだ？ あれは絶対に俺のせいじゃないぞ、米斗が悪いんだ、そうに決まってる、いや、確実にそうなんだ！」

日頃のストレスを発散すべく、一人たこ焼きに向かって愚痴をこぼす。たこ焼き程度にしか愚痴のぶつけどころがない現状が、情けなくもあるが。

だが、イライラする生理現象は止めようがない。さっきからやたらと揺れる地面にも苛立ちを覚えながら、北斗は延々と、くだを撒き続けていた。

暖簾を潜って、新しい客が屋台に顔を出した。屋台の主人が接待を始める。

「おいしそうですね。わたくしにも、たこ焼きを一人前。そうそう、もうすぐ連れが来ますので、二人前、焼きはじめておいてくださいな」

丁寧な言葉遣いの、高い女の声が北斗の耳を右から左へ抜けていく。

どこの金持ちの令嬢かは知らんが、生意気にも一般庶民の宝、たこ焼きを租借しようとは頭が高いにもほどがある。いつもよりイライラしていた北斗は、どんな小娘じゃ、と横目で隣に腰を据える人物を睨み付けた。

「はっ！ 袴田！」

途端驚いて思わず席を立ち、構える。頭を屋台の天井にぶつけたが、そんな痛みなど、目の前の緊急事態に比べれば、大した問題ではない。

目の前の人物は、北斗がとても良く知る人物だった。同時に、最も顔を突き合わせたくない人物でもあった。

人形のような綺麗な顔をした、長い、乱れの無い黒髪を水平に切りそろえた、白い肌の美しい女。白い着物の上から、白衣を腕に通さず羽織っている。

どことなく人外めいた、妖艶な美を醸し出す、若い女性。

袴田道場師範代兼科学者、北斗の高校時代の同級生でもある、袴田戸呂音だ。

戸呂音はゆっくりと顔を上げ、北斗をじっと見つめた。その目に見つめられた時点で、北斗は蛇に睨まれた蛙の如く、身動きが取れなくなってしまった。

「あら、まあ。どこの腐れサラリーマンかと思えば、あなたは落合北斗さんではありませんか。お久しぶりでございます」

「ど、どうも……」

「そんな体勢では、お疲れになるでしょう？ どうぞ、こちらにお掛けください」

驚いたポーズのまま固まってしまっていた北斗は、戸呂音に言われるがままに、大人しく椅子に座る。

北斗は昔から、この女が苦手だった。高校入学早々、隣の席になったからといって科学研究部なる組織に囲い込まれ、米斗を見守らねばならぬ北斗の使命を、ことごとく邪魔するだけでなく、健全な北斗の体を使って妙な改造実験まで始めようとする、何を考えているのか先の読めない

妖怪のような女であった記憶しか残っていないし、その出来事がトラウマになっている。

「今は母校で生物を教えていらっしゃるそうですね。あなたは化学より生物のほうが向いていると、昔から思っておりました。わが道場の門下生、有栖千具良と真島吉香がお世話になっておりますようで」

「い、いや、とんでもなかとです」

頭を下げられ、北斗はビビる。彼女の行動一つ一つが、北斗にとって脅威となっている。しかしながら、千具良の名前が出てきたところから、北斗の勢いが少し強くなった。

「そうだ、有栖と言え、弟をたぶらかされて、俺は非常に迷惑をしているんだが。もしや、あんたの差し金じゃないだろうな？」

「うふふ、本当に弟さんを大事になさっているのですね。先日、米斗さんにお会いしました。あなたそっくりな顔なのに、あなたとは違って寡黙で冷静で、何も考えていない方でしたわ」

褒められているのか貶されているのか分からないが、とりあえず話を聞こうと北斗は口を突っ込むのを止めておいた。

「確かに、千具良さんに米斗さんの存在を教え、交際をしてみても、と薦めたのは、わたくしと吉香さんです。ですが別に、あなたの考えていそうな、いかがわしい交流を持たせようとしたわけではありません」

「俺は別に、そういうつもりで二人を反対しているわけではないのだが……」

もちろん、まだ未成年である二人が不純交際に手を染めるなど、あってはならない話ではある。だが、あくまで北斗が二人の仲を裂こうとする理由は、その点にはなかった。

「違うのですか？ 失礼、たこ焼きが焼き上がりましたので、一ついただきます。……あらおいしい、お上手ですね」

戸呂音に褒められ、店主は照れる。口を上品に拭き、戸呂音は続けた。

「話がそれましたね。それで、なぜわたくしがあなたの弟さんを薦めたかと言うと――」

「平常心、だろう？」

「あら、ご存知でしたの？」

「二人に聞いてみれば、そういったことをゴニョゴニョ言っていたからな。袴田流の教えだとか、何とか？」

「それもあります。千具良さんは、わたくしの教えを的確に身に付けられなかったので、強攻策に出たのです。結局、失敗に終わってしまいましたけど」

「……なぜ、そこまで、あんたたちは平常心にこだわるんだ？ いくら教えとはいえ、ちょっと厳しいんじゃないのか。本来、そんな人間味のないそっけない心、生きていく上で、何もメリットもない」

憂鬱そうに息を吐き、北斗は茶を啜った。長年、米斗を見てきたから良く分かる。本人は気にしていないが、回りの人間はみんな、米斗をつまらない人間だとか、訳の分からない奴だといって、見下したり罵ったり、陰口を叩いていた。見つけ次第、そういう輩は叩き伏せたが、それでは解決にならない。

何とかしてやりたいとも思ったが、一度米斗があんな正確になってしまった以上、どうしよう

もない。戻す度胸も、北斗にはない。

「それに、俺があいつに気を配っているのは、全てがあいつを心配しているからって訳でもないんだ。どっちかって言うと、あいつと関わった人間が、あいつのせいでとんでもない目に遭うんじゃないかと思うと、正直やりきれない。だからしつこく見張ったり、彼女とか作るのに反対してるんだよ」

「それは、どういう意味ですか？」

北斗の意味深な物言いに、戸呂音は興味深そうに眉を顰めた。

「……まあ、人様には言えん事情ってもんがある。あんたみたいな人外的な変な奴にも、な」

「そうですか。では、わたくしがお話をいたしましょうか。なぜそこまで、千具良さんの平常心にこだわるのか」

戸呂音は千具良に関する、自分が知りうる事実を淡々と北斗に教えた。聞けば聞くほど、北斗の顔を汗が伝い、最後には滝のように流れた。店主に手渡されたタオルで、必死に顔を拭いている。

「――まあ、そういうわけで、世界を崩壊から救うためには、どうしても米斗さんのような平常心を、千具良さんにも身に付けさせたいと考えたのです」

話が終わる。少し間をおいて、北斗が声を殺して笑い出した。戸呂音は訝しげに首を傾げた。

「……何か、おかしい点でもありましたか？」

「いや、別にないさ。ただ、なんともやりきれなくてね。そんな体質を持った奴が、こんな近くに二人もいるなんて、どうなっているんだろう、と思ってさ」

タオルを絞りながら苦笑する北斗。汗が大量に捻り出され、地面に水溜まりを作る。

「二人……？」

戸呂音の表情が美しく歪んだ。慌てふためき、北斗の腕に手をかける。

「まっ、まさか、米斗さんまで、地震を起こす体質だなんて言わないでしょうね？」

「そのほうが、まだ可愛いんじゃないかな。いや、地震だって充分、恐ろしいさ。でも、あいつはきっとそれ以上だ」

「そっ、それ以上？ どういう意味ですか？」

「失礼します。こちらにおられましたか、師範代」

暖簾をくぐって、新たに客人がやってきた。吉香だ。

「師範代。突然、千具良の携帯が繋がらなくなりました。目撃情報もありませんし、搜索の準備を整える必要があるかと」

「ああ、吉香さん。ち、千具良さんも大変ですが、あ、あなたも座って、北斗さんのお話を……」

「はい……？」

吉香は不思議そうに、北斗と戸呂音を交互に見ていた。

## 24. W大災害

---

人気のない、町外れの静かな公園。日も暮れかけ、夕焼けに空が染まっていた。

「よお、ビビらずに待ってたようだな、偉い偉い」

背の高い、黒づくめの男が笑う。その先には、静かに立ち尽くす小柄な少女、千具良が。

米斗は逃げろと伝えたかったが、猿轡をかまされた上に、サムライに体を押さえつけられている。身動きが取れないし、声も出せない。

だがもし、言葉を発せられたとしても、その声はきっと届かなかっただろう。千具良の表情は、無と化していた。この銀行強盗たちと初めて対峙した時と同じだ。我を忘れて、戦闘モードに入っている。

「おうおう、いい顔してるな。前と全く同じだ、気に入らねえ面しやがって」

男が愚痴り、声を荒立てる。千具良は体を低く構えた。まだ男が油断している隙に、一気に懐へ殴りこむ。

「ぐふっ!!」

男の腹筋に千具良の拳が深く突き刺さった。かなりダメージを食らったらしく、男は咳き込んで、よろめく。体勢が戻る前に、蹴り上げた白い足が男の顎に直撃した。さらに倒れた男の胸板に、すさまじい威力の踵落としが決まる。

「なっ、なんと……」

千具良の猛攻撃に、流石のサムライも啞然とする。激しい戦いに集中してしまい、手元がお留守になっている。チャンスだ。米斗は、そろりと芋虫みたいに這いながら、少しずつサムライと距離をとった。しかし砂を擦る音で気付かれ、サムライの抜いた刀が眼前の地面に突き刺さり、動きを封じられた。

「まっ、待ちな！ あいつが見えねえのか!？」

次の攻撃に移ろうとした千具良を見て、焦った黒づくめの男は叫んだ。

男が指差した先は、米斗だ。

刀を眼前に突き付けられた米斗を見た瞬間、千具良の様子が変化した。闘争心と平常心が一気に消え、顔を青褪めて、泣きそうな表情を浮かべる。

「こ、米斗くん！」

「こいつの命が惜しけりゃ、じっとしてるんだな」

男の指が鳴る。抵抗できない千具良は、大きな拳に顔面を殴られ、大きく吹き飛ばされた。

「安心しな、殺しはしないさ。二度と人目に出れない姿には、なっちまうかもしれないがな」

男は千具良に馬乗りになり、更に顔や体を殴り始めた。米斗は猿轡を外そうともがくが、強く締め付けられていて外れない。

こんなところで、千具良の足手まといになっている場合ではない。米斗が人質になっている状況を変えなければ、千具良は反撃もできない。

口を縛っていた手ぬぐいが外れた。チャンスとばかりに米斗は叫ぶ。

「やめろ！ 早く千具良を放せ、人を呼ぶぞ！」

「馬鹿か。ここに来るまでに、誰一人としてすれ違いもしなかったじゃねえか。警察もみんな、地震の被害を調べるために手一杯なのさ。そうだ、せっかく手も足も出せないんだ、うんと恥ずかしいことをしてやろう」

男は笑いながら、千具良の制服を脱がし始めた。上着を剥ぎ捨て、首のリボンを解いて、米斗のほうに投げ捨てる。そしてブラウスのボタンを、上から順番にゆっくりはずし始めた。

「やめろよ、やめろって言ってるだろ！ 逃げろ、千具良！」

米斗は必死で叫ぶ。千具良は逃げる気力もないのか、全く体を動かさないでいる。

「はっはっは、愉快だねえ、ガキをからかうのは」

ボタンを全て外しとり、中から千具良の白い綺麗な肌と、ピンクの下着が露になる。

「このやろう、ふざけやがって！」

米斗は体を起こした。サムライが頭を押さえつけてくるが、気合で弾き飛ばした。

「千具良に触るな——!!」

米斗は、生まれて初めてではないかと思えるくらい、大声で叫んだ。

辺りに怒声がこだますと共に、カッと目の前が一瞬、眩しいほどに明るくなり、男たちは思わず目を閉じる。

直後、空気が揺れた。

ドオオオン！

耳が痛くなるほどの轟音、激しい突風と地震よりも激しい地面の振動が、辺りを覆いつくす。

米斗は烈風によって後ろへ飛ばされた。公園の入り口辺りまで転がって、やっと止まる。意識はあった。ゆっくりと上半身を起こし、辺りを見渡す。

そして息を呑んだ。

公園の遊具は見る影もなく消え去り、公園の中央には巨大な穴が開いていた。少し離れた場所にあったブランコやシーソーも、かろうじて形が分かるくらいには残っていたが、溶けて変形し、崩れて使い物にならなくなっている。

周囲一帯は砂埃が雪みたいに舞い散り、視界が白く濁っていた。強烈な風で巻き上げられた砂が、ゆっくりと地面へ沈殿していこうとしていた。

飛ばされた反動で緩んだ猿轡を外し、自由になった米斗は立ち上がった。視界が高くなり、見辛かった周辺の景色も、少しマシに見えるようになった。

まるで大型地雷でも踏みつけた跡のような大穴の中央には、サッカーボールくらいの大きさの岩が、半分めり込んでいた。穴の側には、長身の男とサムライが、それぞれ離れた場所で、砂まみれになって気を失っていた。

まさに地獄の風景。啞然とする中、米斗はあることに気付いて辺りを見渡した。

千具良の姿がない。

「……千具良？ 千具良！」

呼んでみても、返事はない。少し焦って、米斗は公園の周辺をくまなく探した。

公園を囲むように設置された、砂を被って真っ白になってしまった、本来なら赤や黄色といった色とりどりの花が咲き乱れている花壇。その一角に、千具良は倒れていた。

はだけた白い肩は砂にまみれ、制服も土に擦れて、真っ黒になっている。無残に横たわる千具良に、米斗は駆け寄った。

「千具良、しっかりしろ！」

軽く肩を揺らしてみる。かすかだが、うめき声が聞こえた。千具良はまだ生きている。

米斗は千具良の外されたブラウスのボタンを綺麗に留めなおし、その上から自分の制服の上着をかけた。

「う……私……。こ、米斗くん！」

目を覚まし、千具良はゆっくりと体を起こす。その体は、まだダメージが大きいらしく、動きも、どこか気だるそうに感じた。虚ろな目の焦点が米斗に合った瞬間、少し前の恐怖を思い出したのか、悲痛な表情を浮かべた。

「怪我はない？ 大丈夫？ ごめんなさい、私が余計なことをしたばかりに……」

自分のほうが重症であるのに、米斗の首筋を見て、千具良は泣き出す。猿轡を無理矢理外そうとした手首は、摩擦で擦れて血が滲んでいたが、砂が覆い隠して止血していた。雑菌が入る可能性があるので、早く清潔に治療をしなければならない。

だが米斗にとって、それは特に大事ではなかった。

「大丈夫だ。俺よりも千具良のほうが、酷い貝我だろう」

千具良の頭に手を置き、米斗は宥める。

「私は平気。……な、何なの、これ」

顔を上げた千具良は、今初めて周囲の状況を把握した。見渡す限りの惨状を目の当たりにし、かなり動揺しはじめる。

ズズズズズ……。

地面が徐々に揺れ始めた。それは止まることなくだんだん激しさを増し、今迄で一番、驚異的な揺れへと変貌していった。

「……千具良？」

「ど、どうしよう、止まらない、止まらないよ……」

千具良の体が、怖いほど震えている。治まる気配はなく、千具良は歯をガチガチ鳴らしながら、自分の体を抱きしめて、必死で震えを抑えようとしていた。

震えれば震えるほど激しくなる地面の振動。米斗は本能的に、野生の本能みたいなもので身の危険を感じ取った。

この揺れは、今までとは規模が違う。千具良が心に受けた強烈なショックが、とんでもない大惨事を引き起こそうとしている。

何とかしなければ。米斗は必死で、千具良を宥めた。

「千具良、落ち着け、大丈夫だ」

「こ、米斗くん、ダメ、止まらないの、どンドン心臓の音が大きくなる。頭の中まで、打ち付けてくる……」

動くこともままならない、大きな振動が地面を襲う。米斗にはどうすることもできず、押さえつけるように千具良を抱きしめた。しかし、震えは治まらない。

「ちくしょう、どうにかならないのか!？」

声を荒立てる米斗だったが、心の中は相変わらず冷静さを欠いてはおらず、静かな鼓動の中で、的確な結論が導き出されていた。

もう、間に合わない。

今までで最大級の揺れが、大地を駆け巡った。

## 25. 米斗の真実

---

「「隕石誘引体質？」」

戸呂音と吉香は、たこ焼きを貪りながら、声を揃えて素っ頓狂な声を出していた。北斗の話  
を黙って聞いていたものの、そのSFじみたありえない話に訝しげな表情を見せている。

なにやら深刻な話をしているなと気になって耳を傾けていた、たこ焼き屋の店主も、話が山場  
に来るにしたがって、作り話かと、つまらなさそうに会話から離脱した。

それくらい、現実味のない夢物語だった。

「まあ、信じられないなら、それでもいいと思う。その方が世の中平和だし、見せてやるなんて  
、恐ろしくて言えないしな」

あくまで、北斗は真剣だ。それだけ、米斗の非常識な性質に長年怯えてきた証拠でもある。

だが腑に落ちない吉香は、気に入らなさそうに北斗に食って掛かる。

「でも先生、それはいくらなんでも信憑性に欠けるわ。ちゃんと幾度かの実験とか、観察を重ね  
て出した結果じゃないもの。先生の気のせいって確率のほうが高いわよ」

「そりゃそうかもしれないが、そんな危険な真似ができるわけないだろう。ただ、確かに俺の餓  
鬼の頃の記憶じゃ、あいつが激しく泣いたり驚いたりすると、空から隕石が降ってきたんだよ」

「あいつが泣いたり驚いたりする姿なんて、想像できないわね」

「そりゃあ、まだあいつも赤ん坊だった頃だしな。隕石の規模だって、さほど大きいものじゃ  
なかった。大気圏でたいてい燃え尽きるし、落ちてきてもゴルフボールくらいだった。だがも  
し今、あいつに強い衝撃を与えたりしたら、どんな大きさのものが降ってくるか想像もつかん。  
だから俺は俺なりに、あいつが物事に感心を持たないように、常に何事にも動じない人間になれ  
るように訓練してきたつもりだ」

「ということは、米斗さんの平常心を鍛えたのは、まだ小学生だったあなただと？」

「そういうことになるな」

「それは素晴らしいですわ。ぜひ詳しくお話を伺いたいものです」

戸呂音は、感動して目を光らせる。だが、当時の北斗が計画性を持って米斗の平常心作りに取り  
組んでいたわけがない。隕石の落下の恐怖を脳裏に焼き付けたからこそ、思いついたものから  
順に死に物狂いで決行してきたにすぎない。

「けど、もし本当に、その隕石の原因が他にあったとしたら、先生は彼の今までの人生を全て、  
奪ってしまったことになるのよ？」

「それはまあ、そうなるが……」

吉香が最も痛いところを突いてきた。それについては、北斗もずっと考えて、悩んできた。し  
かし米斗から目を離す度胸もなく、真相を確かめる勇気もなく、長々と今まで引っ張ってきた大  
きな課題だ。

答なんて、いくら考えても出ない。結局のところ、何も解決できずにいる北斗は、情けなく項  
垂れた。

「お止しなさい、吉香さん。わたくしとて、人のことを言えた義理ではございません。もし一連

の地震と千具良さんとの間に関連性がなかったとすれば、わたくしたちは彼女の人生を台無しにしてきたかもしれないのです。まして、幼かった北斗さんに、そこまでの確に状況の判断ができたとも思えません。どうでしょう、よろしかったら、わたくしが米斗さんの身体状況を調べてみましょうか？ 千具良さんと同じデータの取り方でよいかは分かりませんが、今からでも遅くはないと思います」

戸呂音が楽しそうに提案した。どちらかという、米斗や世界の身を案じていると言うより、科学者特有の探求意欲の方が勝っているような、そんな笑顔を見せている。北斗は表情を引きつらせた。

「遠慮しておく。と言うより、それは勘弁してくれ。妙な刺激は与えない方がいいだろう。米斗には悪いが、今まで通りの状態が一番バランスがいいと思っているんだ。だから、有栖と距離を置いて、いつも通りの生活ができるようになれば、それでいいと俺は考えて……。ん、何だ？ 外の様子が騒がしいな」

話の軌道が無害な方向へ逸らすには丁度いいきっかけだと、北斗は会話を中断して暖簾をめくってみた。

商店街の出入り口を行き交う帰宅途中の人たちが、揃いも揃って空を見上げて騒いでいる。何人かの人、ある一点を指差して、ひどく慌てていた。その指の先を見上げ、北斗は固まった。

薄暗くなった空から、ぼんやりと明るい光の塊が尾を引いて降ってくるのが見える。それはだんだん接近し、何だか彩玄町へ向かって落ちていくように感じられた。

「あれって、ひょっとして、さっき言っていたような……？」

「噂をすれば何とやら、でしょうか？」

北斗が持ち上げた暖簾の隙間から空を見上げ、あまり現実味のなさそうな様子で吉香と戸呂音が呟いた。

「うっそー!! あ、あ、あ……。俺か？ 俺のせいなのか？」

目玉が飛び出しそうなくらい、北斗は驚く。自分があんな話をしたから、と言わんばかりにタイミングよく降って来たそれに、顎が外れそうなくらい口をあけて驚愕に震えた。

隕石。彗星。メテオ。

そんな単語が残像を残し、頭の中を駆け巡る。

カッと辺りが昼間のように眩しくなり、光の塊は商店街の外れに落下した。激しい、地震とはまた種類の違う揺れが辺りを襲い、道行く人々や、三人のいた屋台も横転した。直後に強い、砂混じりの突風が建物の隙間から流れてきて、皆が皆、しゃがみこんで頭や顔を覆う。戸呂音を守り、吉香が風への盾となった。それを更に庇って、北斗が二人を抱きこんだ。

「怪我はないか？」

「え、ええ。お陰様で、大丈夫です」

風が治まり、素早く起き上がった北斗は二人の無事を確認すると共に、まだ砂の舞い散る商店街を駆け出した。謎の災害から、遠くへ逃げようとする人々の流れを逆走して。

向かう先は、光の塊の落下地点。

「お待ち下さい、北斗さん！ 危険です！」

呼び止める戸呂音の声を無視し、ひたすら走る。

嫌な予感、時を刻む振り子のように止まらない。坦々と募る不安を抑えながら、砂埃に紛れて北斗は商店街を駆け抜けた。

☆彡 ☆彡 ☆彡

「師範代、私たちも避難しましょう！」

戸呂音を起き上がらせ、吉香は人々が逃げていく先へ誘導しようとする。

その足が、止まった。

ズズズズズ……。

立て続いてやってきた、地面の振動。人々にとっては日常的のように慣れてしまっていた、あの揺れがやって来た。静かに、ひたすら静かに横揺れが展開する。まるで嵐の前の静けさ、大津波の前の引き潮のような、嫌な感覚が足元からじわじわと襲ってきた。

「これは、まさか……」

戸呂音の白いこめかみを、汗が伝う。

直後、それは来た。

ズドドドン！

強烈な縦揺れに、逃げ惑う人々は足を取られる。立ち止まっていた戸呂音と吉香は素早く地面に手を付き、転倒を免れた。しかし、いっこうに止む気配のない大規模な地震。軋む地盤にうっすら亀裂が入りかける様子が、見て取れる。

「まずいです、こんな大きな揺れが続くと、わたくしの作った地中ネットワークがもちません……」

大きいだけでなく、強烈で、しかも自然の法則をことごとく無視した不定率な震動。

「こんな地震が起こせるのは……」

彼女しかない。戸呂音は歯を食いしばり、躊躇していたある決意を固める。

「吉香さん、今すぐ北斗さんを追いかけて下さい、もし先ほどの落下物の原因が、彼の言葉通りに米斗さんなのだとしたら、千具良さんもきっと一緒にいるはず。例の計画を実行します、急いで二人の確保を！」

「こんな時にですか!? しかしそれでは師範代が一人に……」

吉香は、突然の発言に動揺する。だが、戸呂音の表情は真剣そのものだ。

「こんな時だからです。わたくしのことは気にせず、早くお行きなさい」

吉香は頷き、揺れる大地を蹴って、瞬間移動したのかと錯覚させるような速さでその場から姿を消した。

「わたくしも、急がなくては……」

戸呂音はゆっくりバランスをとりながら立ち上がり、目を閉じた。心を無にして、神経を足に集中させる。

袴田流、心頭滅却術。

全てのものに動じることなく、流れに身を任せて最大限の身体能力を発揮する。着物姿で下駄を履いているとは思えない速さで、戸呂音は自宅へ向かって疾走していった。

## 26. トンズラ

---

「落ち着け、落ち着け、落ち着け……」

米斗は必死で千具良の背中をさすっていた。酷くなる揺れ、止まらない千具良の鼓動。それを止めるには、とにかく彼女の心拍数を安定させればよいのではと考えた結果だ。

そんな程度の方法しか思いつかなかったが、幸運なことに、米斗の肩に顔を埋めた千具良の体の震えが、徐々に治まってきた。

その証拠に地面の揺れも緩急していき、数十秒で完全に収まった。

五感を研ぎ澄まして鎮静を確認し、米斗は安堵の息を吐く。体の力が、がっくりと抜けた。とりあえずだが、地球崩壊の危機は逸脱できたのではないだろうか。

米斗にもたれかかり、千具良はぐったりと倒れ、動かなくなった。

気を失っている。極限まで張り詰められた緊張の糸が切れたのだろう。千具良の背中を、再び軽くさすった。

「米斗、いるのか!？」

背後からの、名前を呼ぶ声が響く。聞き覚えのある声に、米斗は振り返った。

「兄貴、ここだ!」

公園に入ってきた兄――北斗は、目の前に広がる光景に、一瞬足を止める。だが目線の先に弟の姿が入るや否や、一目散に側へと駆け寄ってきた。

「米斗! 有栖も一緒か、お前たち、怪我は?」

「俺は大丈夫だ。千具良が気を失ってる。体中、怪我をしているんだ、病院へ連れて行かないと」

米斗は千具良を背負い、立ち上がった。

「しかし、この騒ぎだ、町中がパニックを起こしている。病院も立て込んでるだろうな……うおっ!？」

どうするかと考えていた北斗が、突然吹き飛ばされた。北斗は側の桜の木に額をぶつけて、気を失った。

「あ、兄貴?」

「あらー、やっちゃった。急いで突っ走ってきたから、つい勢い余って……」

北斗のいた場所には、替わって吉香が立っていた。しまった、と頭を搔いている。急いで走ってきたわりには息は乱れていない。それが人型ロボットの凄さなのだろうか、米斗は密かに思った。

「それより、あんたたち、早く袴田道場へ。ここにももうすぐ警察や消防車や野次馬たちが押し寄せてくるわ。騒ぎに巻き込まれないうちに、トンズラしちゃいましょう」

吉香は素早く気絶した北斗を担ぎ上げた。女子高生が大の男をいとも楽々と。何も知らない人間が見たら、どんな想像を巡らせるだろう。

「グズグズしてないで、行くわよ!」

吉香に先導され、千具良を背負った米斗は公園を後にした。

遠くでパトカーのサイレン音が鳴り響き、近付いてくる。間一髪、上手い具合に逃げ出せたようだ。そう思うと、なんだか犯罪者にでもなった気分になる。公園でのびていた銀行強盗たちも、おそらく死んではいない。すぐに捕まるだろうが、あの惨状の原因を説明することは、きっとできないだろう。

袴田道場の門をくぐり、裏庭へ直行する。初めてきたときは地下の無駄に長い通路を通ったが、地上を通れば目と鼻の先。あの戸呂音の隠し部屋である庵の軒先までやって来た。

「師範代理、ただいま戻りました」

吉香が声をかけると、庵の裏から戸呂音が姿を現し、駆け寄ってくる。

「ご苦労様です。あら、北斗さん、どうなさったのですか？」

「すみません、誤って轢いてしまいました」

「まあ大変。早く庵の中へ運んで、寝かせてあげて下さい。千具良さんも気絶していらっしゃるのですか。では手当をして、意識が戻るまで待ちましょう」

庵の中に布団を並べて敷き、北斗と千具良を寝かせた。米斗も手首の傷を清潔にし、応急処置をしてもらった。

「米斗さん、あなたに先にお話をしておきましょう。これは大事なことです。吉香さん、お二人の介抱をお願いします」

吉香は頷いた。米斗は戸呂音に先導され、庵の裏にある隠し階段を下りていった。

## 27. これが結果

---

その奥は大きな地下空間になっていて、何だか良く分からない機械が敷き詰められていた。ところどころ赤や青い光が点滅し、ジジジと音を立てて作動している。

「本当は、これだけは使いたくなかったのですが、もう後戻りはできません」

部屋の奥に、大きな筒状の塊があった。上部が円錐になって尖っていて、まるで大きな鉛筆みたいだ。中は空洞で、人が一人くらい横たわれそうな大きな透明のケースが置いてある。その周囲にも、多数のコードとボタンが取り付けられている。丸い窓が付いているそれは、漫画などでくる宇宙船のような印象を受けた。

「これは、わたくしが最速で造り上げた冷凍睡眠装置付きの宇宙船です。これに入った人間は、地球上で設定した年月が経過するまで仮死状態で宇宙空間を漂い、眠り続けることが可能です。老化が極限まで抑えられるので、ほとんど歳はとりません」

「へえ。それで、誰が入るんだ？」

「当初は、もしもの非常時に千具良さんに入っていただくつもりでした。彼女が眠っている間に、地震を起こす体質を直す方法を探し出すために。しかし少し予定を変更します。この装置をもう一つ作りますので、あなたと千具良さん、お二方にしばらく眠っていただきたいのです」

「……なぜ俺まで？」

米斗は首を傾げる。なぜこんなものに入らなければならないのか、全く分からなかった。永い眠りについた千具良がこの先、ずっと未来で目覚めたとき、誰もいなかったら、米斗がいなかったら寂しがるからだろうか。そういう理由なら、快く承諾するつもりだった。

しかし、事実は小説より奇成り。思いもよらない唐突で意外な真相が、答として返ってきた。「わたくしたちは、必要以上に大きな過ちを犯してしまったのです。それを精算するには、もはやこの方法しか思いつかない」

戸呂音はまっすぐ、米斗を見つめた。

「あなたが持つ平常心を、少しでも信用します。決して、何を言われても動じないで聞いて下さい」

☆彡 ☆彡 ☆彡

戸呂音は話した。今日、北斗に聞いたこと、そして実際に、目の前で起こったこと、見たこと。彼女の理解した全ての物事を、米斗に伝え聞かせた。

「……………」

米斗は無言だった。信じられない話を聞いて、しばし啞然としていた様子だったが、千具良の特異体質の脅威を目の当たりにした直後だ、疑っている感じではなかった。

「これが、わたくしの話せる全てです。それ以上お知りになりたいのならば、北斗さんに直接伺うのが良いでしょう。もっとも、ちゃんと答えてくれるかまでは、保障できませんが」

「兄貴は、全部知っているのか？」

「そのようですね。わたくし達とて、北斗さんに話を聞くまで、そんな疑いは一度も持たなかった。それぐらい、予想だにできない事実だったのです」

米斗は無表情に、黙り込んだ。

「流石ですね。突然、自分に秘められた危険な力の正体を知ったと言うのに、顔色一つ変えないなんて……」

全く動じた様子のない米斗を見て、戸呂音は微笑ましく感嘆の息を漏らす。

ひゅるるる、ドガン。

地下室の天井に、穴が開いた。つまり、地面に穴が開いた。厚い地面の壁を突き抜けて、ここまで降ってきたらしい。

部屋の床には、パチンコ玉くらいの大きさの石が、めり込んで煙を上げていた。

「……へー、そう。ちょっと、吃驚したな」

動揺している!?

米斗は、無表情ながらも、額にうっすら浮かぶ汗を拭っていた。戸呂音の微笑が、引き攣って凍った。

ちょっと吃驚しただけで、この大きさ。公園にめりこんだ巨大な隕石が落下したときの彼の動揺の大きさは、計り知れない。

この少年に、無闇に衝撃を与えてはいけない。北斗の心配性が過剰ではなかったのだと、初めて納得できた。

落ちてきた小さな隕石を見下ろし、米斗は何かを考えていた。

決意を固め、戸呂音に視線を向ける。

「どうやら、さっきの話は本当らしいな。分かった。俺は、その冷凍何とかに入る」

彼の意思を聞いて、戸呂音は胸をなでおろした。力づくで、となると、安全にことを成すのは非常に困難だろうと踏んでいたから、助かった。

「それを聞いて、安心いたしました」

「ただし、二つ条件が」

米斗が立てた人差し指と中指を見つめ、戸呂音は黙って、彼の最後の願いを聞き届けた。

☆彡 ☆彡 ☆彡

薄暗い部屋で、北斗は目を覚ました。

二畳ほどの狭い和室。そこに敷かれた布団に入って、眠っていたのだと気付く。

ゆっくりと上体を起こす。背中に何やら痛みが走ったが、何が起こったのか良く覚えていない。隣に敷かれた布団の中で、千具良が眠っているのが目に入った。

その枕元で胡坐を掻き、うな垂れる黒い影が。

「……米斗か」

「……ああ、おはよう、兄貴」

影は振り返った。米斗の表情はいつもと変わらず無表情。何を考えているのか分からないくら

い落ち着いている。しかし、北斗はいつもとは違う微妙な表情の変化に気付いていた。

「そんな面してるところを見ると、何もかも知っちゃったんだな」

「そんな面してるか？」

「してるさ。何年、お前の顔を見て暮らしてきたと思ってるんだ」

北斗は側の障子を開けた。うっすらと明るい外の景色。朝日が昇る直前の風景が、目に飛び込んでくる。それを眺める北斗を、米斗は何とも言えない微妙な顔で見てきた。

「……もっと、怒るかと思ってた」

「何で？」

「だって、兄貴は、俺が普段と違うことを始めたり考えたりするたびに、すごく神経質そうに怒ってたから。たぶん、俺が知ってしまったことは、兄貴が一番知って欲しくなかったことだと思うし。兄貴がいつもいつも俺のことを心配してるのは、無関心で人の気持ちも分からない俺が誰かに迷惑をかけるかもしれないと考えていたからだと思ってたけど、こういう事情だったんだな」

米斗は背を丸めて土下座、畳に額をぶつけさせた。

「ごめん。何も知らなかった」

「馬鹿か、お前は」

米斗の後頭部に、北斗は拳を落とす。顔を上げた米斗の額には、畳の痕がくっきり残っていた。

「ふざけたことばかり言っていると、殴るぞ」

「もう殴られた後だよ」

額をさする弟を横目に、北斗は鼻で微かに笑って見せた。自嘲の笑いだ。

「お前、図書室で十七年前の新聞漁ってたって言ったな」

「うん」

「そして、当時起こった巨大地震の原因と仮説として、隕石群落下の記事を見つけた」

「……………」

さりげなくだが、北斗が誰も知りえない事実を語ろうとしているのだと、悟ったらしい。米斗は耳をすませ、北斗の紡ぐ言葉一つ一つを、しっかり頭に焼き付けるように聞き入っていた。

「今となっては、その原因が自分だって、分かってるよな？ ……別に、今言うべきことじゃないんだろうけど、今を逃すとずっと言えないまま終わっちまいそうな気がするから言うぞ。いいな？」

米斗の首肯。北斗は一瞬の間を置き、大きく深呼吸をしてから続けた。

「あの時、まだ餓鬼だった俺と、生まれて数ヶ月のお前を抱いた母さんと、三人で裏山の麓の小道を散歩していた。星が綺麗で、真夏なのに結構涼しくて、まだ自然も残っていたから、虫なんかも僅かに飛んでいたのを覚えている。その日は夏祭りで、町の中央会館の庭で花火大会があったんだ。でもどうせ人ばかりでろくに見れないだろうって、少し遠いけど、見晴らしのいい山から見ようと母さんが提案したんで、従って行った。でっかい花火でな、打ち上げ場所からかなり離れたあの場所からでも物凄く綺麗な花に見えたし、音も豪快に響いてきた。それに驚いたんだ

ろうな。お前はビビって泣き出したんだ。

——その直後だよ。細かいけど、大量の隕石群が俺たちの周辺に降ってきたのは。中には大きな石もあったみたいで、それらは山の斜面にぶつかって軽い地揺れを起こした」

米斗は固まっていた。その表情に浮かび上がる、「まさか」と言わんばかりの感情が、北斗にも伝わった。

残念だが、その期待を裏切ってやることはできないよ。そう表情で伝え返し、北斗は更なる真相を語った。

「そのうちの 하나가、母さんの頭に直撃したんだ。そうだな、やっぱりゴルフボールくらいだったかな、あの大きさは。血を流して倒れた母さんの姿に俺は慌てた。家に飛んで戻って、寝ていた親父を叩き起こして連れて行った。戻ったときには、お前が泣いてるだけで、母さんからは何の生命反応も確認できなかった。親父に問い質され、一部始終を全部話した。周囲の惨状をみれば、納得できなくても、せざるを得なかったんだろうな。親父は母さんが死んだのは山に登ろうとして足を滑らせ転倒したからだ、とすることにして、その夜のことは記憶の奥底に硬く閉ざし、口に出すことを禁じた。新聞に母さんの記事が載っていないのは、そのためだ。分かるな？ 母さんが隕石に撃たれて死んだとなると、大事になりかねない。そしてマスコミやら科学者やらはなぜ隕石がそこに降ったのかだとか、その時に起こったことなどを綿密に調査し始める。確率は低いけど、お前に好奇心の矛先が向けられる可能性もゼロじゃなかった。だから、親父はこの事を口外不問にしたんだと思う」

一息入れて、北斗は己の気持ちを語り始めた。

「俺も、その時の出来事は誰にも言わなかったし、必死で忘れてしまおうとした。でも母さんの命日が来るたびに、どうしても思い出してしまう。その後、何をどう考えたのかは忘れたけど、お前が泣き喚いたりびっくりすると隕石が降るのだと思って、それなら驚くようなことが起こっても、動じない人間にしまえば良いと考えた。まあ、それを実行して今に至るわけだな。結果は、今のお前が一番良く分かっていると思うが……」

ズガン。

北斗の台詞を打ち消し、布団の側の畳に穴が開いた。無残にも破られた井草は焦げてくすぶり、穴の中からは、微かに煙が立っている。その惨状を目の当たりにした北斗の表情は恐怖と驚愕に固まり、そのままの顔で首を持ち上げて正面を見た。その動きと言ったら油切れのブリキ人形に引けをとらないくらい錆付いている。

視界に入った米斗の顔を見るや否や、北斗は汗を垂れ流した。かれこれ十六年、一度も見たことのない、泣きそうな表情を浮かべる米斗に動揺し、必死で弁明した。

「べっ、別に、お前が負い目を感じる必要はないさ。俺が勝手にやったことなんだ、謝らなくちゃいけないのは、俺のほうだ。俺は臆病な人間だからな。あんな怖い思いは、二度としたくなかった。誰にも、させちゃならんと思った。それだけなんだ」

「でも、兄貴が怖い思いをして、臆病になってしまったのは、やっぱり俺のせいだ」

震える小さな声。それが兄としての自覚を取り戻させてくれたのかもしれない。北斗はもう何事にも怯えてはいなかった。しっかりと前を見て、落ち着いた心情で判断を下せるまでに、恐怖

は取り除かれた。

「もう、済んだことだ。俺はできる限りの努力はやったつもりだ。その結果が、今こうやって、形になっている。それがいい結果だったか悪い結果だったかは、俺には判断できないが、やり遂げて満足はしている。後は、お前の好きなように生きろ。……悪かったな。お前の人生、滅茶苦茶にしちまって」

北斗は立ち上がり、縁側から外へ出た。足元に北斗の革靴が落ちてくる。上を見上げると、黒子らしき人間が慌てて天井板を閉める姿が一瞬目撃できた。変な屋敷だ。

「兄貴」

米斗が呼び止めてくる。北斗は振り返ることなく、手を振って部屋を後にした。

## 28. 最後の決断

---

米斗はこの時、初めて思った。

兄貴の背中、とても大きい。

と言っても面積じゃなくて、その器というか、存在そのものが。

いつも心配しながら自分の後を追いかけてきていただけの兄。その姿を振り返る時はあっても、堂々と背中を見る機会なんて、一度もなかった。どちらかと言うと自分が見られる側だと思っていたから、大して気にも留めていなかった。

特に何も感じない無関心な生活をする中でも、心と辺りを見れば北斗がいた。無意識ながら、とても安心していただけののだと、改めて感じた。急に周りが物寂しくなった気がして、なんともいえない閑散感が辺りに漂っている。

「兄貴の人生を滅茶苦茶にしたのは、俺じゃないか」

夜中によく、父親と北斗が言い合っている時があった。親としては、もう二十代後半にさしかかった息子を心配して、早く結婚しろとか、まともな人生を送れと伝えたかったのだろうけど、北斗のそれに対する返事には、どこか引っ掛かりがあって、進もうにも前へ進めない、と言ったぎこちなさがあったように思える。それは今思えば、米斗の存在が足枷になっていたのだろう。

何も気付かなかったことを、酷く反省する。

しかし、今の北斗の言葉で、邪魔だった足枷は一気に断ち切れた感じがした。きっと北斗は、自分なりにけじめをつけるられたのだろう。米斗が真実を知ったことで北斗が解放されたのなら、これほどに喜ばしい話はない。

ふと、畳に張り付けていた手に、暖かいものが覆い被さった。

白い、小さな、細くて暖かい手。千具良の掌が、米斗の手の甲を包んでいた。

と言っても千具良はまだ寝息を立てている。泥だらけになっていた制服は吉香によって着替えさせられ、白い浴衣を着ていた。掛け布団を蹴り飛ばし、寝返りを打ち、身体は九十度旋回して、頭が米斗の背中のすぐ後ろにきている。意外と寝相が悪いのだなと思った。

向き直って千具良の手を握り返した。寝顔はとても気持ち良さそうで、普段の悩みや苦痛なんて微塵も感じさせなかった。

せめて夢を見ている間だけでも、楽しい気分になれば。一時の幸せくらい夢見たって、誰も文句は言わないだろう。

「むにゃ。身体を鍛えるにはしょうが汁でアメンボが泳いで電子レンジにアイスクリームを……」

寝言だろうか。支離滅裂なところがなんとも千具良らしい。いったい、どんな夢を見ているのやら。

「クジラが空を飛んだらとりあえずツルを食べてバナナを地面に植えるとアナコンダがニョキニョキと……」

「ほう……なるほど」

何なるほどなのか分からないが、妙な説明寝言を納得しながら冷静に聞いていた。

そのテンポある淡々とした口調が、説得力を持たせるのに一役買っているみたいだ。

「――強くなるから。誰よりも強くなって、平常心を鍛えて、誰にも迷惑かけないようにするから……一人にしないで」

「……………」

寝言の内容が、突然反転した。確信に一番近そうな、はっきりした台詞。千具良の本音なのか。顰められた眉がピクリと動く。楽しい夢が、急に悪夢に変わってしまったのかもしれない。

「千具良……」

一人じゃないさ。みんないるから。迷惑かけたって、強くなくたって、みんな側にいてくれる。そんなに不安がることはない、心配しなくていいんだ。

だって、みんな千具良を守ろうと必死だ。戸呂音だって吉香だって、千具良を助けようと頑張っている。

だから、俺も頑張ろうと思う。千具良が幸せに暮らせるように。

心の中で語りかけ、千具良の額をそっと撫でた。

「うりゃあ、袴田流・骨砕正拳突き！」

空いていた千具良の手が、米斗の顔面にめり込む。

「げふうっ」

見事なストレートパンチが決まり、米斗は仰向けに倒れた。顔を抑え、痛みを堪えながらも、冷静に心に誓った。

寝ている千具良には、決して近付いてはならない、と。

☆彡 ☆彡 ☆彡

日の出を拝みながら、北斗はタバコに火を付けた。普段は米斗が興味を持たないようにと隠れて吸っていたが、意外と徒労であったことは前々から気付いていたので、ここ最近是人目を気にせず堂々と吸っている。身体に悪いから止める、と言う考えは持っていない。

吐き出した煙が空に溶ける。朝ぼらけが、こんなにも綺麗に見えるなんて、初めてかもしれない。きっと、この場所の地理条件が良いからなのだろう。緑が多くて、空気が澄んでいる。密集住宅街よりも肌寒さを感じるが、今の時期は、それくらいが丁度いい。

新鮮な空気の中、薄明るい世界に一人で立ち尽くし、北斗は徒然と考えていた。

さて、これから何をしよう。

米斗の喜怒哀楽がいまいち欠如しているのと同じように、北斗には自分自身のための行動力、というものが欠落している。ずっと米斗から目を離さぬよう、米斗を生活の中心に置いてきた後遺症だ。どちらにしても原因は明らかに北斗なのだが、今更、己を責めたところで、何も変わらない。

「あいつだって、一步踏み出したんだ。俺も負けてらんねえな」

真面目に仕事に没頭して、頭を真っ白にしてみるのもいい。それとも転職、引っ越しでもして

、新しい町で気楽に過ごすか。

親父が言っていたな。早く嫁さんもらえて。もうこんな歳になってしまってから言うのもなんだが、恋を試してみるのもいいかもしれない。相手がいれば、の話だが。

「あら、北斗さん。お目覚めになりましたか？」

後ろから落ち着いた澄んだ高い声。振り返れば予想通り、この裏庭の主である戸呂音が立っていた。

「吉香さんが誤って轢いてしまったそうで。その節は申し訳ありませんでした」

「あ、いや……」

戸呂音がゆっくり丁寧に頭を下げる。その優雅で滑らかな身体の動きが、何だか清楚で上品で、彼女に対して染み込んでいた先入観が根底から覆えりそうだった。

よく考えてみれば、数年ぶりに再開してから、特に彼女によって身の危険に晒される出来事は起こっていない。あの異常体質者二人のインパクトにかき消されてしまっているだけかもしれないが。

そう、何もしなければ、ただこうやって笑って目の前に立っていれば、器量の良い美しい女性だ。時の流れは、きっと彼女を完全とは言わなくても、人並みにまで更正させたに違いない。北斗は今初めて、戸呂音を一人の女として意識していた。

「どうかなさいました？ お顔が赤いですわ」

戸呂音が首を傾げる仕草をすると、側面の白い首筋が黒い髪の間隙から覗く。何だか気恥ずかしく、北斗は目を逸らす。火照った顔に涼しい朝の風が当たるが、その熱は、いっこうに冷める気配がない。

戸呂音の身体が、そっと自分の背中に触れてきたからだ。

「……あなたと一緒にいると、学生時代を思い出します。お互い、歳をとりましたわね」

背中から聞こえてくる戸呂音の声。とろみを帯びた愛おしいその音域は、甘える猫の鳴き声にも似ていたし、夏にさざめく風鈴みたいな静観と愁哀に満ちているようにも聞こえた。

「わたくし、最近暇を持て余しておりますの。もうこんな歳ですし、これから先もこの調子かと思うと、とても不安で不安で……。北斗さん、わたくしの部屋へいらっしゃいませんか？ 寝床も、一つ用意してあります。よろしかったら……」

何と積極的な。舐めやかな美声が耳を貫き、北斗の心臓は口から出そうなくらい高鳴っていた。自分が米斗じゃなくてよかった。こんなに動揺しまくっていたら、巨大隕石落下で地球が滅んでいただろう。

「わたくしを、満足させていただけますか……？」

来た、とどめの一発。ここで断れば男が廃る。というより一世一代のチャンスを取り逃がしてしまうやもしれん。さっき決めたばかりだろう、新しい一步を踏み出すと。頑張れ俺、負けるな俺！ 全国のお嬢さん養成学校の生徒が俺の味方だ。

「おっ、俺なんかでよければ……！」

意を決し、北斗は振り返って戸呂音の手を握った。包むように握り締めた彼女の手は白く細い。不意を付かれたように、戸呂音はきょとんと北斗を見上げていた。そして数秒後、にっこりと

微笑む。

対照的に、北斗の顔から血の気が引いた。目の前の、北斗がしっかり握っている戸呂音の手。その中から縦一直線に突き出ているのは、よく磨かれた朝日に光る銀色のメス。

「そんなお返事が聞けるなんて、思っても見ませんでしたわ。昔はあんなに嫌がられていたのに、時の流れが、あなたを更正させたのですね。さあ、参りましょう！ わたくしの実験室へ」  
変わってない、こいつは何にも変わっとらん！

悪魔と地獄の契約を果たしてしまった北斗は、全てを無に帰そうと、一目散に逃げ出した。しかし悪魔の手から逃れられる筈もなく。生气漲る嬉しそうな戸呂音によって首根っこを掴まれ、喉元にメスの切っ先を突きつけられ、成す術もなく常闇の牢獄へ引き摺られて行った。

☆彡 ☆彡 ☆彡

戸呂音専用の地下研究室。

大きく、かつ精密な機械が壁を覆い、蛇の群れを彷彿とさせるカラフルなコードが、どことうわけでもなく、地面を這う。電灯に紛れて明滅する赤や青の光。静かな空間を違和感なく駆け抜けるモーターの回転する音。

さほど広くはない。その空間の片隅で、世にも恐ろしい実験は着実に進行していた。

「さあ、北斗さん。覚悟の程はよろしいですかしら？」

「んー、んんんー!!」

手術用の硬いベッドに横たわり、涙目になりながら、北斗は必死の抵抗を繰り返す。しかし悲しいかな、北斗の身体は強固なベルトでベッドに固定され、口にはガムテープがぴっちり張り付けられている。その上に馬乗りになり、戸呂音はうっとりした半覚醒気味な眼差しでメスを握り締める。はっきり言って、北斗に逃げる術はない。

「さあ、どこから開きましょう。やっぱり基本は内臓かしら。それとも思い切って頭に行きましょうか。そうだわ、生物の先生である北斗さんの意見も聞こうかしら。ねえ、北斗さんはカエルの解剖をなさるときは、どこからパッキリいかれます？」

「んーんー、んー！」

人と両生類を一緒にするな。必死に訴えるが、この状態では無意味だった。それ以前に意思の疎通が成されていないので、仮に北斗がまともに口をきけたとしても、北斗の言葉は彼女に届かないだろう。

「しつれーしまーす。戸呂音さん、いる？」

来訪者などあろうはずもなさそうなこの場所に、幸運なことに誰かがやって来た。今しか助かるチャンスはないと、北斗は頭を上げた。

入り口に立っていたのは米斗だった。相変わらず、いつも通りの無表情で、じっとこちらを見ていた。

「……お邪魔しました」

目の前で繰り返される光景を目の当たりにして思うところがあったのか、米斗はそのまま後

ずさって部屋を出ようとした。

「んんん——！ ん——!!」

「何だよ兄貴。そんなに恥ずかしがらなくたって、誰にも言わないから」

北斗は慌てて呼び止める。米斗は足を止め、いつもながらに兄の翻訳不可能な謎の言語を普通に解読し、普通に会話をするように言葉を返してきた。だが、引き留めた意図が正しく伝わっていない。

「んん—ん—！」

「助けろって？ 何で」

「ん—ん—ん—んん—ん—！」

「でもさ、俺いま、それどころじゃないし」

「ん——！」

「……………」

奇妙にも成り立っている謎の会話に、戸呂音は困惑していた。

気が抜けたのか、北斗の上から降りて乱れた着物を直してくれた。北斗は、とりあえず一時的に寿命が延びたことに喜んで、涙を流した。

「まあ北斗さんの実験は後回しにしても良いとして、……米斗さん、ここへやって来たということは、決心が固まったと解釈してよろしいですか？」

真剣な眼差しに戻った戸呂音の問いに、米斗は大きく頷く。茅の外の北斗には、何の話だか分からない。

「北斗さん、解剖のことで頭がいっぱいになっていましたので、お伝えできていませんでしたが、米斗さんの許可を得て、この冷凍睡眠装置を使うことになりました」

戸呂音は、この経緯を北斗に説明してきた。

全て聞き終わり、北斗はぶんぶんと首を否定的に振り乱す。

そんなもの、ダメに決まっている！ 何を考えているんだお前は、そんなことをして何の解決になる？

必死で訴えた。それを全て聞き届けた米斗は、何の迷いもなく兄に言い放つ。

「兄貴、これは俺が自分で決めたことだ。ここに入っていれば、この先、俺の心臓が激しく動くことはない。そうすれば、少なくとも隕石が降ってきて地球が滅ぶ、って危険は、なくなるわけだ。運がよければ、この体質を直す方法が、いつか見つかるかもしれないし」

「ん—ん、ん—!!」

北斗は良しとしない。別に頭ごなしに否定しようと言うわけではなく、ちゃんと理由があつてのことだ。それを米斗にちゃんと説明して引き留めようと頑張るのだが、自分が頭から引っ張り出してくる言葉が、外に出ると「ん—ん—」と意味のない音声に変換されると、どうにも自分で言っていて気が抜けると言うか、結局何を言っているのか、本当に自分の思っていることを言えているのかも分からなくなる。

米斗は理解しているのだろうが、自分自身が理解できていないのは、やっぱりダメだろう。だんだん嫌気がさしてきたので、米斗に言って口のガムテープを外してもらうことにした。

米斗は、それはもう勢いよくガムテープを引っ張り剥がした。まだまだ健在の強力な粘着力が北斗の皮膚を思いっきり引っ張り、痛みが走る。更に目から涙がこぼれる。口の周りは、熱を帯びてジンジンしていた。

「いギャー！ こっ、米斗、もっと、そっと剥がせ、そっと！」

「何だよ、せっかく取ってやったのに」

米斗は不機嫌そうに、ガムテープを丸めて捨てる。痛みも引いてきたので、北斗は気を取り直して話を続ける。

「で、何を言っていたかな。そうだ、心臓を止めることで、世界崩壊を未然に防ごうってんなら、まさかお前だけじゃなく有栖も……？」

「その点からは、米斗さんから条件が出ました」

戸呂音が口を挟む。北斗が何を言っているのかやっと分かるようになったので、普通に話しに割り込めるようになったらしい。

「米斗さんは、自分がこの中に入る条件として、自分ひとりだけが入ること、そして彼女――千具良さんには、このことは黙っておくこと。ここ一連の出来事を全て、ですね。彼が隕石誘引体質であることも含めて。それを呑むことで、今回の乗船を了承していただきました」

「……一人で、全部背負うつもりか？」

北斗は弟のとんでもない決意に、胸が締め付けられた。米斗は一瞬、戸惑った表情を浮かべたが、頷いた。

「そんな考えで、彼女が満足するとは思えんぞ。もちろん、俺だって納得できない。だが、お前のことだから、そうするのが一番いいと思える理由や根拠があるんだろう？ ちゃんと、お前の考えを言ってみろ」

「……全部、なかったことにできないかと思ったんだ。もとは、俺と千具良が付き合い始めて、あいつの体質を知ってしまったから、余計に話がややこしくなったんだから。俺自身も、知らなきゃ良かったことまで知ってしまったし。だから、もう一度千具良の前から俺の存在が消えれば、何もかも元に戻るかもしれない。少なくとも、俺と一緒にいる時ほど地震の危険に世界が晒されることはなくなる」

俯く米斗の声は、少し震えていた。

「あとは、――俺なりに償いをしたいんだ。兄貴や、親父に迷惑かけたこと、母さんを、死なせたこと。千具良を傷つけたし、関わった全ての人に、謝らなきゃならない。でもそれは多すぎて無理だから、こうやって俺なりにけじめをつけることで謝罪になると思うし、これ以上みんなを苦しめずに済む。それが理由だ。兄貴だってそうじゃないのか？ 母さんを死なせてしまった償いとして、俺の無関心さを鍛えてきたんじゃないのか？ もう誰も、危険な目に遭わないように」

「……っ」

言い返そうとした言葉が急に咽もとで消滅し、北斗の口だけが、微かに動いた。

「兄貴の償いは済んだよ。だから、次は俺の番だ。俺にも、何かやらせてくれ。っていっても、大したことはできないけれど……」

カシャリ、背後で何か硬いものを踏み潰すような音が聞こえた。全員が、音源に向き直る。そこに立っている人影に、表情を固まらせた。

少し哀しそうな、でもどちらかと言うと無表情に近い、感情の読み取れない複雑な表情をした小柄な少女。白い浴衣の上から黒い半被を羽織っている。

「.....私が入ります」

少女——千具良は真っ直ぐ、前進してきた。目の前に立ち尽くす、大切な者たちには目もくれず、ずかずかと目の前の機械の塊、冷凍睡眠装置付き宇宙船の丸い扉を開いて中に入ろうとした。

## 29. 非科学の勝利

---

「よせ、千具良」

米斗は、千具良の腕を掴んで引き戻そうとするが、動かない。幸いだったのは、それ以上、装置の中に入り込めないくらいには、こちらの力が作用していることか。

「米斗くん、この機械は、もともと私のために師範代が作ってくれたものなの。だから、私が入らなくちゃ。それに、こんな償い方は、米斗くんにはふさわしくないよ」

「話を、聞いていたのですね」

戸呂音の呟きに頷いた千具良は、強い口調で言った。

「師範代。大丈夫、もう迷惑はかけません。今まで、お世話になりました、私が入ったら、すぐにこの装置を起動させてください」

「やめろ、千具良。何をムキになってるんだ」

「違うよ。私には、こうすることが一番良くて、今はっきりと分かったから」

「そんなこと、分かるわけないだろう。行くな、止まるんだ」

千具良の首が横に振られる。もう、誰も言葉も届かないのだと言わんばかりに。

「.....分かりました。無理強いをさせてしまって、済みません。必ず、あなたを助ける方法を見つけ出し、連れ戻しますから」

戸呂音の合図。米斗の手を振り払い、千具良は機械の奥に入りこもうとする。一瞬立ち止まり、振り返る。米斗と目を合わせて、囁いた。

「今までありがとう、さよなら」

「.....」

寂しげな笑みに包まれた千具良の顔。その直後、米斗は走っていた。千具良を肩に担いで、一目散に地上へ。

「米斗さん!？」

「やっ、こ、米斗くん!？」

驚く戸呂音と千具良の声が耳をすり抜ける。一瞬見えた、横たわる北斗の浮かべた表情だけが、満足げに笑っていたように感じた。

☆彡 ☆彡 ☆彡

足音が遠ざかる研究室。取り残され、啞然とする戸呂音の元へ、入れ違いに吉香が入ってきた。

「すみません、目を離した隙に千具良がいなくなって.....どうかしました？」

「ああ、吉香さん。先ほど、米斗さんが千具良さんを連れて行ってしまいました。途中で会いませんでしたか？」

「すみません、裏道を通ってきたもので。.....師範代、いえ、マスター。やはりこうするしか、道はないのでしょうか？」

「どういう意味ですか？」

吉香が放つ、吉香らしからぬ発言に、戸呂音は眉を顰める。明らかに、いつもと違う吉香の表情。今までの忠実なロボットではなく、どこか強い人間臭さを際立たせた雰囲気だ。

「私を作ってくださった未来のあなたは、原因を根底から除去しなければならないと判断はしましたが、それとは裏腹に、こうも仰っていました。『地球崩壊の引き金となった大地震。あれは確かに千具良が起こしたもののだけれど、あのきっかけがなかったとしても、遅かれ早かれあの惑星は同じような運命を辿っていたのではないか』と。未来のあなたは、こんな仮説を立てておられました。『千具良の心臓の鼓動と、地球の振動がシンクロしたのは、意思を伝えられないこの惑星の、必死の訴えだったのかもしれない。誰かにこの苦しさを伝えたくて、自分の動悸は、こんなにも激しくなっているのだと分かってもらいたくて、それで心の鼓動を、人間とつなぎ合わせたのではないだろうか』と」

吉香の言葉は、戸呂音の心を大きく抉った。

未来の自分の考え、憶測。それは決して、災害が起こってしまった後に生み出された、結果論だけでは決してない。

今だって、考え続けている可能性。千具良を苦しめずに済むかもしれない、一つの可能性だった。

だが、敢えてその考えを、戸呂音は拒んでいた。科学者としては、あまりにも根拠に欠ける可能性を、認めることはプライドが許さなかった。

「落合米斗の体質を知ったときも、もしかしたら千具良のときと同じで、恐竜絶滅時代の時と類似する、災害の前触れかとも思いました。ですが、彼を止めたところで、それは一時凌ぎにしかならず、結局いつかは、何らかの災害はやってくるのではないかと、私は思いました」

だが、吉香の心苦しそうな表情を見ていると、もう答は出ているのかもしれない。この馬鹿らしい正義感ぶった考えは、修正するべきなのだろうと。

千具良と米斗が出会った瞬間から、未来は、確実に変わったのだから。

「……ずいぶん、非科学的なことをおっしゃるのね。あなたも、あなたの作り主も。でも、そう思えることが一番いいのかもしれないわ」

戸呂音は笑い、冷凍睡眠装置付き宇宙船の動力を落とした。モーターの音が止み、地下室に静寂が訪れる。

「わたくしとて、これ以上、無理強いするつもりはありませんよ。決めるのは彼らです。彼らが望む答を、受け入れようと思っています。吉香さん、二人を迎えに行ってくださいな」

「あ、はい……。生意気な口きいて、すみませんでした」

頭を下げる吉香に、戸呂音は笑いかける。その表情に怒りが無いことを察知し、少し困った笑みを浮かべて、吉香は地下室を後にした。

戸呂音はベッドに繋がれたままの北斗に歩み寄り、おしとやかに微笑んだ。

「弟さんの出した答、納得されました？」

北斗は満足そうに笑って、天井を見つめて安堵の息を漏らした。

「そうだな。あいつらしい、と思った」

償いなんて、考えるものではない。あれはとても苦しく、身動きが取れなくなって、何より未来に希望を見出せなくなる。米斗には不向きだ。

「さて、そうなる、わたくしもまた、やる事がなくなってしまいましたので、先ほどの続きでも……」

メス片手に、戸呂音は妖艶に笑った。

地底にて、断末魔の悲鳴が響きわたった事実を、地上の人間たちは誰も知らない。

☆彡 ☆彡 ☆彡

「ちょっと待って、止まって米斗くん！」

千具良は叫んだ。米斗の腕に抱き上げられ、地上に出て早数分。道場の建造物が、どんどん遠ざかっていく。逃れたくても、地に足が着かない。宙に浮いた感覚がどうにも心地悪く、米斗の息遣いと体温が、お腹の辺りにじんわり感じ取れるのがなんとも恥ずかしく、耐えられなくなった。

悲鳴に応じて、米斗は立ち止まった。どこをどう走ってきたか分からないが、ずいぶん山の中に来てしまっていた。山と言っても、広い道路が走っていて、生い茂る森林地帯とは高い崖で隔離されている。側の歩道には、松の木が一本、取り残されたように生えているだけだ。

千具良を下ろすと、米斗は松の木に背を任せて、座り込んだ。珍しく息を切らせて、汗を掻いていた、米斗はベジタリアンだし、体育会系というわけでもない。峠道は、少々きつかったのかもしれない。

「……どうして、私じゃ駄目なの？」

そっとしておいてあげたいところだが、今は米斗に気を遣う余裕もない。きっと、すぐに吉香か門下生の誰かが、戸呂音に命令されて追いかけてくるだろう。それまでに、どうしても米斗の行動の理由を聞いておきたかった。

「どうして、私がああ機械に入っちゃいけないの？ どうして米斗くんならいいの？」

千具良は米斗に、再度問いかけた。米斗はしばらく考える素振りを見せて、ゆっくりと返答した。

「……戸呂音さんには悪いんだけど、千具良や、俺の体質を解明して治療法が見つかる日なんて、来ないと思う」

言いくそくに、しかし淡々と本音を告げた。

「それに、あんなの宇宙に打ち上げても、戻ってこれる確信がないしな。入ってすぐ死んでしまうかもしれない。仮に戻ってこられても、あの中で冷凍睡眠だか何だかしてる間はほとんど歳をとらないって言うし、その頃には、きっとみんな、いなくなってると思うんだ。ひょっとしたら吉香が言っていたように、地球そのものがなくなってる可能性もある。もし生き残ったとしても、千具良がたった一人きりになっていたら、耐えられるのか？」

そう言われ、千具良は返す言葉が見つからない。

「そんな思いをしなくちゃならないなら、乗るのは俺のほうがいいだろう」

「……………」

独りきりになるのは、確かに嫌だ。だけど、米斗が独りぼっちになるのだって、きっと辛いはずだ。

米斗が死ぬかもしれないなんて、千具良は嫌だ。

どうして、一緒に行こうって、言ってくれないんだろう。

その言葉を聞くことは、できなかった。怖くて、問い掛けもできなかった。

一緒に居たくないと言われたら、一人がいいと言われたら、終わりだ。

その気持ちを悟られないように、震えそうな声を必死で強く支え、違う視点で話を進める。

「でも、米斗くんは、あれに乗るには、相応しくないよ」

「どうして」

「だって、米斗くんは、自分が、あたしと同じような、いつ誰かを傷つけてしまうか分からない力をもっていることを知った時、真っ先に周りの人の心配をしたでしょう？ 自分自身のことよりも、他の人たちを気に懸けて、どうにかしようって思ったんでしょう？ ……私は、違うの。初めてこの力のことを知ったとき、とても怖かった。他の人がこの事実を知ったら、きっと私の前から離れて行ってしまふ。私は、独りぼっちになっちゃう。そんなことばかり考えてた。どうしようもなく怖い。いつ自分の周りからみんながいなくなってしまうのか、考えるだけで凄く怖かった。こんな恐ろしいこと考えて、いつか本当に現実になってしまう時まで、怯えて暮らしていくことが、正直耐えられなかった。逃げ出したかった。米斗くんと出会ってから、仲良くなればなるほど、いなくなってしまう時が来ると思うと、怖くて哀しかった」

本当の気持ちを話せば話すほど、情けなくて涙が出てくる。

「さっき、米斗くんが話しているのを偶然聞いたとき、自分の自己中心的な気持ちに腹が立った。ただ自分が良ければそれでいいって思っていた自分が、凄く嫌だった。こんな、我儘な私のほうが、絶対あの機械に入る資格があるの。誰かのことを思ってあげられる米斗くんは、絶対入るべきじゃない、ここに残って、大切な人たちと幸せになるべきだと思うの……！」

自分の心の中に溜まっていたものを、全てぶちまけた。すっきりはしなかった、逆に幼稚な自分の感情が言葉に代わって表に出てくるたびに空しさが込み上げ、その言葉が米斗の耳に入っていることが実感できる度に、恥ずかしくなる。いても立ってもいられず、千具良は走り出していた。後で米斗の声が聞こえても、それを必死で払いのけて、ひたすら走った。

山道を駆け抜けて、目の前に現れた崖に速度を殺され、ブレーキをかけた。立ち止まって足元を見てみれば、靴を履いていなかった。ずっと裸足で駆けてきたため、足は泥と砂に汚れ、冷えて赤くなっていた。でも、なぜだか痛みはない。

崖っぶちに這いつくばり、下を見る。眼下は谷だ。深くて鋭利な峡谷が、細長い亀裂を作って、真っ暗な口を開いている。一番下には川が流れているのだろうが、ここからだ遠くて、一本の白い糸みたいにしか見えない。

——ここから飛び降りてみようか。いっそ、死んでしまえば、どれだけ楽になれるだろう。

千具良が死んだからって、千具良の心臓が止まったからって、地球の動きまで止まってしまうことはないだろう。地球は大きいのだ、千具良が生まれる何億年も前からみんなを乗せて回って

いる。そこに偶然、千具良の鼓動が合わせにあってしまっただけ。

私がいなくなっても、何も変わらない。むしろ、世界は救われる。

戸呂音がここにいたら、聞いてみたくなる。どうして、自分を殺さなかったのか。それが何よりも手っ取り早い方法だったのに。

北斗先生にも、聞いてみたかった。米斗くんを、弟を殺してしまおうかと思ったことはない？

いや、あの人は頑なに否定して、NOと言うだろう。本当に弟を、家族を大事にしていそうな人だから。私にも、あんなお兄さんがいればよかったな。そんなことを考えていると、無意識に笑顔が浮かんで綻びる。それに気付いて、ぶんぶん頭を振った。何を笑っているの。私には、そんな資格ないんだから。世界を、人生を楽しむ権利なんてないんだから。

立ち上がった。覚悟を決めた。崖下を見上げ、千具良は息を呑む。進もう、進もうと思うたびに、地面が振動する。

揺れないで、すぐ終わるから。

そして一步を踏み出そうと、汚れた足を前へ押し出した。

何もない、空気の床へ。

「――っ!？」

無の空間へ押し出されようとした身体が、後ろに引っ張られる。仰向けに千具良が倒れた場所は、米斗の身体の上だった。

落ちることができなかった。死ねなかった。

それに気付いた途端、ものすごい恐怖が千具良を襲う。

「あっ、ああ……………」

心臓が物凄い速さで脈打ち出す。

ドーン、ドーン。

まるで巨大な太鼓を叩いているかのような地響き。あたりを揺るがす振動は、尋常ではない。

誰か止めて、このままじゃ、全部壊れてしまう。この町も、みんなも、私の心も。

「お前は一人じゃない！ みんなお前の側にいる、……俺だって、千具良の側にいる、一緒にいたいんだ。だから、どこかに行ってしまうなでくれ。俺も、どこにも行かないから」

米斗だ。米斗の一生懸命な声が聞こえる。千具良の壊れそうな身体を必死で支えて、背中を擦ってくれている。

落ち着くように、何も考えずに済むように。昨日、公園でも米斗は同じようにして千具良を鎮めてくれた。米斗に触れられていると、側にいてくれているのだと分かると、とても安心できた。

。

だから、あの時の激しい心の鼓動は、おさまった。

今もそう。同じように、米斗の声を聞くと、心が落ち着いていく。元に、戻っていく。

揺れが止んだ。空気の震えも消え、ゆっくり、徐々にだが、完全におさまって、安定した時間だけが流れるようになった。

米斗が息を吐く音が聞こえる。泣きじゃくりながら、千具良は米斗にしがみついた。

「迷惑かけてばかりだけど、何もできないけれど、独りにしないでください。独りは嫌です」

「うん、俺も嫌だ」

頭を撫でられ、更に安堵の涙が溢れ出す。しばらく、涙が枯れるまで、二人はそのまま、じっとしていた。

### 30. 前途多難なココロノコドウ。

---

四月も終わりに近付いた、今日この頃。

桜も散り終わり、青葉が目立ってくる季節。空は雲も無い晴天、五月晴れに近い空に、早くも鯉のぼりがあがっていたりする。

先日の大地震は、戸呂音が作っていた地震の衝撃を和らげる地中ネットワークのお陰で、地震の規模に比べて小さな被害で済んだ。非難を必要とする被災者もほぼ皆無、日常生活にも大きな支障はなく、事なきを得た。

放課後。真島吉香は、切りそろえた黒い長髪を風になびかせながら、昇降口の壁に背をあずけて立っていた。

哀愁にふけている暇はなく、砂に汚れた生徒用玄関を隅々まで掃きあげなければならない身分に置かれているが、彼女にとってそれは大した問題ではない。右腕に箒を挟みながら、分厚いノートをぺらぺらめくっている。広げられたノートには、化学式や数式のようなものがびっしりと書き連ねられていた。それには改行もなく、空白もなく、関連性もなく、統一性もない。ただ暗号みたいに、白い紙面を黒で塗り潰しているだけだ。

それを簡単に要約してみると、こんな内容が書かれている。

「地震誘発体質者、有栖千具良に関する考察と実験とその結果」

今までに、こまめに観察して書き連ねてきた吉香専用の報告ノートだ。これに良き結果を書き記し、未来の、彼女を造った「袴田戸呂音、が待つ世界へ戻りたかったのだが、そうもいかなかった。

ノートにあまり良い結果が残せそうにないこともあるし、それ以前に、こちらでのんびりしている間に、主である彼女の命が尽きてしまった。未来の戸呂音から貰った、時間移動機能付きの携帯電話から送信されてきた情報で主人の死を知り、吉香はやるせない気持ちでいっぱいだった。別にその危惧は、ここへ来る前から予測していたことだし、こちらの世界では何の問題もなく、戸呂音は楽しく暮らしているのだから、問題ないといえはないのだろうが、個人的には凄く複雑だ。

最近では、落合北斗と言う良き鴨を見つけ、日々生気を漲らせて実験に取り組んでいる。戸呂音はとても元気だった。

ふと、顔を上げれば、鴨が体中を傷だらけにして、やつれて泣きそうな顔で廊下をトボトボと歩いていた。今日も世界は、平和そのものだ。

そう、それに、吉香の使命はまだ終わっていない。

最近地震の被害は少なくなってきたものの、根本的な原因が解決したわけでもなし、また新たな課題が浮上していた。

「よう、掃除か。精が出るな」

そう、こいつだ。馴れ馴れしく声をかけてくる、このやる気のなさそうな無関心男、落合米斗。

こいつの存在が、またも問題を山積みさせている。

ここ数日の調査の結果、千具良が起こしてしまいそうな大災害に繋がる大きな動揺や心臓の鼓動は、米斗が側にいることで、危険回避できる事実が明らかになった。だから、千具良の側には、米斗がいることが必要不可欠な要素となっているのは間違いない。

しかしながら、こいつにも欠点が――。

「お待たせ、米斗くん！」

下駄箱から、靴を履き替えた千具良が走ってきた。吉香と米斗がそちらへ目を向けた途端、ほどけた靴紐を踏んづけて、千具良が盛大に転んだ。

「きゃあっ！」

「千具良っ!？」

瞬間、米斗が大げさなほどに慌てて、千具良に駆け寄る。

ずどーん。

外から大きな音と地揺れが響き渡った。校庭の方向から「わー」「ギャー」と悲鳴が上がる。

吉香が、ひょいと外を覗いてみれば、グラウンドに小さな隕石が落下していた。小規模と言えど、相手は隕石。摩擦熱を帯びて熱いわ、地面にめり込んでクレーターは作るわで、グラウンドで練習していた野球部とサッカー一部は甚大な被害を被っていた。

怪我人がいないだけ、マシか。遠目に被害状況を確認しながら、吉香は呆れて息を吐く。

そう、一番厄介な事態は、ここ一連の事件のせいで、米斗の平常心が乱れに乱れて、平均水準が下がってしまったこと。特に、千具良のことになると、とても敏感に心臓が反応するらしい。

千具良と一緒にいると、逆に米斗が危ない。

かといって、二人を引き離しておくとも、千具良が危ない。万が一、千具良の鼓動が暴走してしまったとき、それを宥めて静止できる人物は、今のところ米斗だけなのだ。

「……さて、どうしたもんかねえ」

何とも前途多難だ。

仲良く手を取り、こちらに手を振って帰宅の戸へつく問題児二人を据わった目で見送り、吉香は再度、大きく息を吐いた。

〈終〉

とある初夏の早朝。

袴田道場師範代、袴田戸呂音が、珍しく神妙な面持ちで吉香に声を掛けてきた。

「吉香さん、吉香さん。いよいよ`運命の日、が、やってまいりますよ」

「ああ、北斗先生との結婚の日程、決まったんですか？」

特に感嘆もなく、さらりと返すと、戸呂音は頬を染めてテンションを上げ、吉香の背中をバシバシと叩いてきた。

「嫌だわ、結婚なんて！ まだ早いですよお」

照れ隠しに否定してくるが、その嬉しそうな表情はまんざらでもない。

早いということはないだろう。戸呂音も、二六歳。いまどきの結婚適齢期を考えれば遅すぎる年齢とも言えないが、それでももう伴侶がいてもおかしくないお年頃だ。

主人が嫁に行き遅れて寂しい老後を送りはしないか。吉香の中では心配の種の一粒でもあった。

「まだなんですか？ さっさと首輪をつけておかないと、そろそろ逃げられますよ」

「そうなんですよねえ。最近は麻酔にも耐性ができてきたらしく、あまり長い時間捕まえておけなくなってきて……。まあ、そちらの心配は先送りにして。今は冗談やのろけ話をしている場合ではないのですよ。もうじき、ついに、あの恐れていた日が来るのです」

戸呂音の緊迫したオーラが伝わってきて、吉香も息をのんだ。

「あの日、ですね……」

「何をすべきか、あなたならば言わずとも、分かっていますね？」

「もちろんです。あらゆる手を尽くして、地球の危機を阻止してみせます」

「貴女だけが頼りです。よろしく願いますよ」

「お任せください。私も、主を二度も死なせるなんて、絶対に御免ですから」

いつも通り、冷静に。かつ、吉香の心の中は、強い使命感に燃えていた。

☆彡 ☆彡 ☆彡

話したところで信じてもらえないが、真島吉香はロボットだ。

というのも、外見は人間の持つ特徴に遜色なく、皮膚や髪、爪や産毛の触感まで、精巧忠実に再現された体を持つため、首を外して見せでもしない限り、誰も気が付かない。

人間の社会に入り込み、当たり障りなく人間と共に生活する。そういう用途を目的として作られたロボットだった。

吉香は、稀代の天才発明家、袴田戸呂音によってこの世に創り出された。

といっても、つい先ほどまで会話をしていた人物ではない。`未来の、袴田戸呂音だ。

吉香の生まれた世界では、超巨大地震が起こって地球が崩壊、滅亡してしまった。唯一、その危険を事前に察知した戸呂音だけが、命からがら月へと逃れ、生き延びた。

そして、最後の力を振り絞って作り上げたロボットこそが、吉香なのだった。

吉香に与えられた使命は、ただ一つ。

巨大地震が起こるより前の時間軸に戻り、その原因を取り除き、地球の滅亡を事前に食い止めること。

その使命を全うするために、吉香は戸呂音の作ったタイムマシンで時を超え、災害が起こる数か月前にやってきた。それが、今いるこの世界だ。

震源地は、東京と埼玉の境辺りにある閑静な町、彩玄町。

そこで出会った過去の戸呂音に協力を求め、未来を変えることによって未然に災害を食い止めようと奔走してきた。

その結果、滅んだ世界とはまた異なった未来を構築して、少しは運命を変えられたと吉香自身も実感してはいるが――。

実際のところ、まだまだ諸問題は山積みとなっていた。

☆彡 ☆彡 ☆彡

翌朝。

吉香は彩玄高校の制服に身を包み、通学路をてくてくと歩いていた。

吉香の外見は、十六歳の少女を模して造られている。いざという時に災害を食い止める力を発揮するためには、いささか不釣り合いな体格だとは感じていたが、制作者である戸呂音がこの姿がベストなのだと判断したのだから、文句を言うつもりはない。

この世界にやって来てから、吉香は戸呂音が師範代を務める武術の稽古教室、袴田道場の門下生としてお世話になりながら暮らしていた。

袴田道場は通いの門下生の育成だけでなく、事情があって親と暮らせなかつたり、登校拒否などで日常生活が満足に送れなくなってしまった子供を預かって鍛錬を積ませ、自立心を鍛えさせることを目的に運営している施設だ。戸籍も親も持たない吉香が一人潜り込んでも、誰も不思議には思わないので好都合だった。

「吉香ちゃん、吉香ちゃん。もうすぐ遠足だよ！ おやつ、何持っていこうかな。バナナはおやつに入るのかなあ？ 米斗くん、バナナ好きかなあ？」

吉香の隣を歩く、小動物みたいに小柄な少女が、表情に花を咲かせてウキウキワクワクしながら、話しかけてきた。

同じ道場で生活を共にする、クラスメイトの少女。名前は、有栖千具良。

「本当に、お気楽ねえ。あんたは」

無邪気で子供っぽく、おおよそ人を疑うという感情を知らなさそうな無垢な同居人に、吉香は呆れる。

これが本来の女子高生の姿だし、のほほんと暮らせるのは世の中が平和な証拠だから良いのだが、あまりに物事に対して危機感のない平和ボケした姿を見ていると、この歳になってこんなに幼稚でいいのかと、逆に心配になってくる。

鼻歌を歌いながら、軽やかな足取りで歩く千具良を横目に、吉香は表情を強張らせた。

「……ねえ、千具良。今度の遠足なんだけれど、欠席しない？」

意を決して、話を切り出す。吉香の張りつめた緊張感には気付いていないらしく、千具良はただ、不思議そうに問い返してきた。

「どうして？」

「だって、牧場なんて、つまらないでしょう？ サボって、どこか別の場所に遊びに行ったほうが」

吉香が当たり障りなく説明を続けるも、千具良は納得するどころか、徐々に表情を陰しく変えていく。

「つまらなくないよ。私、ずっと楽しみにしてたんだよ？ 米斗くんも、自由時間は一緒に見て回ろうって、言ってくれたし」

「あいつとデートなら、どこでだってできるでしょう？ 何も牧場じゃなくたって……」

必死の説得も空しく、吉香の思惑とは裏腹に、千具良の顔はみるみる曇り、目に大粒の涙を溜め始めた。

まずい。吉香の作戦は完璧に裏目に出た。

ズズズズ……。

足元から、微かな振動が伝わってくる。街路樹がざわめき、側のコンビニの駐車場に立てられた旗の先端が揺れている。

「約束、したんだもん。米斗くんと、牧場行くの……」

千具良が涙水を啜る度に、揺れが大きくなっていく。今でこそ、屋外に立っている人間には感じ取れないほどの揺れだが、これ以上酷くなると、大変な被害が出てしまう。

「ああ、分かったわよ。分かったから、もう言わないから、落ち着きなさい」

吉香は慌てて、千具良を宥めた。

何とか泣き止ませる。千具良の感情が静まるに従って、揺れも静かに引いていった。

吉香は安堵の息を吐く。

そう、吉香が生まれた世界で、地球を滅亡させるほどの大地震を引き起こした元凶は、目の前にいる何の変哲もない少女なのだった。

千具良は、心臓の鼓動が何らかの偶然によって地球の核の動きと連動してしまっているらしく、激しく高鳴ると、千具良のいる場所を震源に巨大な地震が引き起こされる。

吉香はその脅威を食い止めるために、千具良の側で状況を見守り続けてきたわけだ。

改善策として、千具良がちょっとやそっとの出来事で動揺しないために、精神を鍛えて強い平常心を持たせようと、努力してきた。

その努力も少しは実ったが、まだまだ思春期の千具良の心は、不安定だった。

今みたいな調子では、とうてい、来るべき`運命の日、を乗り越えるなんて不可能だ。

「困ったわね。千具良があんな浮かれた調子じゃ、水際対策ができなくなってしまったわ」

頬を膨れさせて、先を歩いていく千具良の背中を見つめながら、吉香はさらに不安を募らせ

ていった。

☆彡 ☆彡 ☆彡

休み時間。

吉香は教室のベランダに出て、校庭を眺めながら途方に暮れていた。

千具良を説得して、行動を制御できれば一番話は簡単だったのだが、うまくいきそうにない。別の方面からアプローチをしていくしかない。その方法を考えていた矢先、隣の教室のベランダから首を突っ込んできた輩がいた。

「おいコラ、真島」

隣のクラスの住民、落合米斗だった。

何事に関しても動じない、無感情で無反応、世界一の平常心男と称される、校内きっての変人として名高い男子生徒。こいつこそがロボットなのではないかと思えるほど、普段はやる気なく生気の感じられない男だ。

かつ、千具良の彼氏でもある。

「何で千具良が遠足に行くのを反対するんだ。意味の分からん嫌がらせは、やめろ」

相変わらずの無表情だが、死んだ魚みたいな目には、珍しく憤りが火を付けている。千具良が愚痴ったのだろう、今朝の一件について吉香を非難し始めた。

もちろん、千具良を強引に説得しようとして泣かせてしまったことは反省しなければならない。

だが、こいつに言われる筋合いはない。むしろ何にも考えていなさ過ぎて、逆に腹が立つ。

「意味が分からん、なんて、どの口が言うのかしらね？」

怒りを発散するべく、吉香は米斗が突き出してきた顔を両側から挟み込み、頬を思いっきり外側に引っ張った。

「痛いだろうが。何すんだ」

如何にも痛そうに文句を垂れているが、表情は完全に無であり、全然苦痛そうに見えない。そのあたりは流石と言える。

米斗の存在を千具良に教え、付き合ってみてはどうかと勧めたのは、他でもない吉香だった。この人間とは思えない、極められた平常心。その強い精神力を会得する方法が存在するのだとしたら、千具良の心臓を守るために大いに役立つ。何としても平常心を保つテクニックを盗み出せと、接近させたのだった。

結果としてはうまくいかず、さらに米斗までもが隕石誘因体質とかいう訳の分からない体質を持っている事実が明らかになり、より地球の寿命を縮めてしまいそうな事態にまで発展しかかった。

千具良や吉香たちと関わったことで、米斗ももちろん、千具良の地震を起こす体質については良く知っている。

その上で、今みたいな台詞を飛ばしてくるなんて、吉香から見れば軽率で浅はかと思え

なかった。

「あんたは師範代の話覚えていないの？ 千具良が、もう一つの世界で大地震を起こし、地球を滅ぼすきっかけになった事件を」

諭してやると、米斗は思い出したらしく、少しだけ表情を硬くした。

「事件って、まさか……」

「そう。いわゆる『千具良の頭を牛がパッキリ事件』よ」

「果てしなくネーミングセンスのない、そのまんまの事件名だな」

「お黙り。名前なんて記号、何でもいいのよ。大切なのは中身。千具良は、学校の遠足で牧場に出掛けた際に、牛に頭を食べられたショックで、大地震を引き起こすの」

そのお陰で、地球は大崩壊した。唯一、宇宙に逃げ延びることに成功した戸呂音一人を残して、文明も生命も、何もかもが滅びてしまった。

もう一つの世界で言うところの`運命の日、。

その日が、こちらの世界でも、もう目前に迫っていた。

「けど、その未来は、お前が過去にやってきて色々と干渉したことで、変わったんだろう？ だったら、もう心配しなくても大丈夫じゃないのか？」

「確かに、私たちがいるこの世界は、いわば大地震によって滅んだ地球の並行世界——パラレルワールドよ。向こうの世界とは全く異なる未来を持つ、別世界であるという事実に間違いはないわ。だけど、この世界の結末が、私がやってきたもう一つの世界と同じにならないとは、限らないのよ」

並行世界とは、同じ時間軸、世界観をもっていながらも全く異なる場所に存在し、決して交わることのない世界、と定義されている。

だが、交わらないとしても、二つ存在する似通った世界である以上、起こる出来事さえも異なるとは、決して言い切れない。

たとえば、同じ環境の元に作られた地球がこの世に二つ存在するとしたら、そのどちらかに生命が誕生して、もう片方には何も生まれぬ、といったことは起こり得ない。似ているからこそ、全く同じ生命が生まれ、同じ進化を辿り、同じ方法で発展を遂げていくという事象が当然起こり得る。

まして、この世界と吉香がやってきた世界は、ほんの数日前までは全く同じ歴史をたどってきた、一卵性双生児みたいな存在なのだから、その誤差なんて微々たるものだ。

だから、向こうの世界で起こった悲劇が、こちらの世界では絶対に起こらないなどという考えは、安易すぎると吉香は考えている。

「もちろん今、私や師範代が足搔いたところで、地球の未来を救える確証なんてないわ。だけど、何もせずに指を咥えているなんて、嫌なのよ」

危険な目は早いうちに摘んでおく。そのくらいの努力しか、いまの吉香にはできない。

「俺だって、嫌だ。また大地震が起これば、千具良は自分自身を責めるだろう。そんな辛い思い、二度とさせたくない」

米斗も、気持ちとしては吉香と同じものを共有していた。ただ、吉香と違う点は、何の根拠も

ないのに堂々と構えていられるところだ。

何も考えていない馬鹿としか言いようがないが、その能天気さが少し羨ましくも思える。

「そう心配して、一人で気負うな。いざって時には、俺が千具良を守る」

米斗はポンと、吉香の肩を叩いてくる。

「要は、千具良を牛に近付けさせなければいいんだろう？ ちゃんと見てるから、心配するな」

独自の結論を簡潔に出し、米斗は満足して教室に戻っていった。

取り残された吉香は、米斗の後姿を見つめながら、大きく息を吐いた。

「千具良も危ないけれど、あんただって十二分に危険因子なのよ……」

滅んだもう一つの世界以上に複雑な事情を含む、この世界。

吉香の力だけで守り切れるのだろうか。正直、不安だった。

☆彡 ☆彡 ☆彡

放課後。

吉香はまだ、千具良の遠足参加を阻止する方法を諦めてはいなかった。

千具良だけを欠席させることができないならば、遠足そのものを無に帰してしまえばいい。

そんな考えを巡らせ、職員室に向かった。

丁度、職員室から気配もなく出てきた、生気のない若い教師を見つけ、声を掛けた。

「北斗先生。今度の遠足、中止か、別の場所に変更はできないのでしょうか？」

教師の名は、落合北斗。米斗の兄であり、戸呂音の高校時代の同級生でもある。

昔から戸呂音のお気に入りであり、何かと捕まっては人体実験の餌食にされている。

そのため、最近はげっそりやつれて頬もこけ、いつも疲れ切った顔で幽霊みたいに学校を徘徊している。まあ、授業はきちんと行っているので、誰にも迷惑は掛かっていないから問題ないのだろう。

この男に学校行事を変更させるほどの力があるのかは謎だが、まずは小手調べに訴えてみることにした。

「……真島。どうして人は家畜を飼い、眺めて楽しむのか分かるか？」

「は？」

北斗は虚ろな目を吉香に向けて、よく分からない質問を返してきた。

「この雄大な地球に蔓延る人間どもは、己たちこそがこの世の支配者だと自惚れ、数多の他種族の生物を都合の良い奴隷の如く支配してきた。その最たるものが家畜であり、ただ人間たちが己の腹を満たすためだけに品種改良を繰り返し、田畑を耕すためにこき使い、金儲けのために鞭を打って走らせる、そんな愚行が遥か昔から繰り返されてきた。そして今も、ただただ人間の糧となるためだけに増やされ、生き続けている。そうやって、家畜は何の意味も尊重されず、ただ人間に弄ばれ、骨までしゃぶりつくされていく運命なのさ。今の俺みたいにな……！」

話が盛り上がるにつれ、北斗のテンションが急上昇していく。仕舞いには恐ろしいほどの奇声を上げて笑い始めた。

「人間のおぞましい欲望を満たすために作られた地獄の施設こそが牧場だ。そんな人の業を存分に堪能できる遠足を取りやめる意味がどこにある！ さあ、思いのままに楽しむがいいわ、どす黒い未来を担う、愚かな高校生ども！」

「やかましい。全世界の酪農家さんたちに謝りなさい」

戸呂音が変な実験を繰り返したせいで、すっかり脳がイカれてしまったのかもしれない。完全に正気を失っている北斗にチョップを食らわせ、吉香は北斗の側を去った。まだ高笑いを続けていたが、無視だ。

「話にならないわ、ダメ大人」

その後、担任や学年主任などにもさりげなく掛け合ってみたが、牧場への遠足は昔からの伝統行事で、校長先生も楽しみにしていることから、中止にはならない、とのことだった。

起こるかどうかわからない災害が起こる危機を持ち出して訴えかけても、恐らく信じてもらえない。

やむなくこの作戦も挫折し、吉香は引き下がった。

「やっぱり、人任せになんてできないわね。私が何とかしなくちゃ」

こうなったら、もう当日に千具良に張り付いて、あらゆる危険から守り通すしかない。

吉香は腹を括った。

☆彡 ☆彡 ☆彡

遠足の前日。

袴田道場の地下にある研究室で、戸呂音は吉香の整備に精を出していた。

「明日に供えて、メンテナンスは念入りにしましょうね」

手入れをする側もされる側も、気合が入っている。予測できる世界最大の災害を、万全の態勢で防ぐためにも、全ての準備に置いて妥協は許されない。

吉香はもう一つの世界の戸呂音が作ったロボット、といっても、実際に詳しい製造方法は今の戸呂音には分からない。世界の滅亡に直面し、孤独と絶望の中で知恵と技術を絞り出して、何とか作り上げた最初で最後の傑作だ。

幸いにも吉香が設計図を一緒に持ってきてくれたため、整備の方法だけは把握することができたのが幸いだった。

吉香の首の後ろを弄りながら、ふと、考える。

――明日以降、この設計図を基に、滅んだ世界でただ一人、吉香を作り出そうと奮闘する、なんて羽目にならなければいいけれど。

そんな不安と戦いながら、戸呂音はメンテナンスを完了させ、吉香を再起動させた。

「これでよし、っと。調子は如何です、吉香さん」

起き上がって首や腕を回しながら、吉香は体の調子を確認して、満足そうに頷いた。

「なんだか少し、頭が軽くなった気がします。明日は気合を入れて遠足に臨めそうですね！」

「それはよかったですわ。頼みましたよ」

戸呂音は安心して、寢室に戻っていく吉香の背を見送っていた。

足元に、大事なネジが一本転がったままになっている事实に、気付かないまま――。

☆彡 ☆彡 ☆彡

そしてやってきた、遠足当日。

場所は彩玄町の北部に広がる高原内で経営されている、彩玄牧場だ。

それほど広い牧場ではないが、バリエーション豊富な動物が飼われていて、実際に触ったり餌をやったり、生き物と触れあえるサービスが充実した、親子連れに人気のスポットだ。

柵で囲まれた牧場の中では、家畜たちが種類に関係なく、のびのびと歩き回ったり、草を食んで寛いでいた。

「すごーい。牛さん、いっぱいいるね！」

到着するや否や、既に千具良は、はしゃいでいる。その隣で、吉香はあらゆる動物たちに注意を払っていた。

みんな、可愛いだのなんだのと家畜どもを愛でているが、吉香には目の前の牛や馬が、核ミサイルの発射ボタンと同等の存在にしか思えなかった。

牧場に着くと点呼をとり、その後は帰るまで自由行動だ。各々、思い思いの方法で動物と触れ合ったり、暇を潰して過ごしている。

牧場の中央にある建物の中はお土産屋やカフェになっていて、牧場お手製のスイーツや軽食も楽しめる。

千具良もどんなメニューがあるのか下調べしてきたらしく、一直線にソフトクリーム売り場に直行した。濃厚で新鮮なミルクを使用したバニラソフトは、牧場の一番人気メニューらしい。

だが、カウンターに貼られた張り紙を見て、がっくり肩を落とす。

「あー、牧場手作りのソフトクリーム、販売中止なんだ。残念」

「ここ数日、牛乳の出が悪くて。申し訳ありません」

売店の店員が、申し訳なさそうに謝っていた。

牛乳があまり絞りだせない。その異変に、吉香は真っ先に反応した。

大きな地震が起こる直前、一部の動物たちは奇妙な行動を起こす場合がある。

カラスが大群になって空を覆ったり、魚がみんな同じ方角を向いたり、ネズミが大移動を行ったり。

何の因果か不明だが、牛は大地震の前になると、お乳の出が悪くなる、といった報告もされている。

もしや、この牧場のホルスタインたちも、来るべき大災害を予知して体の変調を起こしているのではないだろうか。

嫌な予感が脳裏に広がり、不安が募る。

「そりゃ、生きてるんだもんな。調子の悪い時だってあるよな。お前たちも苦労してんだ、俺と一緒にだよ……」

背後をうろついていた北斗が、チラシを見ながら憂鬱そうなため息を吐いていた。こんな背後霊みたいな奴が徘徊しては、遠足気分も台無しになる。今日が何の問題もない普通の楽しい遠足だったなら、吉香は北斗をぶっ飛ばしているところだ。

「兄貴、最近疲れているから。少しでも休息できると良いんだけどな」

そんな北斗を横目に、切なそうに見つめながら、米斗が呟いていた。

米斗も何も考えずにポーッと動物を見ているわけではなく、さり気なく千具良の側をキープして、様子を伺っているらしい。

殺気だっている吉香の側に寄ってきて、軽く背中を叩いてきた。

「お前も、もっと肩の力抜けよ。大丈夫だって。俺がついてる」

吉香は目を細めて、米斗を睨んだ。

「うっさいわね。あんたみたいなお気楽男には、何の期待もしていないのよ。そこの変人連中と牧場見学でも楽しんでいなさいよ」

吐き捨てて、吉香は顎で店の外を指した。牛がたくさん放牧されている牧草地の柵の側で、三脚とカメラを立てて鼻息を荒くしている男がいた。

富田とかいう、瓶底メガネのもやしっ子だ。

「徹夜で張り込んだ甲斐があった！ いいアングルで写真が撮れそうだ」

「富田。朝見かけないから欠席かと思ったら、昨日から来ていたのか。写真撮るなら、みんなで撮ろうぜ」

米斗が歩み寄ろうとすると、富田は眼鏡を光らせて威嚇。凄まじい剣幕で牽制してきた。

「真昼間から寝言をほざくな。この素晴らしい高解像度レンズに、どこにでも徘徊している何の変哲もないホモ・サピエンスなんぞ、写し込ませてなるものか。僕は今日こそ、この牧場で未知との遭遇を果たして見せるのだ！」

続いて、柵の向こう側の一角を指さす。指の先では、穴の中から這い出てきたモグラが、ヨチヨチと草の上を前進していた。

モグラはずっと地中にいるから、太陽の下に出ると死んでしまう、という説もあるらしいが、半分正しく半分間違いだ。確かに日光や高い気温が苦手なモグラもいるが、日本に生息するモグラはたいてい平気だし、目が退化して太陽の眩しさなんて分からないのだから、地中にいようと地上にいようと、大して問題ではない。

「見たまえ、落合くん。モグラが地面を走っている！ これはとてつもなく素晴らしい、何かが起こる前触れだ！ 近いぞ、キャトルミューティレーションの起こる日は間違いなく今日だ！

チュパカブラも来るかもしれん！ 必ずや証拠写真を収めてやる！」

「おお、やっぱり高原のモグラは一味違うな」

このアホ二人は意味の分からん感動を露にしているが、吉香にとってはやはり、胸騒ぎの原因にしかならなかった。

確かにモグラが地上に出てきてもおかしくはないものの、その確率は非常に低い。かつ、地震が起こる直前に、モグラが頻繁に外に姿を見せるという現象が、過去に幾度か観測されている。

このモグラたちも、近く起こる大災害を予測して、地面の下から逃れようとしているのではな

いだろうか。

「ともかく、君たちは僕の一世代の撮影の妨げとなる。いいか、僕が許可を出すまで、周囲五十メートル以内とカメラの正面に立つことを禁ずる！ 規則を破ったものは罰として一人一万円ずつ、オカルト研究会の活動費を寄付させるからな！」

その言葉を聞くや否や、富田の周囲から人の姿は消えた。

場所を変えた吉香たちは、遊歩道を歩きながら、遠目に家畜たちの姿を見て回っていた。千具良と牛の間に距離がある分には問題ないが、吉香の心配とは裏腹に、千具良は好奇心旺盛に、やたらと牛に近付きたがる。

もし、牛がほんの僅かでも千具良に触れようものなら、即潰して肉屋に並べてくれる。

牛に殺気を放ちながら、吉香は家畜たちに睨みを利かせていた。

ふと隣に意識を向けると、側で、動物たちを眺めながら戦慄している男がいた。

「羊、牛、豚、豚、山羊、馬、豚、豚、豚……」

その男は、手当たり次第に視界に入る動物を確認しながら、苛立ちを募らせている。やがて何らかの怒りが頂点に達したらしく、発狂した。

「うがー！ 東西南北前後左右、家畜しかいねーじゃねえか！ 汚らわしい！ 何で牧場には醜い獣しかいねーんだー！」

「牧場ってのは、そういう場所なんだよ。武藤」

男の名は、武藤。またしても米斗のクラスメイトである変人第三号だ。

吉香にとってはどうでもいいが、プロレスが大好きなイスラム教徒らしい。

「俺は群れる奴らが大嫌いだ！ 我が家はシーア派だからな、数が多いってだけで威張り散らすスンニ派なんぞの権力に屈してたまるか！ 多数決なんてクソ食らえじゃ！」

「あいつ、何言ってんだ？」

武藤の喚きの意味が分からず、米斗は困惑している。面倒くさいが、吉香は説明してやった。

「イスラム教には大きく分けて二つの宗派があってね。スンニ派とシーア派ってのが教えの違いから対立とかしているのよ。信者の数は明らかにスンニ派のほうが勝っているけれど、あまり戒律の厳しくないシーア派のほうが幅広い地域で信仰されているわ」

「ふーん。お前は、イスラームのいじめられっ子なのか。大変だな」

納得しているのかしていないのか、米斗は頷きながら、武藤に同情めいた言葉を吐いた。

「なに、その幼稚な比喩……。舐めてんのかお前は！」

米斗の言葉が怒りの琴線に触れたらしく、武藤は米斗に突っかった。

「よく分かったな。俺は今、千具良から貰ったペロペロキャンディーを必死で舐めているところだ」

「くわー！ 腹立つ！ そんな甘ったるい砂糖の塊、俺のスペシャルバーニングチョップで、へし折ってくれるわ！」

武藤の不意打ちの攻撃を、米斗は全て見切って、柔軟に躲す。

「たとえ背骨を折られたとしても、千具良がくれたこのキャンディーは絶対に折らせん」

特に反撃するわけでもなく、のらりくらりと米斗は逃げる。

米斗に避けられた武藤は、拳を振り回した勢いで足元の石に躓き、柵に頭を突っ込ませた。

するとあろうことか、目の前にいた牛が、武藤の頭をバクリと食べた。

「武藤が、牛に食われた……」

流石の米斗も、その光景に唖然としていた。千具良も、地震を起こすほど驚いてはいないが、慌てた表情をしている。

奇妙に牛と接合した、武藤の首から下を見つめていると、吉香の脳裏に、突如として妙案の神が降臨した。

「そうか、この手があったわ！」

牧場にいる全ての牛に別の人間の頭を啜えさせてしまえば、千具良の頭を食おう、などと考える牛は一頭もいなくなる。

つまり、千具良が牛に頭を食べられる心配はなくなり、巨大地震を引き起こす危険もなくなるわけだ。

「おい、真島。何か変なこと企んでいないか？」

吉香の様子が変わったと気付いた米斗が、制止にかかろうと声を掛けてくるが、もう誰にも、吉香は止められない。

「何とでもお言いなさい。私は地球の未来を救うためならば、どんな犠牲も厭わないわ！」

吉香は既に、戦闘モードに入っていた。

近くで牛と触れ合っていた生徒たちの首根っこを掴み、餌を貰おうと柵に近寄っていた牛たちの口の中に、次々と頭を突っ込んでいった。

「お前も、お前も、お前も入れー！」

吉香の勢いに逆らえず、次々と牛の餌食となっていく生徒たち。突然の奇行に、周囲から悲鳴が上がる。

「何を騒いでいるんだ、真島……」

「貴様も食われろ、ダメ大人！」

騒ぎに気付いてやってきた北斗の頭も、有無を言わず牛の口にぶっこんだ。

「さあ、次は誰!? 牛はまだまだいるのよ、もっと生贄が必要だわ！」

吉香は高笑いする。自分自身が今、何をやっているのか、頭では何が何だかよく分からなくなってきたが、妙に気分が高まり、楽しかった。

☆彡 ☆彡 ☆彡

急に暴走を始めた吉香を、米斗はどうすることもできずに眺めていた。

すると側に、息を切らした戸呂音が駆けてきた。

「米斗さん、吉香さんを止めてください！ 人工知能の理性を制御する頭のネジが外れて、暴走しているのです！」

戸呂音曰く、昨夜に吉香のメンテナンスを行った際、誤ってネジを一本、閉め忘れたのだという。そのせいで、吉香は我を忘れて暴れはじめたらしい。

「だけど、あんなの、止められるのか……？」

原因は分かったが、穏便に解決できるかどうかは、別問題だった。

米斗は、吉香の背後をとって動きを封じようとするが、如何せん吉香に隙がない。近付こうとすればすぐさま捕まって、牛に向かってぶっこまれる。

うまく懐に飛び込むタイミングが掴めず、米斗は弱りきっていた。

その時、吉香の前に千具良が立ちはだかった。

「何だかよく分からないけれど、吉香ちゃん、落ち着いて！」

千具良は素早い身のこなしで吉香に掴みかかり、その小さい体のどこにあったのか分からないほどの怪力を発揮して、吉香を背負い投げた。地面に叩きつけられた吉香は動きを停止させ、微動だにしなくなった。

気を失ったらしい。

「ナイスです、千具良さん！」

その隙に戸呂音が駆け寄り、首の後ろに素早くネジを突っ込んだ。

「ひとまず、応急処置を致しました……。吉香さん、お気を確かに。大丈夫ですか？」

呼びかけに応じて、吉香はゆっくりと目を覚ました。

「師範代？ なぜ牧場に……。あら、私はいったい、何を？」

起き上がった吉香は、何が起こったのか分からない、といった様子で、辺りを見回して顔を顰める。

「まさか、記憶がないとかいう、ありきたりなパターンか？」

問い質すと、吉香はゆっくりと頭を振り、切なそうな表情を浮かべた。

「いいえ、何をしたか、覚えているわ。どうやら、私らしくない、突っ走った行動をとっていたみたいね。何の罪もない牛さんたちに、謝らなくちゃ」

「何の罪もない兄貴や生徒たちにも、とりあえず謝っとかないか？」

その後、牛に食われた連中はみんな救出された。牛は前の上の歯がないから、噛みつかれてもそれほど大きな被害はなかった。

牛の誕まみれになった生徒たちや北斗に、吉香は順番に謝って回っていた。

☆彡 ☆彡 ☆彡

一通り謝罪を済ませ、吉香が米斗たちのところに戻ってくると、千具良が牛の頭を撫でて楽しんでいた。

牛も大人しそうだし、千具良の精神状態も安定している。

吉香の心配は、杞憂だったのかもしれない。何事もなく、一日が終わりそうだ。

少し、安心しかけた矢先。

千具良が油断した際に、目の前の牛の口が、ぱっくりと開いた。

「千具良、危ない！」

吉香は駆け寄ろうとしたが、間に合わない。

千具良の頭が食われる。その衝撃に、千具良が冷静でいられるはずがない。

驚きのあまり、鼓動が爆発し、地面は崩壊し、地球は滅ぶ。

最悪の未来が、吉香の中でイメージを膨らませた。

だが、そんな最悪の瞬間は訪れなかった。

米斗が素早く、千具良を牛から引き離した。千具良を食べ損ねた牛は、バクリと空気を食べて、そのままモグモグと口を動かし続けている。

一瞬、軽く地面が揺れた。だが、震度1程度の弱い余震だ。大地震の前触れにも程遠かった。

「落合くん……」

「だから、大丈夫だって言っただろう？ 俺だって、今まで兄貴に助けられてきたんだ。兄貴がどうやって俺に刺激を与えないように周囲で立ち回っていたか、だいたい見ていたつもりだ。だから、俺にだって、大事な相手のフォローくらい、できる」

米斗は乏しい表情ながらも、吉香に笑いかけてきた。吉香は体の力が抜け、地面に座り込んだ。

「米斗くん、ありがとう。危なかった。また、吃驚しちゃうところだった……」

「気を付けろよ。牛は大人しいけど、興奮すると危ないから」

米斗は、少し動揺している千具良の頭を、優しく撫でていた。千具良も嬉しそうに、微笑んでいた。

「あの二人は、もう放っておいても大丈夫だ」

二人の様子を啞然と眺めていると、側に北斗がやってきた。涎にまみれた頭を洗ってきたらしく、濡れた髪にタオルを載せている。

米斗たちを見る北斗の表情は妙に冷静で、生気に満ち溢れていた。

戸呂音に捕まる前の北斗に、戻ったみたいだ。

「先生も、なんだか憑きものが落ちたような顔をしていますね」

「牛に頭を食われたら、何だかすっきりした。清々しい気分だよ」

戸呂音に注入されまくった怪しい薬剤の成分が、牛の唾液によって中和されたのだろうか。戸呂音はさぞ、がっかりするだろう。

「真島。俺たちが過剰に心配するほど、あいつらは危なっかしい存在じゃなくなっているんだ。自分の本質や在り方を知ったことで、少しずつ成長している」

北斗の教師らしいまっとうな言葉は、妙に吉香の胸に突き刺さった。

「……そうですか。ではもう、こちらの世界で、私の使命は、終わったのですね」

世界の崩壊を防ぐために、未来の世界からやってきた吉香の使命は、無事に果たされたということなのだろう。

歴史の改変は成功し、あの二人は互いに成長しながら、平穩にこの世界で生きていく。

少し、寂しい気もした。役割を終えた吉香は、この先どこに向かい、何を為すべきか。

吉香が生まれた未来の世界に返っても、もう、作り主である戸呂音は死んでしまって、迎えてくれる人は誰もいない。

本当に、どうすればいいか分からなくなっていた。

ロボットのくせに、燃え尽き症候群なんて人間みたいな症状に悩まされるなんて、滑稽だ。

呆然としている吉香に、北斗が笑いかけた。

「使命ならあるさ。二人の友人であり続けるっていう、大事な使命がな。あいつらを面倒で厄介な奴らだと思わずに、温かい目で見守ってやってくれないか」

友人。

心に響く、心地よい言葉だった。

まだ、吉香にもやれることがある。居場所がある？

楽しそうに談話を続けている二人を見て、吉香の頬は綻んだ。

「悪くないかもね」

立ち上がると、吉香の制服のポケットに入っていた、携帯が振動した。

未来の戸呂音が作った、もう一つの世界との交信が可能な特別な携帯電話だ。戸呂音の死を伝えると同時に機能は停止したと思っていたが、今頃になって再稼働し、数か月遅れの主人のメッセージを届けてきた。

『平和な世界で、たくさんの人たちと幸せに暮らみなさい』

その文面を見ながら、吉香は温かい気持ちに包まれた。

戸呂音がなぜ、吉香を女子高生の姿を模して作ったのか。

今になってみると、少し分かった気がする。

もう、幸せな日常には戻れない戸呂音に変わって、この世界で平和に暮らす。

きっと、そんな願いを込めて、戸呂音は吉香を作ったのだろう。

なら、この先の生活もまた、主から託された、大切な使命だ。

「……はい、マスター」

真島吉香の新しい使命は、今日から始まった。

☆彡 ☆彡 ☆彡

一件落ち着いた牧場。

騒ぎも治まり、大きな災害は回避できたと、戸呂音も安心して帰っていった。牧場の臭いが嫌いらしく、あまり留まっていたくないらしい。お陰で北斗は命拾いした。

帰りのバスの時間まで、あと僅か。残った少ない時間、生徒たちは動物たちとの触れ合いを楽しんだ。

米斗も、千具良と一緒に馬を撫でて楽しんでいた。

ペットショップにも足繁く通っているようだし、元来、動物好きなのだろう。扱いにも慣れていて、馬も嬉しそうだ。

二人の様子を、吉香は遠くから眺めていた。

「よーしよし、人懐っこいな。人参食うか？」

米斗は牧場で購入した餌の人参を、馬に差し出した。馬は喜んで、ボリボリと人参を齧る。

やがて勢い余って、なぜか米斗の頭にまでかぶりついてしまった。

米斗は微動だにしなかったが、やはり突然の出来事に、大きなショックを受けたのだろう。

突如として、空から隕石が、牧場に落下した。

尖りのある、楕円に近い隕石だった。そのため、衝突面積は少なく、地面を突き刺し、大きな亀裂を生じさせた。

隕石が降ってくると必ず円形のクレーターができると思われがちだが、落ちてくる隕石の形状に様々なものがあるという時点で、綺麗なクレーターを形成する確率は極めて低い。多くがいびつな形の穴を開けたり、亀裂を生じさせるという説もあるが、詳しい証拠は見つかっていない。

とにかく、今回、米斗が落とした隕石は、轟音と粉塵と共に、牧場の中を貫く地割れを生み出した。

人や家畜たちが、驚いて慌てふためく。

「隕石が落ちたぞー！」

「地面が割れた！」

みんなは突然の出来事に騒ぎ出すが、幸い、人も家畜たちもほぼ誰もいない場所に落ちたため、地割れに巻き込まれた被害者は一人もいなかった。

ただ一人を除いて。

「富田あー！ 大丈夫かー！」

隕石の落下地点から一番近い場所にいたのは、人払いをして宇宙人を待ち構えていた富田だった。地割れの亀裂は、絶妙に富田の足と足の間を走り、地面を分断して一気に広がっていった。

逃げるチャンスを失った富田は、両足を限界まで開脚させて、地割れの上で踏ん張っていた。

「お股が裂ける！ 誰か、助けてー！」

富田のヘルプを受けて武藤が駆け寄るが、あまりにギリギリのバランスを保っているため、下手に動かさない。

困った武藤は、遠巻きの野次馬たちよりも近い位置で亀裂の観察をしていた、吉香に声を掛けてきた。

「おい、お騒がせ無表情女！ 黙って見てないで、富田救出を手伝え！」

だが、吉香はその場を動かさず、笑みを浮かべた。

「いいの。私はこの世界の行く末を、温かい目で見守るって、決めたから」

「訳の分からんこと言うなー！」

吉香は全ての雑音を遮断し、晴れやかな気持ちで、空を見上げる。

今日も一日が、平和に終わった。

お久しぶりです。もしくは初めまして。  
幹谷セイであります。

数か月ぶりの新作は、少し不思議な学園パニックラブコメ。

初めて書いたラブコメかもしれません。

かなり昔に書いた作品ではありますが、今でも充分読むに堪える作品であると判断したので、修正を施してこのたび出版することにしました。

今回は、昔書いたものに加えて、本編の後日談となる短編も一緒に収録してあります。

これはこの作品を某小説投稿サイトに載せた際に、読んで下さった読者様から続きが読みたいというリクエストを頂いて、消化不良になっていたエピソードを加えようと新しく書き直したものです。

しかし、十年経ったこのタイミングで、昔の作品の続きなんて書けるのか。

小説や漫画などは、人にもよるでしょうが、その時その環境でないと書けない世界観、というものが存在します。私にも恐らくそういうものがあると思いますし、こういった青春ものは、まだ学生だった当時だったから書けたのであって、今の社会の荒波にもまれて擦れてしまった自分に、新たに表現できるのか。

心配ではありましたが、書いてみると意外といけるもんだなと、出来栄えを自画自賛しておる次第です。お陰で少し自信がつけました。

長い時間を経て復活&新生したココロノコドウの物語を、楽しんでいただけたら幸いです。

今回も表紙はラノベらしい、かわいいイラストで飾ろうと思っていたのですが、いかんせん私生活に余裕がなく、絵師さんを探す時間も惜しまれる現状にありまして。

それでも作品だけは先に出しておきたいという欲求に抗えませんでしたので、今回はとりあえず仮の表紙を使用するという妥協案で出版することにしました。あとで簡単に修正ができるところが電子書籍のいいところでもありますね。

また後日、時間にも心にも余裕が戻りましたら、新しい表紙を作成して差し替えたいと思っております。

次は残りの無料作品&新作を発表できるように精進していきたいです。

最後までお読みいただき、ありがとうございました！

## ココロノコドウ

<http://p.booklog.jp/book/117311>

著者：幹谷セイ（せい。）

著者プロフィール：<http://p.booklog.jp/users/mikki0723seim/profile>

感想はこちらのコメントへ

<http://p.booklog.jp/book/117311>

電子書籍プラットフォーム：パプー (<http://p.booklog.jp/>)

運営会社：株式会社トゥ・ディファクト